隼（はやぶさ）遺跡（いせき）

国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う発掘調査報告書

2018.3

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

調査区遠景（隼山を東南方向から）

調査区遠景（正面から　左：大黒窟　右：大士窟）

巻頭写真２

大黒窟の完掘状況

大士窟の完掘状況

隼遺跡発掘調査のあらまし

隼遺跡は、山梨県山梨市牧丘町隼地区にある、２つの窟遺構からなる遺跡です。遺跡は、2011 年に周知の埋蔵文化財包蔵地となりましたが、江戸時代の地誌である『甲斐国志』には、隼山に二つの窟があり、「大黒窟」と「大士窟」と呼ばれ、その大きさが記されています。今から 200 年ほど前の江戸時代後期には、すでに２つの洞窟が口を開けており、地域に知られる存在でした。今回の発掘調査にあたり、大きく開口したほとんど自然の洞窟を大士窟、工具を使って人力で四角く掘り込んであると考えられる岩陰状の石窟を大黒窟としました。大士窟は奥に石仏を２体配し、現在でも隼地区の地域住民に「穴観音」として親しまれています。

隼遺跡は、国道 140 号に面する隼山の東側、急傾斜地に位置していますが、落石や土砂の崩落が危険視されています。このたび、山梨県県土整備部峡東建設事務所が進めている、崖面の落石防止・崩落防止対策工事に伴って、記録保存を目的とした発掘調査をおこなうこととなりました。

調査着手前の隼遺跡
（右に大士窟、左上に大黒窟）

大黒窟の調査風景
落盤して堆積した岩石を取り除いています。

①大黒窟の調査

大黒窟は、大士窟より標高が高い位置にあり、調査前の現状ではロープを使用しなければ登れないほどの断崖に開口していました。「なぜこんな高くて危険なところに？」と思わずびっくりしてしまいます。窟は、隼山を形成する窪平泥流堆積物に含まれる軽石凝灰岩を、人力で掘り出して造られています。壁面には工具（ノミなど）の跡がびっしりついています。大黒窟は積年の崩落土砂や、落盤した天井でかなり埋まっていました。土砂を除去すると、平坦な床面が出現し、奥壁の幅 4.5 m、奥行き 3.5 m、高さ 1.9 mの直方体の空間を造りだしていることが分かりました。奥壁を掘り込んで壇を設けています。

では、大黒窟が造られた時期はいつ頃で、造られた理由はなんだったのでしょうか？窟の中からは、残念ながら遺物が出土せず、この問いに対する明確な答えを出すことは難しいものでした。そこで、同じような形で、同じような加工がされた石窟を探してみることにしました。

大黒窟の壁と大きさ

鎌倉を中心とした地域には、「やぐら」と呼ばれる石窟が、13 世紀～ 15 世紀ころに数多く造られます。大黒窟の形は、この「やぐら」にそっくりで、まさしく山梨県で造られた「やぐら」であると考えられます。実は、やぐら状の石窟は、分布が集中する鎌倉や三浦半島、南房総をはじめとして、宮城、石川、大分など国内に点々と存在しています。おそらく、大黒窟もこのような流れの中で、中世に造られたのだと思います。

ただし、一般的な「やぐら」の多くはお墓として使われますが、大黒窟の場合はお墓である根拠はつかめません。一方で、大黒窟には、床面を走る３本の溝と、それに対応する奥壁のほぞ穴があり、窟の床面に板を張っていた時期があると考えられます。ふもとには、廃寺になったお寺があったと推定され、お寺に伴うお堂として、礼拝所のような役割を持っていたのかもしれません。その場合、奥の壇には仏像などを置いていたのかもしれません。

②大士窟の調査

大士窟は、自然にできた洞窟ですが、奥の一部の空間は、ツルハシのような工具で掘り込んでいます。調査前の時点では、「天明六年」銘の馬頭観音石仏があることや、洞窟の一番奥に３つの小穴があること、両壁に対応するようにほぞ穴が穿たれていることなどが分かっていました。江戸時代に遡る、これらの信仰に関わるお堂のような建物跡の存在が期待されました。

調査前の大士窟

大士窟の１号台座。仏像が置かれた？

同時に、大士窟は山岳修験（さんがくしゅげん）に関係する遺跡、いわゆる「修行窟（しゅぎょうくつ）」なのではないか、ということがすでに専門家によって指摘されていました。修行窟は山岳信仰をおこなう修験者たちが、修行のために籠る施設とされ、山梨県内でも甲府盆地の北部地域を中心に十数例存在すると考えられています。

こうした課題をもとに、発掘調査を進めていきました。すると、大士窟は、いくつかのステージをもって捉えることができました。

第１ステージは、中世から江戸時代前半頃です。大黒窟が造られた頃に、大士窟も利用が始まったものと考えられます。洞窟奥壁の小穴のうちの一つには、台座状の石が置かれていました。石仏などを置いていたのかもしれません。洞窟の奥のほうから寛永通寶（かんえいつうほう）が出土するなど、奥の空間を神聖視していたと思われます。

大士窟１号トレンチの堆積状況

大士窟第２面　焼土や炭化物が広がる

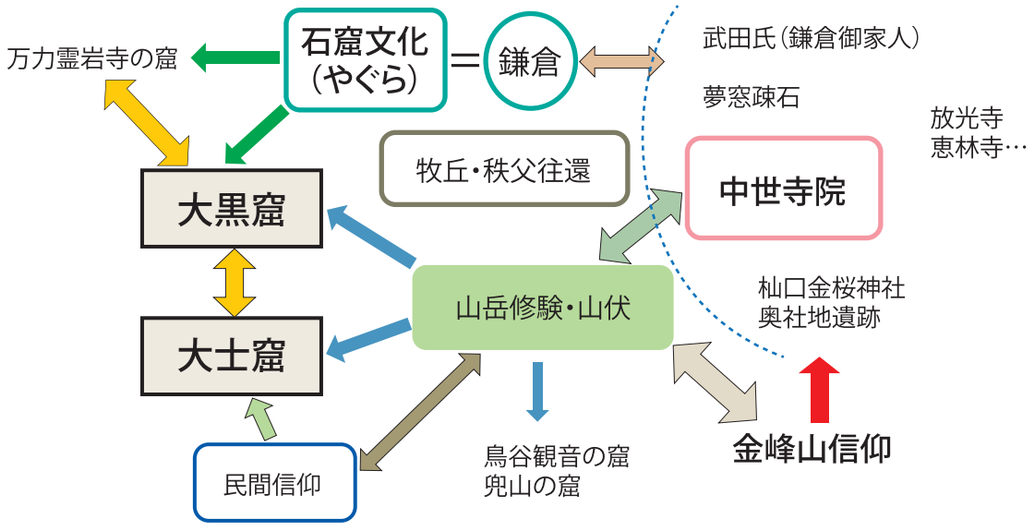
第２ステージは、江戸時代後半から明治初頭頃にかけての段階です。洞窟の中を一度整地した痕跡が確認され、礎石の跡や、焼土・炭化物層が確認されました。この礎石は列をなし、両壁のほぞ穴と合致することから、洞窟内に間仕切り状の施設を構えていたことが判明しました。この整地された層の直上からは、江戸時代末頃を中心とした茶碗類や坏類が出土しています。

第３ステージは、明治中頃から現代にいたるまでの段階です。昭和初期頃を前後して、一度窟内の天井が崩落したような堆積

が確認されました。その後、再び整地をおこなって、２体の石仏と、石造物（灯篭の笠）を据え置いたと考えられます。

以上のように、発掘調査からは、いくつかの時代の画期を示す出土遺物や、礎石などの遺構が確認されました。こうした成果から一歩踏み込んで大士窟を解釈してみましょう。大士窟が利用されるようになった頃は、やはり山岳修験との関係が想定できるでしょう。神仏を奥の空間に配して、窟内で座禅などを組み、銭貨を奉納することがあったかもしれません。その後、建築物が築かれたことは、窟内の利用が修験者以外の人々へ開かれたものになったことを意味すると思われます。大黒窟と同じく、麓の寺院の施設の一つだったのかもしれません。その後は民間信仰とも融合し、馬頭観音が祀られ、窟内でお神酒を奉じるようなお祀りがおこなわれるようになっていったのだと思います。

③隼遺跡の発掘調査からみえるもの



隼遺跡は、山梨・牧丘地域を巡る様々な課題を包括しています。まず中心にあるのが、この地域における山岳修験の実態です。修験道は明治年間に廃止され、その際に多くの修験系の寺院が転宗、廃絶してしまいました。中世から近世にかけての修験の人々（山伏）が、当地でどんな活動・信仰をしていたのかは、よくわからないことが多いのです。一方で、牧丘周辺地域で中世に栄えた大寺院の存在も無視することはできません。鎌倉幕府とのつながりをもつ全国的にも有名な仏師夢窓疎石は、牧丘で浄居寺や放光寺を開いています。それが、直接的な契機かは分かりませんが、大黒窟で確認された「やぐら」状の石窟も、牧丘地域と鎌倉との関係（政治的・宗教的）の中で造られたのかもしれません。

山梨県の修験道に係わる洞窟遺跡や山岳寺院については、一部で調査も行われていますが、その実態はまだまだ解明されていません。本書が、そのような貴重な修験道に関わる洞窟遺跡の調査事例として永久に保存され、この地域における学習や研究の機会に用いられることを願っています。

序　文

本書は、平成28（2016）年度に発掘調査が行われた隼遺跡の発掘調査報告書です。この発掘調査は、山梨県県土整備部峡東建設事務所による国道140号落石防止・崩落防止対策工事に伴って実施されました。工事は、国道140号の安全な通行を確保するために落石や斜面の崩落等を防止するための事業で、継続的に行われています。

隼遺跡は、平成23年に周知の埋蔵文化財包蔵地として発見された遺跡で、山梨市牧丘町隼地区に位置しています。遺跡は２つの窟遺構で構成されており、隼山の斜面に東南方向を向いて開口しています。遺跡として登録されたのはごく最近のことですが、実は江戸時代の地誌である『甲斐国志』に、既に隼山に二つの窟があることが記載されております。また地域住民にも「穴観音」として親しまれています。

江戸時代の『甲斐国志』には、「大黒窟」と「大士窟」の記載があり、その大きさも記載されています。発掘調査にあたり、大きく開口したほとんど自然の洞窟を大士窟、工具を使って四角く掘り込んであると考えられる石窟を大黒窟としました。大士窟の発掘調査からは、台座や礎石と捉えられる平坦な石が見つかり、窟内に建屋を設けていたと考えられること、焼土や炭化物を含む層が一面に広がっている様子から、護摩焚きを行っていた可能性があること、遺物の出土状況等から、修行窟から民間信仰への移行を確認できたことなどの成果があります。一方大黒窟は、ほとんどが崩落した土石で埋まっており、それを除去すると、鎌倉地方で主にみられる「やぐら」とよばれる石窟に類似することが分かりました。山梨で「やぐら」との共通性を発掘調査によって確認できたのは、初めての例になります。隼遺跡は、金峰山信仰と富士信仰を結ぶ道である秩父街道、別名行者道にあり、金峰山登拝口も近いことから、金峰山入峰の際の祈願・祈祷場所としての役割も兼ねていた可能性が指摘できます。

発掘調査終了後、当初の予定では大士窟の穴の形は残して、ほとんどモルタルによって埋められてしまう予定でしたが、峡東建設事務所のご協力もあり、計画を一部変更して、遺跡の様子が分かるように施工されました。本書が、地域における歴史学習や研究のために、多くの方にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたりご指導・ご協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼申し上げます。

２０１８年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　中　山　誠　二

例　言

1　本書は隼遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の調査原因は、国道140号落石防止・崩落防止対策工事に伴うものである。原因者は山梨県県土整備部峡東建設事務所である。

3　遺跡は山梨県山梨市牧丘町隼地内に位置する。代表地点は山梨市牧丘町隼字坂ノ上2398番地8である。

4　発掘調査・整理作業・報告書刊行は山梨県県土整備部からの依頼を受け山梨県埋蔵文化財センター（甲府市下曽根町所在）が実施した。平成28年度・29年度の調査体制は次の通りである。
調査主体　山梨県教育委員会　　調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所長　中山誠二　　次長　高野玄明
調査研究課長　今福利恵　　史跡資料活用課長　保坂和博
調査研究課調査第三担当リーダー　網倉邦生（平成28年度）
調査研究課リーダー　笠原みゆき・吉岡弘樹（平成29年度）

5　発掘調査は、熊谷晋祐（文化財主事）、井上彰雄（主幹・文化財主事）、塩谷風季（非常勤嘱託）が担当し、整理作業は、熊谷、浅川一郎（主幹・文化財主事）が担当した。作業員については次の通りである。
発掘作業員　新谷博朋　鮫田勝夫　鶴田晴夫　新津茂　望月君雄
整理作業員　猪俣順子　小池美保子

6　本書の執筆・編集は熊谷晋祐が行った。また、第４章については、分析を委託した株式会社加速器分析研究所が執筆し、一部熊谷が加筆修正した。

7　遺構の写真については熊谷・井上・塩谷が撮影し、遺物の写真は熊谷が撮影した。

8　発掘調査の期間は、事前測量期間を含めて平成28年6月1日から9月2日まで実施し、基礎的整理作業を平成28年10月1日から12月22日まで実施した。平成29年度本格的整理作業ならびに報告書作成を平成29年10月23日から平成30年3月16日まで実施した。

9　出土遺物の整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。出土金属製品の保存処理は、公益財団法人山梨文化財研究所に委託した。

10　本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

11　発掘調査に係り山梨県教育庁学術文化財課が調整機関となり、埋蔵文化財担当橋本尚一が担当した。

12　調査にあたって、立正大学文学部教授である時枝努氏に講師依頼し、発掘調査現場において所見をいただいた。また、国土座標による基準杭の測量、RCヘリによる遺跡全体の写真実測及び航空空中写真の撮影、3Dレーザー測量及び写真測量による図化作業は、株式会社テクノプラニングに委託した。窟遺構内における安全設備の設置・解体については、奥山建設株式会社に委託した。出土した炭化物の年代測定及び炭化材の同定については、株式会社加速器分析研究所に委託した。なお、遺構の測量及び図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。

13　調査にあたり、次の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。（敬称略）
河西学　清雲俊元　櫛原功一　倉田由和　佐藤仁彦　鈴木一議　玉林美男　時枝努　三澤達也
橋本裕行　畑大介　山梨市教育委員会　天川工業株式会社　霊岩寺

凡　例

1　遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。原則として、遺跡全体図を 1/400、窟遺構部分図は 1/60及び 1/80、礎石は 1/20、その他遺構を 1/40 とし、遺物は、土器・陶磁器1/2及び 1/3、古銭 2/3、金属製品は 1/2 とした。

2　遺物の注記は、光波を使用して取り上げた遺物については「隼Ｐ□」、一括遺物については「隼○面△（出土地点）」とした。

3　遺物実測図は原則口径あるいは底径が復元できるものを基準に選定した。

4　遺構図版中のマークは遺物を示しており、付された番号はそれぞれの遺物に対応している。
遺物のマークは次の通りである。

●　土器・陶磁器　　□　金属製品　　△　銭貨　　◇　骨・貝

5　遺構及びトレンチ土層断面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。

6　遺構図版中の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』1990年度版による。

7　遺構の写真はコンパクトデジカメ及び 35mm フィルムカメラで撮影した。

8　本報告書中、第2図遺跡分布図は、国土地理院発行の「塩山」1/25,000地図を、第3図詳細遺跡分布図は、山梨市役所発行の「山梨市全図 その 3」1/10,000地図、第24図牧丘周辺の修験関連地図は、国土地理院発行の「甲府」1/200,000地図をそれぞれ利用した。

9　付属の DVD には、隼遺跡の両窟で取得した 3D レーザー測量データ等を記録している。付録内容は１. 3D-PDF 形式データ、２. 窟内オルソ画像、３. Obj 形式データ（メッシュデータ）、４. Pod 形式データ（点群データ）、５．点群ビュアーフリーソフト（Pointools View Pro 1.8）、６．報告書掲載写真（デジタル jpeg データ）である。点群ビュアーソフトは、インストール後に点群データ等をインポートすることで 3D 画像を見ることができる。

目　次

巻頭写真図版
あらまし
序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の目的と課題 …… 2
　第３節　発掘調査の経過 …… 2
　第４節　整理作業等の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 8
　第３節　民俗 …… 9
第３章　調査の方法と成果 …… 15
　第１節　発掘調査の方法 …… 15
　第２節　トレンチ層序 …… 15
　第３節　遺構 …… 19
　　（１）大黒窟　（２）大士窟
　第４節　遺物 …… 33
第４章　自然科学分析 …… 37
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 37
　第２節　樹種同定 …… 40
第５章　総括 …… 42
　第１節　自然科学分析についての所見 …… 42
　第２節　大黒窟の考察 …… 42
　第３節　大士窟の考察 …… 44
　第４節　隼遺跡の歴史的意義 …… 46

写真図版
報告書抄録・奥付

挿　図　目　次

第1図　隼遺跡周辺地質図 ……5
第2図　隼遺跡周辺遺跡分布図 ……6
第3図　詳細遺跡分布図 …… 10
第4図　隼遺跡全体図および国土座標グリット図 ……11,12
第5図　隼遺跡全体立面図 ……13,14
第6図　大士窟トレンチ設定図および1号トレンチ断面図 …… 16
第7図　大士窟２～６号トレンチ断面図 …… 17
第8図　大黒窟基本土層図 …… 18
第9図　大黒窟展開図(1)…… 20
第10図　大黒窟展開図(2)…… 21
第11図　大黒窟遺構詳細図 …… 22
第12図　大士窟展開図 ……23,24
第13図　大士窟縦横断面図(1)…… 25
第14図　大士窟縦横断面図(2)…… 26
第15図　大士窟第１段階遺構分布図 …… 29
第16図　大士窟第２段階遺構分布図 …… 30
第17図　大士窟第３段階遺構分布図 …… 31
第18図　大士窟遺構図面および遺物垂直分布図 …… 32
第19図　遺物図版(1)…… 34
第20図　遺物図版(2)…… 35
第21図　千手院1号やぐら実測図 …… 42
第22図　大士窟建築物復元図 …… 44
第23図　窟の諸例 …… 45
第24図　牧丘地区の修験関連地図 …… 46

表　目　次

第１表　隼遺跡周辺遺跡一覧表 ……7
第２表　出土遺物一覧表 …… 36
第３表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値） …… 38
第４表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用^{14}C 年代、較正年代） …… 39
第５表　樹種同定結果 …… 40
第６表　隼遺跡をめぐる年表 …… 47

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

隼遺跡の発掘調査は、国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴うものである。この事業は山梨県県土整備部峡東建設事務所によって進められているものであり、一般国道 140 号道路防災工事として、隼遺跡の位置する隼山の東斜面において工事に着手している。平成 20・21 年度の工事設計時は、まだ周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったため、県の開発事業照会において対応されなかった。平成 22 年度に工事着手したところ、工事予定地に遺跡があることが判明し、埋蔵文化財包蔵地として隼遺跡が周知された。その後、しばらくの間は遺跡の範囲外において崩落防止対策工事が施工されていたが、平成 28 年度に隼遺跡の位置する斜面についても施工されることとなった。平成 28 年 2 月 2 日付で、峡東建設事務所より山梨市教育委員会を経由して文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。しかし、この折、本来は県が調査機関となるべきところ、山梨市教育委員会に発掘が依頼された。教育庁学術文化財課では、同 2 月 24 日にこの件に関して山梨市教育委員会と峡東建設事務所に聞き取りを実施し、県教育委員会が対応することを確認した。3 月 2 日には学術文化財課と埋蔵文化財センター、峡東建設事務所、山梨市教育委員会の四者による協議を実施し、工事期間や工法、留意点などについて協議をした。この時点で既に施工業者と契約行為が交わされていたため、試掘調査を実施せず、平成 28 年夏を目途に本調査を実施することが決まった。4 月 19 日には県土整備部道路管理課長と学術文化財課長の間で覚書が締結され、翌 20 日には新体制で学術文化財課、埋蔵文化財センター、峡東建設事務所、施工業者である天川工業株式会社の四者による現地協議を実施した。その後も同じく四者において、5 月 23 日、6 月 28 日と協議を重ね、発掘調査にむけて調整を続けた。

さて、隼遺跡は二つの窟遺構で成り立っている。詳しくは次章で述べるが、江戸時代の地誌『甲斐国志』の記載にならって、それぞれ大黒窟と大士窟と呼ぶ。

大士窟は現在も「穴観音」として民間信仰の対象となっており、施工にあたっては窟内に石仏を祀る空間を残すことが、地域住民と峡東建設事務所の協議により決まっていた。このため、工事計画では窟を完全にモルタルで塞いでしまうのではなく、窟内にライナープレートを設置し、トンネル状の安全な空間を造りだし、奥壁付近はモルタルにより充填することとなっていた。また、大士窟に至るまでの登山道も、安全性を高めたものに整備することとなった。一方、大黒窟については、モルタル等により完全に塞ぎ込められる予定となっていた。

発掘調査にあたっては、洞窟遺跡という特殊な遺跡であることから、3D レーザー測量による点群データの獲得を重要視した。モルタルの吹付によって窟内の形が失われてしまうため、3D 空間において復元可能な情報を得る必要があった。ただし、調査前の現状では、洞窟内の天井は今にも崩れ落ちそうな状態であったため、崩落から作業員の安全性を確保する必要もあった。そのため、3D 測量を前半と後半に分割し、調査着手前に前半として天井・側壁上部の測量を実施、その後モルタルによって天井部を吹き付け、安全性を確保し洞窟内を発掘調査した後、後半として側壁下部及び床面の測量を実施することとした。また、発掘調査は原則的に窟内部に収まる範囲で実施した。二つの窟に至るまでの登山道は現状でも安定しておらず、窟を頻繁に使用していた中近世の道路痕跡は、既に崩落していたと考えられる。

このように、様々な留意点を抱えながら、平成 28 年 6 月 1 日より測量調査・発掘調査に着手した。

なお、今回の埋蔵文化財発掘調査に係わる法的手続き等は以下のとおりである。

・平成 28 年 2 月 2 日　文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が山梨県峡東建設事務所から山梨県教育委員会教育長宛に提出される（峡東建第 7769 号「埋蔵文化財発掘の通知について」）。

・平成 28 年 3 月 7 日　文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の通知についての返答が、山梨県教育委員会教育長から山梨県峡東建設事務所宛に提出される（教学文第 3615 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」）。

・平成 28 年 4 月 19 日　国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県県土整備部道路管理課と山梨県教育委員会学術文化財課で締結。
・平成 28 年 7 月 12 日　文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第 310 号「埋蔵文化財発掘調査の実施について」）。
・平成 28 年 9 月 8 日　文化財保護法第 100 条第 2 項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、日下部警察署への通知を依頼（教埋文第 495 号「埋蔵文化財の発見について」）。
・平成 29 年 4 月 28 日　国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書（本格的整理作業、報告書作成・刊行）を山梨県県土整備部道路管理課と山梨県教育委員会学術文化財課で締結。

第 2 節　調査の目的と課題

隼遺跡の二つの窟遺構は、地域の歴史を示すものとしても非常に価値のあるものである。特に大士窟は、地域住民から「穴観音」と呼ばれ石仏が祀られている。この地区のアイデンティティともよべる遺跡である。地中から得られた情報を記録として永久的に保存し、地域に還元することが第一の目的である。

また、二つの窟遺構は、中世から近世の修行窟の可能性があるとされる、貴重な事例と評価されている（櫛原 2006）。山梨県では笛吹市春日居町の兜山で、10 世紀前半の土器が採集された修行窟の存在が知られている（兜山遺跡群調査グループ 2005）ほか、櫛原氏によって 10 数例が整理されている。修行窟は全国的な類例からしても発掘調査された事例は極めて少なく、その構造や性格についての知見を得ることは、我が国の宗教文化史を解明する上でも重要である。

調査上の課題として、次が挙げられる。二つの窟遺構のうち、大士窟については、主軸に直交して両側壁に対になるほぞ穴が調査前の現状で確認されていた。このほぞ穴を使用した建屋の存在が推定されるため、礎石などの遺構の存在を確認する必要がある。また、大士窟の奥壁には 3 つの横穴が上半部のみ現状で確認されていた。この横穴について、洞窟遺構のなかには胎内巡りのように奥に続く事例もあるため、規模や性格について調査する必要がある。また、大士窟は現状でかなりの量の崩落土が窟内に堆積していると考えられた。修行窟であれば中世や近世の遺構面が存在すると考えられ、またその下層にも縄文時代などの洞窟遺跡にかかわる遺構・遺物が想定された。面的な調査とトレンチ調査による下層の状況把握が必要であった。

大黒窟は、すべて手彫りによって岩盤を刳り抜いていることから、鎌倉文化圏で多くみられる「やぐら」との類似性が指摘されていた（櫛原前掲）。発掘調査を進めている段階で、「やぐら」の類例とみてほぼ間違いないという見解を得ることができた。遺跡の考察にあたって、なぜこの地に「やぐら」状の石窟があるのかということが課題となった。

第 3 節　発掘調査の経過

第 1 節でも述べたとおり、隼遺跡の発掘調査は平成 27 年度末に緊急的に計画されたものであった。当初発掘調査を実施する予定であった山梨市教育委員会、及び公益財団法人山梨文化財研究所の櫛原功一氏に意見を伺いつつ、平成 27 年度に塩谷風季と網倉邦生調査第三担当リーダー、今福利恵史跡資料活用課長により大略の調査計画を立案した。その後、平成 28 年度以降の調査担当者で、事業主体者と協議を重ねながら詳細に調査を計画していった。

写真測量及び 3D 測量については株式会社テクノプラニングに業務委託し、窟内天井をモルタル吹付する都合上、前半と後半に分けて実施した。前半は、各窟の天井及び側壁の上部を対象として、6 月 1 日～ 5 日を準備期間とし、6 月 6・7 日に実施した。同時に 4 級基準点測量及び、ラジコンヘリコプターによる航空空中写真撮影、遺跡全体図化用の写真撮影を、同じく株式会社テクノプラニングに委託し、実施している。6 月 6 日及び 8 日には、調査担当で発掘調査実施前状況の写真撮影を行った。

事前の協議において、調査員及び作業員の休憩棟・トイレ・倉庫の設置は、現状で空き地となっているスペースを使用する事となっていたが、設備の搬入のためには整地する必要があり、再度協議を行い発掘調査

経費により整地を行うこととなった。6 月 27・28 日にオペ付きバックホウによるプレハブ設置のための整地を実施、6 月 29 日にプレハブ等の設備搬入、6 月 30 日には発掘調査機材等を搬入した。

また、窟内の安全性を高めるために、大士窟の窟内に単管パイプによる組み立て式の簡易安全設備の設置と、大黒窟の窟内に安全帯を掛けるための設備の設置について、奥山建設株式会社に設計・施工・管理を業務委託した。安全設備設置の契約期間は 7 月 7 日より 9 月 2 日であり、7 月 7・8 日に設備の設置、8 月 18 日に設備を一時撤去した。

発掘調査は 7 月 1 日より作業員を雇用して本格的に着手した。大黒窟は 7 月 1 日より調査を開始し、厚く堆積していた崩落土石をハンマーやノミで小さく砕いた後に除去、7 月 13 日には全ての崩落土石を除去して床面を精査、7 月 15 日には掘り上がった。7 月 25 日に完掘状況の写真撮影及び窟内下半部の写真測量・3D 測量を実施した。

大士窟は 7 月 1 日～6 日に 1 号トレンチ及び第 1 面の調査、7 月 5 日に第 1 面の写真撮影を実施している。一時大黒窟で主体的に調査をした後、7 月 15 日より大士窟の調査を再開。随時トレンチを増やしながら、7 月 20 日より第 2 面の調査へと移行し、礎石などが検出される。また、窟内にある石仏、石造物については一度移設する必要があるため、7 月 29 日に施工業者が地元僧侶にお祓いを依頼（峡東建設事務所、埋蔵文化財センターも立会）、8 月 1 日に石仏・石造物を窟外へ運び出し、石仏等の設置されていた下層についても調査を進める。1 号トレンチでは、奥は地盤となりつつあったが、手前は 2 面より下層に厚い堆積が確認されたため、さらに拡張および下層の調査を進めていった。同時に奥壁に見られる横穴遺構も調査を行った。8 月 16 日には 1 号トレンチ西側の堆積土精査中に 18 世紀代の陶器片が出土する。8 月 19 日に大士窟下半部の写真測量・3D 測量、8 月 23 日に大士窟完掘状況の写真撮影を実施した。

窟遺構という特殊な遺跡であることから、県内外より専門家を招いて教授を得た。8 月 17 日には、立正大学文学部の時枝務氏（修験道考古学）に来訪いただき、県内の諸窟との比較検討を行った。8 月 24 日には県文化財保護審議会の元会長である清雲俊元氏に来訪いただき、周辺寺院との関係について所見を賜った。8 月 25 日には公益財団法人山梨文化財研究所の河西学氏に来訪いただき、窟の形成地層についての所見を賜った。また、同研究所の櫛原功一氏には数回に及び来訪され所見をいただいた。8 月 23 日には、地元の西門地区の住民向けに遺跡見学会を実施した。

8 月 24 日から 26 日にかけて、窟内部の埋め戻しを実施、埋め戻しは奥の横穴などは埋めず、手前側を中心に実施した。8 月 29 日から 9 月 2 日にかけて、機材・プレハブ等の撤収作業を行い、調査を終了した。

調査成果については平成 28 年 10 月 22 日に開催された、平成 28 年度上半期遺跡調査発表会において報告を行っている。

これらの調査成果を受け、遺跡の重要性が指摘できることから、学術文化財課と峡東建設事務所の協議の結果、計画変更が行われ遺跡は猶予的に一部現地で保存されることとなった。現状では、大黒窟は形がわかる程度でのコンクリート吹付が行われており、大士窟は窟内にライナープレートを窟半分まで埋め込み、天井が安定している奥側は吹付をせず、石仏を再度安置している。

第 4 節　整理作業等の経過

今回の発掘調査において、窟内より出土した土器・陶磁器片、金属製品などは、プラスチック収納箱にして 1 箱である。これに加えて、大黒窟の天井石の破片及び石製加工品の可能性がある礫片を持ち帰り収蔵した。

平成 28 年度は、平成 28 年 10 月 1 日から 10 月 31 日まで、遺物の洗浄・注記・接合・実測作業及び遺構の図面整理･写真整理等の基礎的整理作業を実施した。また､10 月 17 日から 12 月 22 日までの契約において、出土炭化物の炭化材同定及び AMS 炭素同位体年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託している。平成 29 年度は、平成 29 年 4 月 28 日に国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書が交わされ、平成 29 年 10 月 23 日より、遺物実測図のトレース、遺構図面の作成、図版の作成などの本格的整理作業を実施し、平成 30 年 3 月 16 日に発掘調査報告書を刊行した。

報告書執筆にあたり、地元住民で当地の歴史・民俗に詳しい倉田由和氏に、平成 30 年 1 月 5 日聞き取り調査を実施し、その成果を第 2 章第 3 節に掲載した。

調査着手前の大黒窟昇降状況

調査着手前（モルタル吹付後）

施工完了後の遠景
大黒窟は位置が分かるように施工している。

施工完了後の大士窟内部
窟内奥には再度石仏が設置された。

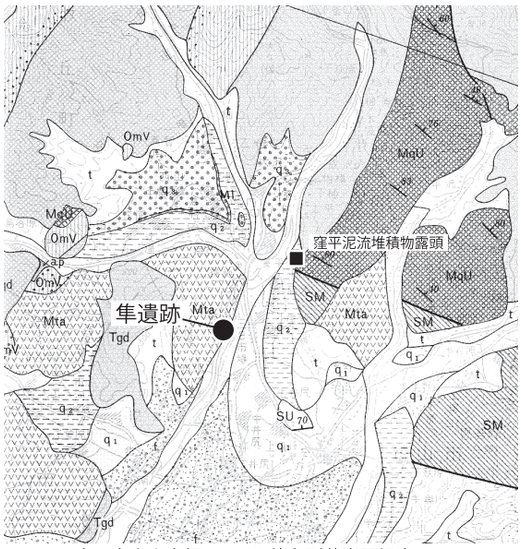
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、甲府盆地の北東部、山梨市牧丘町隼地内に位置する。牧丘町は、2005 年に旧山梨市、三富村と合併し、新制の山梨市となった。旧牧丘町において隼地区は町内最南端にある。山梨市は東に甲州市、南に笛吹市、西に甲府市と隣接し、北は埼玉県秩父市と長野県川上村に接している。山梨市内には甲武信ヶ岳を源流とする笛吹川が流れており、甲府盆地底部に広大な氾濫原をもたらしている。市域北端の県境では、甲武信ヶ岳（2,457m）、国師ヶ岳（2,592m）、朝日岳（2,579m）、鉄山（2,531m）、金峰山（2,599m）などの山岳（秩父山地）が峰を連ねている。

遺跡のある隼山は南北２ｋｍほど舌状に尾根が延びる丘陵状の小山で、緩やかに南側に向かって斜面地を形成している。現在では緩斜面一帯に果樹園が広がっている。一方で東側には笛吹川の開析の影響を受け、急傾斜地が作り出されている。標高で示すと麓の国道 140 号では約 435 m、窟は約 475 mで、550 mほどで頂部に達する。麓からは 100 m以上の比高差がある。この東側の斜面地には、いくつかの入り組んだ谷が谷戸状に形成されている。山から流れ出す雨水などによって山が削られ、谷部が発達している。今回の調査原因となったのも、東側斜面で進行するこの土砂崩落である。

さて、当地域の基盤は四万十累層群からなり、これに新第三紀の深成岩類と新第三紀及び第四紀の火山岩類が広く分布する。低地では、段丘を構成する堆積物と笛吹川扇状地などを構成する沖積層が分布する。このうち、新第三紀の火山岩類は、古い時代のものから太良ヶ峠火山岩、小樽山火山岩、水ヶ森火山岩に分類される。隼山を構成するのは、鮮新世の水ヶ森火山岩であり、小樽山火山岩を覆っている。水ヶ森火山岩は非変質の安山岩で、陸上で噴出し堆積したと想定される岩層であり、山口軽石凝灰岩、塔岩火砕流堆積物、片山溶岩から構成される。さらにこれらを覆うのが窪平泥流堆積物と呼ばれる泥流堆積物である。窪平泥流堆積物は、片山溶岩分布域の下流域に多く、牧丘町窪平周辺をはじめとして、甲府盆地の周縁丘陵地や亀沢川・荒川沿いに分布する。泥流堆積物は、「鼓川と笛吹川合流点下流右岸や隼西崖などで山口軽石凝灰岩を不整合に覆う。（中略）江曽原南の河床で、地質図には表現していないが、塔岩火砕流堆積物の小露頭があり、これを覆っている」（三村他 1984）とある。



Mta：水ヶ森火山岩類　Tqd：徳和型花崗閃緑岩
段丘：q1= 低位，q2= 中位，q3＝高位　t：崖錐堆積層

第１図　隼遺跡周辺地質図
（山梨県 1970『山梨県地質誌』地質図に加筆）

２つの窟遺構が形成されるのは、この窪平泥流堆積物中であると考えられる。大黒窟は人工の窟で、窪平泥流堆積物が取り込んだ山口軽石凝灰岩の露頭を掘り込んだと想定できる。山口軽石凝灰岩は黄色系の軽石を主とした凝灰岩・凝灰角礫岩であり、粘土化が著しく、若干固結が進む。凝灰岩は軟らかく、石材の加工が容易である。山口軽石凝灰岩と考えられる石材が、山梨市域の古代のカマド構築材として使用されている例もある（河西 2014）。一方、大士窟は固結した窪平泥流堆積物に自然に開口した洞窟と推定される。泥流堆積物は、それ以前の岩塊を含み、礫質あるいは砂質の層や淘汰の悪い凝灰角礫岩状の見かけの層などにより成層される。大士窟内の右壁床面付近は砂質となっており、ラミナを確認することができる。

交通についても述べておきたい。現在隼遺跡の目下を南北に通る国道 140 号は、雁坂道や秩父往還などと通称される。ここでは山梨県 1984 に基づき秩父街道と呼ぶ。その名のとおり雁坂峠を越えて甲斐国から秩父へ抜け、北関東などへ向かう最短距離の道である。古代以前より考古遺物によって両地域の移動・交流が考えられているが、戦国時代には秩父街道が多用されるようになり、警備のための関所も配備されるように

第２図　隼遺跡周辺遺跡分布図

第１表　隼遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	高野遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
2	田処遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
3	但馬屋敷	館跡	中世
4	大石遺跡	散布地	縄文
5	上野田遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
6	上野田東遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世
7	大久保遺跡	散布地	縄文
8	牧ノ野前遺跡	散布地	縄文
9	薬師堂遺跡	散布地	縄文
10	諏訪前遺跡	散布地	弥生
11	恵林寺	（参考）	中世・近世
12	西裏遺跡	散布地	縄文・平安
13	中尾１遺跡	散布地	縄文・平安・近世
14	中尾２遺跡	散布地	縄文・平安
15	田屋Ｂ遺跡	散布地	縄文
16	中牧城跡遺跡	城館跡	中世・近世
17	精神屋敷遺跡	散布地	縄文
18	西畑遺跡	散布地	縄文・平安・中世
19	堀ノ内遺跡	散布地	縄文
20	東大庭遺跡	散布地	縄文
21	御幸原遺跡	散布地	縄文
22	西中尾遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世・近世
23	琵琶城跡	城館跡	中世
24	曲田遺跡	集落跡	縄文
25	階遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
26	北井遺跡	散布地	縄文・平安・中世・近世
27	西保下丸山遺跡	散布地	縄文・平安・近世
28	下木曾遺跡	散布地	平安・中世・近世
29	松葉遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
30	山の神塚	塚	
31	西山城跡遺跡	城館跡	中世
32	下川窪遺跡	散布地	平安・中世・近世
33	栩久保遺跡	散布地	縄文・中世・近世
34	上藤木稲荷塚	散布地	平安
35	山吹・堀込・土屋敷遺跡	散布地	平安・中世・近世
36	放光寺遺跡	社寺跡	中世・近世
37	上西村遺跡	散布地	縄文・中世・近世
38	西原遺跡	散布地	縄文
39	二之割遺跡	散布地	平安・中世・近世
40	西天神遺跡	散布地	縄文
41	奥山氏屋敷	城館跡	中世
42	宮之上遺跡	散布地	平安・中世・近世
43	糧秣廠跡	その他	近現代
44	網野氏屋敷	城館跡	中世
45	二階堂氏屋敷	城館跡	中世
46	三本木遺跡	散布地	平安・中世・近世
47	済田遺跡	散布地	縄文・平安・中世
48	駒園遺跡	散布地	縄文
49	上松尾遺跡	散布地	平安
50	御所平遺跡	散布地	平安・中世・近世
51	加治免石幢	（参考）	中世
52	滝之上前遺跡	散布地	縄文
53	武田兵庫之助屋敷	城館跡	中世
54	宮之下遺跡	散布地	
55	天神遺跡	散布地	
56	松葉田遺跡	散布地	縄文・平安
57	身洗田遺跡	散布地	平安
58	欠通遺跡	散布地	縄文・平安
59	天神前遺跡	散布地	縄文
60	仏師原塁跡	城館跡	
61	網野新五左衛門屋敷	城館跡	
62	屋敷添Ｂ遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
63	網野氏屋敷	城館跡	中世
64	十組屋敷	城館跡	中世・平安
65	中堀Ｂ遺跡	散布地	
66	中堀Ａ遺跡	散布地	
67	中原遺跡	散布地	縄文・平安
68	中原遺跡	散布地	平安
69	萱刈遺跡	散布地	縄文
70	堂屋敷遺跡	散布地	縄文・平安
71	東林遺跡	散布地	
72	腰越遺跡	散布地	
73	腰巻遺跡	散布地	縄文・古墳
74	斉田Ｂ遺跡	散布地	縄文・平安
75	斉田Ａ遺跡	散布地	平安
76	切通北遺跡	横穴遺構	中世・近世
77	切通西遺跡	散布地	平安
78	切通東遺跡	散布地	平安
79	切通南遺跡	散布地	縄文・平安
80	堤下遺跡	散布地	平安
81	籐の木道下遺跡	散布地	縄文・平安
82	久保遺跡	散布地	平安
83	久保西遺跡	散布地	平安
84	上野氏屋敷	城館跡	中世・近世
85	久保田遺跡	散布地	縄文
86	村西遺跡	散布地	縄文
87	於北北遺跡	溜池跡	中世・近世
88	於北南遺跡	散布地	平安
89	大久保遺跡	散布地	縄文・平安
90	丸山遺跡	散布地	縄文・平安
91	東田遺跡	社寺跡	近世
92	添田遺跡	散布地	縄文
93	屋敷添Ａ遺跡	散布地	縄文・平安
94	武士原前下遺跡	散布地	縄文・平安
95	諏訪神社遺跡	散布地	
96	北原遺跡	散布地	
97	桑田西遺跡	散布地	縄文・平安
98	村田氏遺跡	城館跡	中世
99	廻り田遺跡	集落跡	古墳
100	西片山遺跡	散布地	
101	膳棚遺跡	集落跡	平安
102	中下石遺跡	散布地	平安
103	荒神山窯跡	窯跡	平安・中世
104	中島遺跡	集落跡	平安
105	下河原遺跡	堤防跡	近世・近代
106	下弥勒遺跡	散布地	縄文・平安
107	天神原遺跡	散布地	縄文・平安
108	宮ノ前遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
109	乙川戸前遺跡	散布地	
110	中沢遺跡	散布地	平安
111	梅ノ木遺跡	散布地	
112	阿弥陀堂遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
113	上三狐神遺跡	散布地	
114	古屋氏遺跡	城館跡	
115	番匠屋遺跡	散布地	
116	青木沢遺跡	散布地	
117	向嶽寺庭園	寺社	近世
118	向嶽寺大方丈跡	寺社	近世
119	金山遺跡	散布地	平安・中世・近世
120	塩山前遺跡	散布地	縄文
121	高林遺跡	散布地	縄文・中世
122	千手前遺跡	散布地	
123	清水尻遺跡	散布地	縄文・古墳・平安
124	宮之前遺跡	散布地	
125	宮ノ西遺跡	散布地	古墳・中世
126	稲荷林遺跡	散布地	
127	知光田遺跡	散布地	
128	道替遺跡	散布地	弥生・古墳
129	宇賀屋敷	城館跡	
130	池田氏屋敷	城館跡	中世
131	宇賀屋敷遺跡	集落跡	奈良・平安・中世
132	窪八幡神社社家中坊群	寺社	中世・近世
133	窪八幡神社	神社	中世
134	清水陣屋跡	陣屋跡	近世
135	立石遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
136	権現窪遺跡	散布地	奈良
137	天野原南遺跡	散布地	平安
138	西ノ窪遺跡	散布地	縄文・平安
139	十王堂遺跡	散布地	奈良・平安
140	神明遺跡	散布地	奈良・平安
141	御屋敷北遺跡	散布地	
142	御屋敷南遺跡	散布地	縄文・平安
143	天神原遺跡	散布地	平安

なる。秩父街道本道は青梅街道の小原西から分岐し、笛吹川の左岸を北上する。一方で現在の国道140号と同じく笛吹川右岸を通る道もあり、秩父街道間道と呼ばれる。春日居町別田で青梅街道から分岐し、山梨市の万力を経て窪八幡神社の前を通り、隼地区に入った後は窪平・室伏・成沢を経由して旧三富村下萩原で本道と合流する。また、秩父街道本道は、牧丘町窪平から小原西までの区間を「鎌倉道」とも呼ばれている。別名「行者道」であるが、これは金峰山と富士山を結ぶ修験者の通用道から名づけられたものである。小原からは東後屋敷に出て勝沼・一宮を経て、鎌倉街道（御坂路）へと繋がる。隼遺跡はこの秩父街道間道・鎌倉街道と強く結びついた遺跡であると考えられる。

「隼」という地名については、『甲斐国志』村里部に、「鎌倉時代に村中に椚の大樹があり、この木に隼が巣を作っていたので、捕えて領主に献上したところ、名鳥であるとして村名を賜った」（牧丘町 1980:p563）とあり、これがたんに伝説的な故事ではなく、周辺一帯にハヤブサが多く生息していた可能性が指摘されている。

さて、1814年に成立した松平定能編『甲斐国志』のうち、二十二巻「山川部第三　山梨郡萬力筋」では、近世万力筋における地誌情報、とくに山川の位置や特徴的なモニュメントなどが掲載されている。その「隼山」の項において「隼村ノ西ノ小山ナリ麓ノ大士窟ハ横七間深拾間、大黒窟ハ方弐間許」とあり、これは隼遺跡を構成する２つの窟遺構を意味していると考えられている（櫛原 2006）。諸山に所在する窟は、地誌情報として必須だったのか、「八幡山」の項に「…切差村ノ南入会山中ノ鞆沢ニ二窟アリ観音、薬師ヲ安置セリ…」とあることや、「片瀬山」には「…遊興石、大士窟等アリ」、「御林山」にも「…上人岩ハ高五丈許當中ニ窟アリ方四間、其北ニ佛壇ニ似タル処アリ乾隅ニ清泉湧ク又寝室ト為ルヘキ処アリ昔時某上人此処ニテ観音ノ像百三十三体を刻スト云…」などの記述が見られる。隼山の２つの窟については、名称と大きさが記される一方で、鞆沢の窟のように仏像を置くなどの情報や、上人岩の窟のように窟内施設の情報は欠如している。

第２節　歴史的環境

山梨市牧丘町隼周辺は、放光寺や恵林寺などの中世に繁栄した寺院が存在しており、中世から現在に至るまで宗教文化が色濃く残る土地柄である。

隼遺跡周辺における縄文時代の遺跡として、旧牧丘町内では古宿道上遺跡が発掘調査されている（昭和48年）。縄文時代中期～後期の敷石住居跡が発見されている。散布地としては、隼遺跡目下の笛吹川対岸に駒園遺跡（48）、滝之上前遺跡（52）、天神前遺跡（59）などが知られるほか、２ｋｍほど北の牧丘町城古寺・窪平には薬師堂遺跡（9、平成22年度山梨市教委調査）、堀ノ内遺跡（19）、御幸原遺跡（21）などがある。隼遺跡の位置する隼山の南側斜面裾部にも、萱刈遺跡（69）や堂屋敷遺跡（70）などが認められる。旧牧丘町内においては、縄文時代早期から晩期にいたるまでほぼ全般にわたって縄文時代の遺跡の存在が推定されている。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡や墳墓の分布は希薄とされるものの、曲田遺跡（24）は1992年に山梨県埋蔵文化財センター（県道拡幅）と牧丘町遺跡調査会（工業団地建設）により発掘調査が行われ、古墳時代前期と平安時代末期を中心とした複合遺跡であることが分かっている。ほかに、散布地として弥生時代は牧丘町室伏の諏訪前遺跡（10）のほか、複合遺跡である階遺跡（25）、松葉遺跡（29）に認められる。古墳時代の遺跡は曲田遺跡のほかは笛吹川を南下して廻り田遺跡（99、平成23年度当センター調査）でも確認されている。奈良・平安時代を迎え律令が整備され始めると、遺跡周辺は山梨郡可美郷に定められる。これは、和銅７（714）年の正倉院宝物に書かれた「甲斐国山梨郡可美里日下部・・・」という文言からも、奈良時代のはじめ頃には既に郡郷名の記録が残されていることが分かる。奈良・平安時代の遺跡は、隼遺跡周辺では住居跡が10軒確認された曲田遺跡のほか、旧牧丘町倉科地区や、旧塩山市上井尻地区周辺に広く分布し、著名な日下部遺跡も笛吹川左岸に位置する。山梨市内では南下すると当センターが西関東連絡自動車道建設事業に伴って発掘調査した中島遺跡（104、平成29年度）、膳棚遺跡（101、平成24年度）、上コブケ遺跡（平成23，28年度）が位置している。

牧丘は古代において牧があったと推定されるが、その痕跡を示す遺跡は見つかっていない。しかし、平安期に設置された牧荘は、上代の牧場地を開拓して荘園を築いたと考えられており、古来の御牧が荘園になっ

たという指摘もある（牧丘町 1980）。この牧荘は、甲斐源氏の祖である新羅三郎義光の曾孫･安田義定（1134～1194 年）によって統治されるようになる。義定は小田野城跡を要害とし、当地から南へ行った大井俣窪八幡神社（133）も義定の時代に遷座されたと考えられている。

金峰山信仰の展開も当地との関わりが深い。『甲斐国志』には、金峰山に九筋の登拝路があるとされるが、そのうち３つは山梨市内の万力・西保・杣口である。甲斐国における山岳信仰は古来より様々な形で繰り広げられていたと考えられるが、奈良時代を前後して山岳信仰にまつわる神社が創立される。中牧地区にある黒戸名神社（702 年創立）、杣口地区の金桜神社（851 年創立）などは古代から中世にかけて豪族の信仰を受けた古社である。この金桜神社の旧社地である、杣口金桜神社奥社地遺跡は、旧牧丘町時代の平成 15 年から新山梨市となった平成 17 年度にかけて学術調査が実施された（山梨市教育委員会 2006）。この調査では神社域と寺院域それぞれからテラス群と建物跡が発見され、平安時代末から近世に至るまでの遺構の変遷を捉えることができた。県内における山岳信仰遺跡の貴重な調査事例である。また、当地域周辺の宗教史を語るにあたって､夢窓疎石の存在は外せない。疎石は伊勢国の生まれで平塩山（現:市川三郷町）で出家した後、諸国を修行しながら牧丘で浄居寺を開創（1305 年）、その後鎌倉などで修行を積み、甲斐国に再び戻り恵林寺（1330 年創）、清白寺（1333 年頃）などを開創し、国内における臨済宗の発展に寄与した。これには牧荘の豪族、二階堂道蘊の要請があったとされている。

中世から近世にかけて、上記以外にも多くの寺院が建立していた。著名かつ重要なものでは、甲州市塩山藤木の放光寺（36)､上於曽の向嶽寺（117.118）がある。放光寺は安田義定によって 1184 年に創建されるが、その前身は大菩薩峠山麓の一ノ瀬高橋にあった山岳寺院とされている。平成３年度に山梨県埋蔵文化財センター、平成６年度に旧塩山市によって発掘調査が行われている。向嶽寺は 1380 年に開山し、守護武田氏の厚い庇護のもと甲斐国内に教線を拡大している（後の向嶽寺派)。平成２年度、４年度に旧塩山市が庭園部分の発掘調査を実施している。隼遺跡に関係が深いと思われる修験系の寺院は、今は改宗・廃寺となったものも多いが、旧牧丘町内だけでも真言系修験（当山派修験）の寺院が万光院（西保地区)、内膳院、上求寺、遍照院（倉科地区)､林光院､教正院（隼地区）など､天台系修験（本山派修験）の大徳院（西保地区）があったとされる。当地にはこのように仏教（密教）文化が色濃くみられ、隼地区には室町時代初期の作と推定される加治免石幢（51、県指定文化財）や、室伏地区には暦王３（1340）年の刻銘をもつ室伏五輪塔（県指定文化財）などの石造文化財も残る。

室町時代から戦国期、江戸時代にかけては、旧塩山市小屋敷周辺を中心に、屋敷跡が多く推定されている。また、市内には城郭や烽火台も見られるが、中でも中牧城（浄居寺城）は武田信玄の頃に浄居寺を窪平に移転して再興したと言われている（中牧城跡遺跡：16)。信玄は信仰に厚く、牧丘町倉科にある上求寺奥の院にある不動明王に参詣し、信玄の菩提寺である恵林寺には自身の姿を不動明王に模刻させたという武田不動尊像がある。豊臣政権の浅野時代には甲斐国の支配が進み、九筋二領の行政区分が敷かれ、当地は万力筋となる。そのほか近世以降の遺跡では、山梨市岩手地区の下河原遺跡（105、平成 29 年度当センター）が堤防遺跡として発掘調査されている。

隼地区は､永禄３(1560) 年の武田信玄印判状に地名がみられ､甲斐国内有数の漆生産地であることがわかっている。近世には牧庄から幕府直轄地となり、村として独立した自治体となり、文化年間には 37 戸 207 名の人口を伝えている（『甲斐国志』)。また、隼村・岩手村のかんがい用水に繋がる「穴堰」は文化 14（1817）年に着工したという記録がある。明治８（1875）年には隼村は諏訪村に合併され、昭和 29（1954）年には牧丘町が誕生、平成 17（2005）年に山梨市・牧丘町・三富村が合併し、新制山梨市が誕生した。

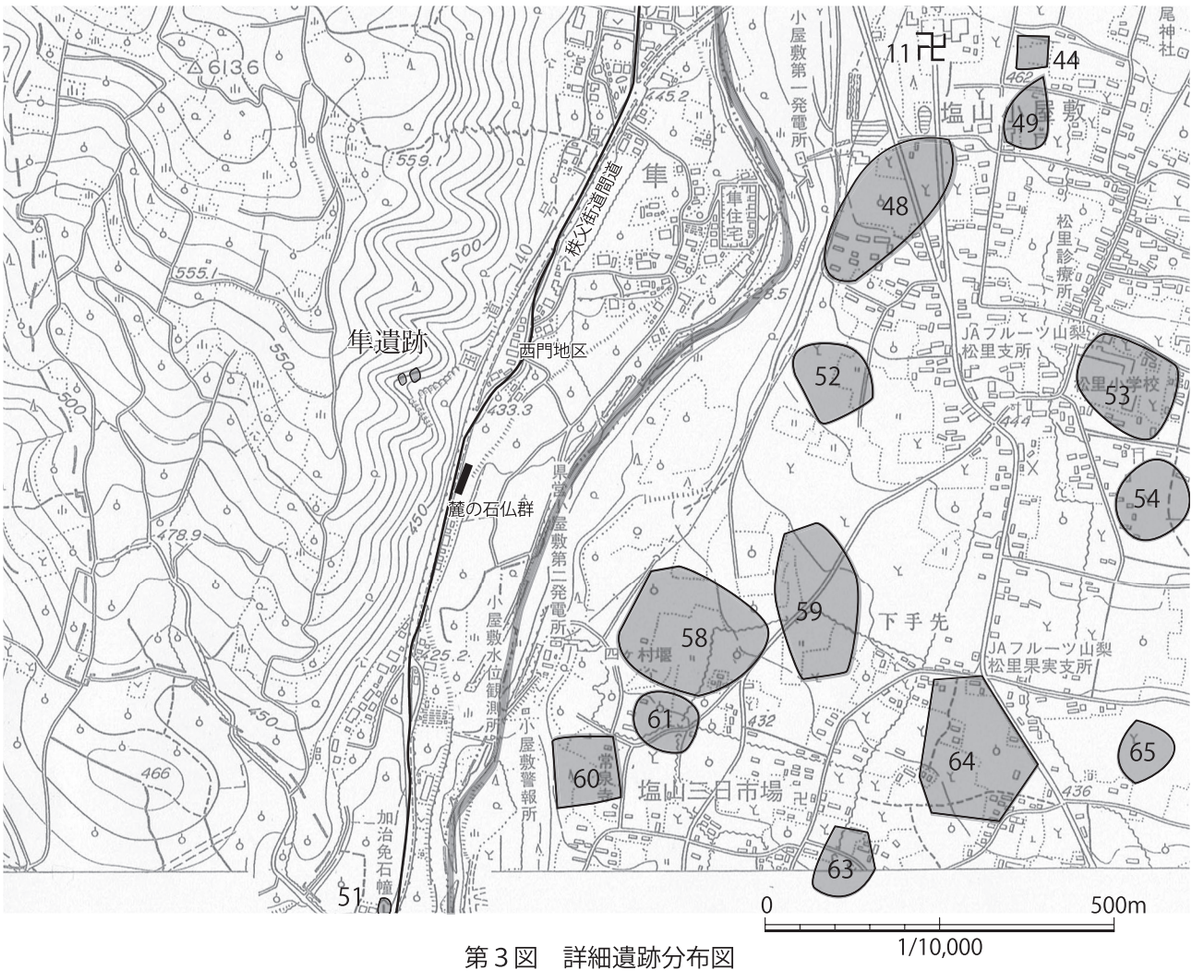
第３節　民俗

隼遺跡の麓集落である、山梨市牧丘町隼西門地区の倉田由和氏（当時 75 歳）に聞き取り調査を実施した。遺跡に関わることについて、発掘調査された二つの窟遺構のうち、大黒窟については地元住民でもほとんど認識しておらず、大士窟の重要性のみ把握されていた。『甲斐国志』にある「大黒窟」「大士窟」という名前は地元には残っておらず､「大士窟」は「穴観音」という名称で呼ばれているという。また、西門地区の８

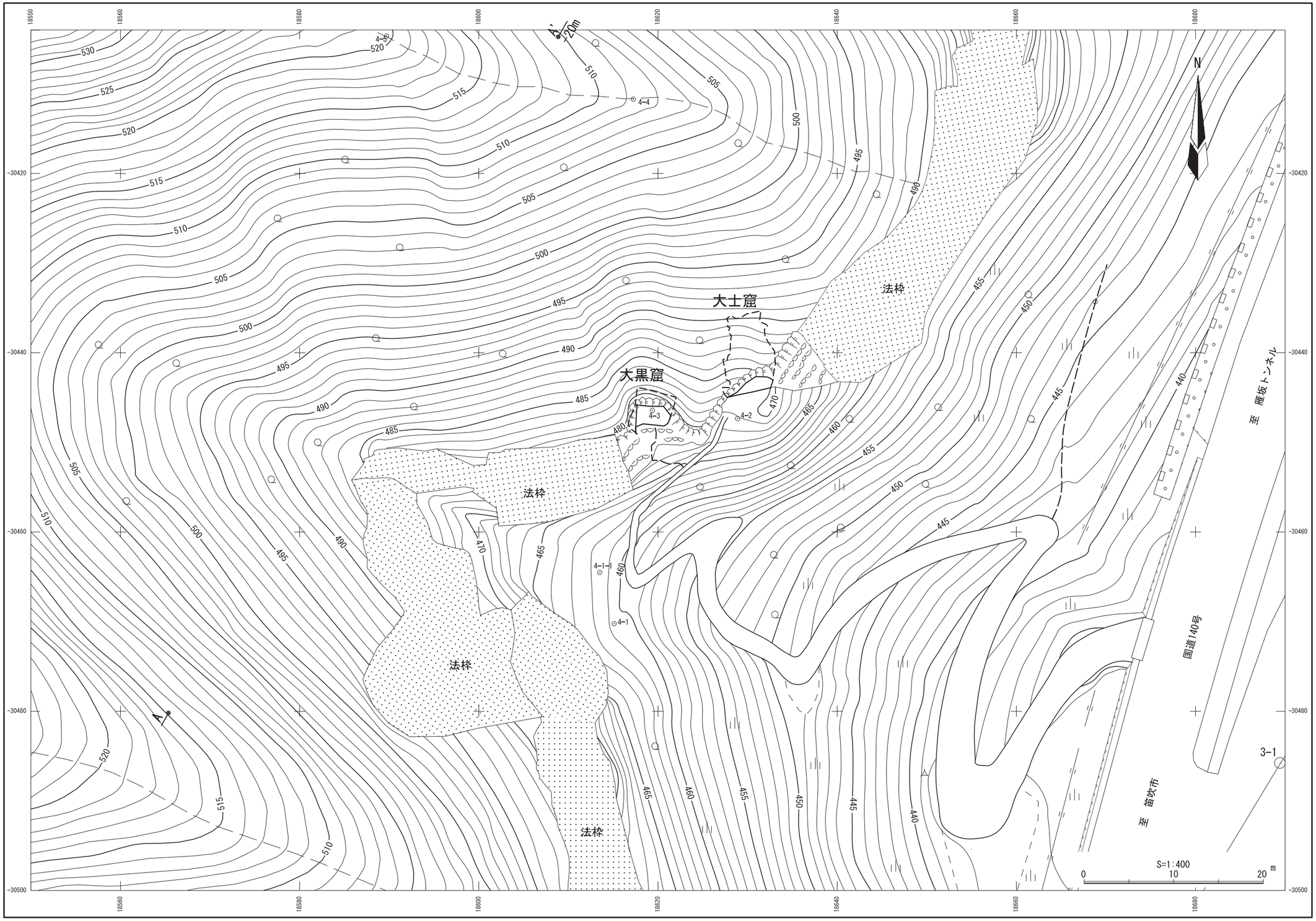
軒で講を組んでおり（講の名称はない）、祭礼を行っていた。2月末にはオヒマチ（御日待ち、主催の家において家族全員が集まりごちそうなどを振るう）を行い、毎年当番制で順番に回していた。倉田氏が若年のうちは、このオヒマチにあわせて、穴観音において蝋燭の灯火や線香焚き上げを行い、「穴観世音菩薩」と書かれたお札を配るなどしていたという。また、1月のお天神講の際にも子どもたちが穴観音までお参りをしていた。いずれの祭礼もこの10～20年は実施できていない。麓にある「穴観音」の灯籠がある石仏群については、幼少期からすでに麓にあり、国道140号開発の際に今の場所に移したという。洞窟内にあったかどうかは伝わっていない。遺跡周辺の環境については、近年は急激に山が荒れており、崖がかなり崩れているとのことで、昔はもっと穴観音へ登りやすかったという。

麓の石造物群については、写真図版18に掲載した。ここではそれぞれの概要のみ報告する。写真図版18の①・②は石灯籠で、①の竿裏面には「寛政十年二月廿九日　当村中」②の竿表面には「天明六年歳」とあり、②は大士窟内の馬頭観音と同年の銘をもつ。③は観音像と思われる石仏2体だが、1体は上半身を、1体は頭部を欠失する。④は弘法大師像で、背面に「四十九」と刻される。頭部は欠失するが補填されている。⑤は馬頭観音で、大士窟内にある2体の馬頭観音に類似する。⑥・⑦は六地蔵で、⑦のほうがやや古い意匠をもつ。⑧は墓石と考えられ、正面に「元禄十二年六月三日／南無阿弥陀仏／□□／三□候村　施主／□□」と記される。⑨は万霊塔で、「三界万霊等」とある。

これら石造物・石仏はいずれも江戸時代以降の所作と推定される。万霊塔、弘法大師像、六地蔵、墓石など寺院に多く見られる石造物・石仏を確認することができる。



第3図　詳細遺跡分布図



第４図　隼遺跡全体図および国土座標グリッド図

株式会社　テクノプラニング

第５図　隼遺跡全体立面図

第３章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

危険の伴う発掘調査となることは免れないことから、作業者の安全面を最優先して調査することを前提とした。また、立体的な特徴をもつ洞窟遺構であるため、三次元点群データを取得することで作成出来る、３Ｄレーザー測量図の作成が必要であった。

大黒窟の調査は、まず窟の左端に幅 50cm ほどのトレンチを設定し、土砂の堆積状況を確認した。その結果、大黒窟は床面を全面的に覆うように、崩落土石が堆積していることが判明した。堆積物中に巨大な礫も含まれていることから、大黒窟の上部を構成する地山が一度に崩落した結果と考えられ、この崩落土石の中に考古学的な痕跡を見出すことは難しいと判断した。そのため、土石を除去するにあたり、トレンチを複数個所に設けることはせず、人力により随時土石を掘削し、巨大な礫についてはノミやハンマーなどを用いて破砕し窟外に搬出した。落盤していた天井部の岩盤は、床面より 5cm ほど高い位置で加工面を下に向けた状態で見つかった。これより下層は遺構や遺物の存在する可能性が高いと想定し、精査をおこなった。完掘後、床面と側壁・奥壁下部の写真撮影および３Ｄレーザー測量を実施した。

大士窟の調査は、まず全体的に表層の除去を人力で実施した。これは現状で落ち葉などが厚く表層に確認されたこと、天井から落石したと思われる礫の小片が多くみられたことによる。表層を除去したところ、あまり礫などを含まない整地面が確認された（第１面）。この面で一度写真撮影、測量を実施した。１面より下層については、トレンチを設けて調査を進めた。窟の軸にあわせて、中央長軸に１号トレンチを配し、奥壁の際に２号・３号トレンチ、１号トレンチに直交して４号・５号トレンチ（中央）、６号トレンチ（入り口側）を設定した。１号トレンチにおいて、下層に焼土や炭化物を含むほぼ水平に堆積する層が見つかったことから、これを第２面として精査を実施した。第２面より下層は、奥壁側ではすぐ地山の岩盤となったが、入り口側では堆積が続いたため、１号トレンチを拡幅および深掘りし、洞窟下層状況の把握に努めた。完掘後、大士窟床面と側壁・奥壁下部の写真撮影および３Ｄレーザー測量を実施した。

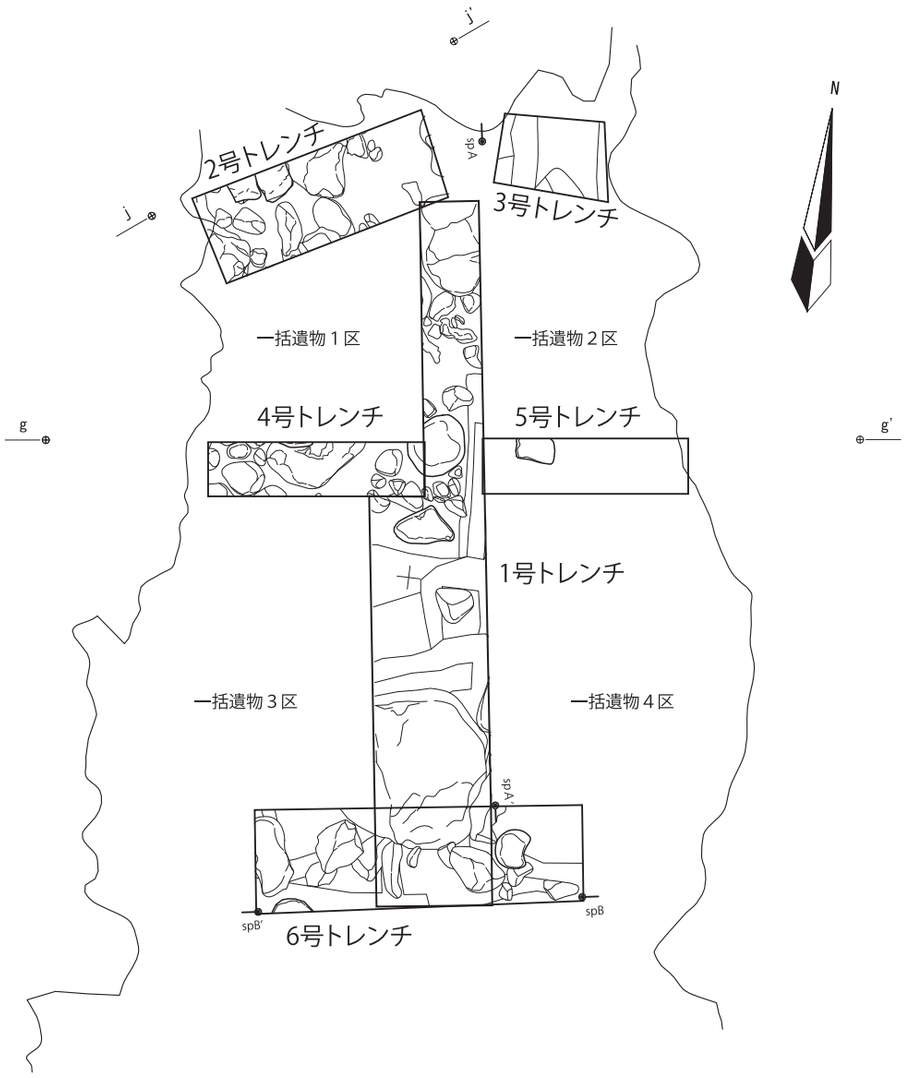
出土遺物については、トータルステーションおよび遺跡管理システムを用いて出土位置を記録し、一括遺物については１号トレンチと４・５号トレンチを基準に１区～４区を設定した。設定は第６図のとおりである。なお、光波における遺物の取り上げ基準について、陶磁器類は近世と想定できるものは全点、近代以降は形をよく残すものを記録した。金属製品、銭貨なども位置情報を記録した。近現代以降のものは原則位置情報を与えなかった。また、各トレンチにおいて、土層の堆積状況を記録した。巨礫や岩盤により、場所により水糸を設定することができず、対空標識などを用いて写真実測から断面図を作成した箇所もある。調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の確認状況、遺跡の全景は、小型一眼レフカメラやデジタルカメラで撮影し、記録した。

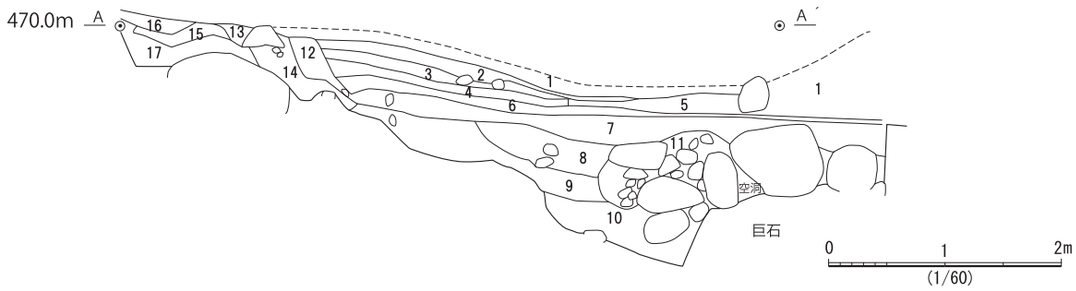
第２節　トレンチ層序

前節で述べたとおり、本調査ではトレンチによる調査が基本である。ここでは、トレンチにより把握できた層序関係について詳しく述べていきたい。

（１）大黒窟

第８図は、大黒窟の土層図である。調査後に、土層が堆積していたラインを確認することができたため、写真測量によって作成している。1 層は、大黒窟に厚く積もった崩落土石である。細かな礫を主体的に含むが、中には径 80cm ほどもある巨礫が含まれている。1 層のうちからは遺構や遺物は確認されないが、床面に近いところで天井を構成する岩盤が落盤しており、大黒窟廃絶後に堆積したことが想定される。2 層は、床面から最大で 5cm ほどの厚さを測る堆積土層である。大きな礫は含まれておらず、炭化物が確認さたことから、窟の利用時における堆積と考えられる。2 層中から１号炭化物範囲を確認したが、遺物の出土はなかった。





1 層　淡黄色（Hue25Y8/3）土層　しまりなし　φ5 ～ 10ｃｍ大の礫が 30%混じる　腐葉土に近い

2 層　褐灰色（Hue10YR6/1）土層　しまり弱　細砂にφ2 ～ 10mm　大の礫 20%含む　第１面の地盤

3 層　黄灰色（H2.5Y0/1）土層　しまりなし　細砂にφ2 ～ 20mm 大の礫 50%以上混じる　こぶし大の礫を含む

4 層　灰白色（Hue2.5Y7/1）土層　しまりなし　細砂にφ2 ～ 5mm大の礫混じる　φ5mm以上の礫 10%含む

5 層　黒褐色（Hue2.5Y3/1）　土層　しまりなし　灰白色土に炭化物混じる　φ10mm以下
場所によって土と炭化物が互層になる

6 層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/2）土層　しまり弱　細砂主体　φ2 ～ 5mm大の礫 10%含む　焼土で構成される
炭化物含む２面の地盤

7 層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり弱　細砂主体　φ2 ～ 10mm大の礫 20%含む

8 層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）土層　しまりなし　泥岩由来の細砂　泥岩片を含む

9 層　褐灰色（HueYR5/1）土層　しまりなし　砂岩由来の粗砂　砂岩片を含む

10 層　黄灰色（H2.5Y4/1）土層　しまり強　砂岩由来の粗砂　場所により凝結している

11 層　褐灰色（Hue10YR5/1）土層　しまりなし　９層の砂で構成　包含する岩石は
多様（泥岩　砂岩　安山岩）　空洞が岩石の間に確認される

12 層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり弱　細砂主体　φ2 ～ 10mm大の礫 10%含む

13 層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/3）土層　しまりなし　細砂主体　φ5 ～ 20mm大の
砂岩系の礫 20%含む

14 層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり弱　細砂主体　φ1 ～ 5ｃｍ大の砂岩系の礫 40%含む

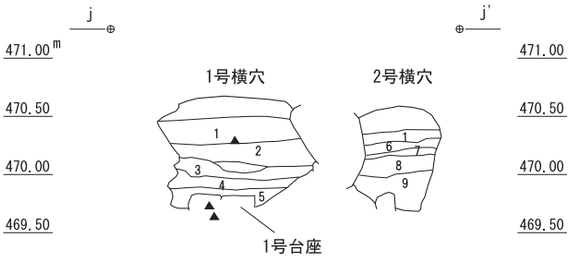
15 層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり強　細砂主体　φ2 ～ 5mm大の砂岩系の礫 10%含む

16 層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/3）土層　しまりなし　細砂主体　現生の根が密に生える

17 層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり強　砂岩由来の粗砂　φ2 ～ 5mm大の砂岩系の
礫 10%含む　風化礫か？

第６図　大士窟トレンチ設定図および1号トレンチ断面図

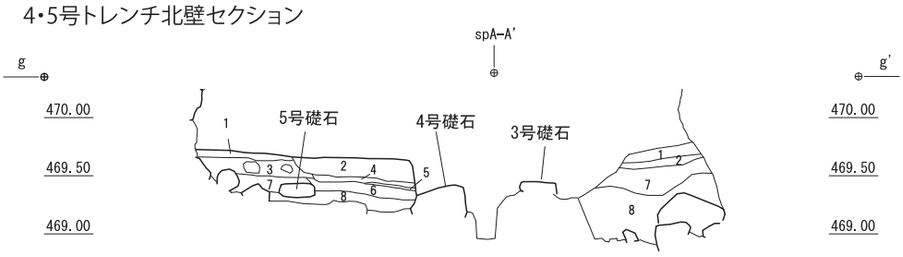
２号トレンチ北壁セクション



3号トレンチ北壁セクション

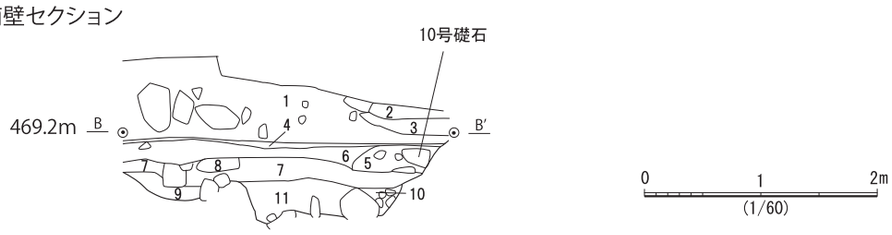
１層　１号トレンチ１層に対応
２層　１号トレンチ２層に対応
３層　１号トレンチ３層に対応
４層　１号トレンチ４層に対応
５層　１号トレンチ６層に対応
６層　灰白色（Hue2.5Y）土層　しまりなし　細砂主体
　φ5mm以下の礫 5%含む
７層　灰褐色（Hue5YR5/2）土層　しまりなし　粗砂主体
　φ5 ～ 10mmの礫 5%含む
８層　灰黄褐色（Hue1　0YR6/2）　土層　粗砂主体　φ5 ～ 30mm の礫 30%含む
９層　灰白色（HueN7/）土層　しまりが強く固結する

4･5号トレンチ北壁セクション



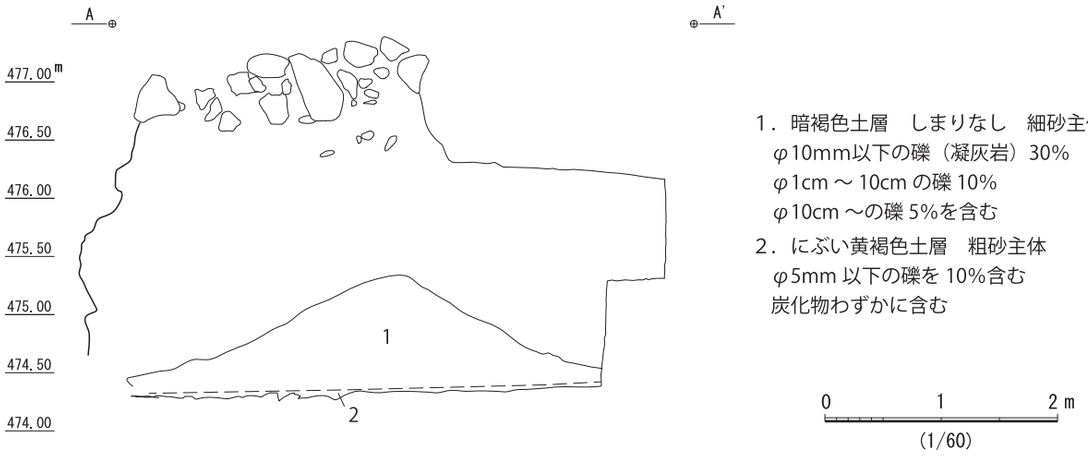
1層　1号トレンチ3層対応
2層　1号トレンチ4層対応
3層　灰黄褐色（Hue7.5YR4/2）土層　しまりなし　崩落礫を多く含む
4層　1号トレンチ6層対応（第2面相当）
5層　淡赤橙色（Hue2.5YR7/4）土層　焼土のいわゆる純層
6層　1号トレンチ７層対応
7層　灰白色（HueN7/）土層　φ5mm以上の礫を含む
8層　灰白色（HueN7/）土層　しまりが強く固結する　2号トレンチ9層対応

６号トレンチ南壁セクション



１層　１号トレンチ１層と対応　細砂主体　φ5 ～ 10cm 大の礫が主体　崩落堆積と考えられる
２層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/2）土層　しまりなし　細砂主体　φ5 ～ 20mm 大の泥岩系礫を 40%含む
３層　灰白色（Hue2.5Y）土層　しまりなし　細砂主体　φ5 ～ 10mm 大の泥岩系礫を 40%含む
４層　１号トレンチ６層と対応（第２面相当）
５層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまりなし　細砂主体　φ2 ～ 5ｃm 大の礫（泥岩系主体）を 50%含む
６層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまり弱　細砂主体　φ2 ～ 10mm 大の礫を 20%含む　１号トレンチ７層と対応
７層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/3）土層　しまり弱　細砂主体　φ10 ～ 20mm 大の礫を 20%含む
８層　７層に近いが、φ2cm 大の礫がブロック状に集中している
９層　灰白色（Hue10YR7/1）土層　しまりなし　細砂主体　φ5mm 大の礫を 20%含む
10 層　にぶい黄橙色（Hue10YR7/2）土層　しまりなし　細砂主体　φ2 ～ 5mm 大の礫を 20%含む
11 層　灰黄色（Hue2.5Y7/2）土層　しまりなし　細砂主体　φ5 ～ 10mm 大の礫を 20%含む

第７図　大士窟２～６号トレンチ断面図



第８図　大黒窟基本土層図

（２）大士窟

第６・７図は、大士窟のトレンチ配置図および断面土層図である。１号トレンチは、大士窟の中央に設定したトレンチで、東壁の堆積状況を記録した。１層は、近年の堆積土と考えられる。窟内に吹き込んだ葉などが腐葉土化しかかっている様子を確認した。また、入り口側は窟外に向かって堆積が厚く、礫も多く含むことから、窟外における山の崩落による土石が窟の内部にも流れ込んでいると考えられる。２層は、大きな礫を含まず、若干しまりがあることから、第１面の利用面に相当するとした。奥側から手前側に向かって傾斜している。13 層や 16 層もこれに対応する可能性がある。第１面より下層は、崩落堆積の土層（3、4 層）が中央付近で確認されたが、その下層より焼土と炭化物を含みほぼ水平に堆積する６層が確認できた。６層は遺物などを含み、第１面より古い時期の利用面であると考え、第２面とした。奥壁側では、崩落堆積が確認されるが、トレンチ外では焼土の層が部分的に認められる。第２面は、洞窟内において水平に堆積していることから、その下層において整地をしている可能性がある。７層が整地の最終段階と捉えると、８～ 11 層は洞窟内に崩落していた礫を片付けた痕跡と考えることも可能だろう。特に 11 層は大量の礫が認められる。

２号トレンチは、奥壁付近に並列する横穴の手前に設定した。奥壁の横穴を西側から１号横穴・２号横穴と呼称する。調査開始時にはいずれの横穴もほとんど埋まっている状態であった。１号横穴は、１号トレンチの堆積状況とほぼ同じで、１面、２面に相当する層がそれぞれ確認され、２面からは遺構（１号台座）が検出された。一方、２号横穴は、２面に相当する土層は確認されず、砂岩系の粗砂が主体となり、床面付近では固結している様子を確認した（８層・９層）。

３号トレンチは、洞窟奥壁右側に設定した。ここにも奥へ続く空洞があり、３号横穴とする。崩落したような堆積が続き、第２面に相当する層は確認されない。

４号・５号トレンチは、１号トレンチと直交する形で、なおかつ側壁に認められるほぞ穴に対応する位置で設定した。トレンチの設定時にはすでに第１面を掘り下げており、１号トレンチの３層以下、４層、６層が対応して確認される。下層には２号トレンチの９層に対応する層が確認され（８層）、特に５号トレンチでは強く固まっている。掘削が可能であったためトレンチを掘り下げたが、本来的にはこの層が地盤であると思われる。

６号トレンチは、入り口側に設定し、南壁で記録をとった。崩落による堆積土が認められた後、１号トレンチ６層（第２面）に対応する焼土の混じる層が確認される。１号トレンチと同じく、東西方向においても水平に堆積している状況がうかがえる。

第３節　遺構

（１）大黒窟

●概要

大黒窟は隼山に入り込む小支谷の崖面にあり、床面において大士窟より約 5m 高い地点（床面標高 474.3m程度）に位置する。主軸はN―15°―Eであり、南南東に開口している。調査前の状況では、斜面地の崩落により大黒窟に至るまでには 6m ほど急激な崖面を這い上がらなければ到達できない。聞き取り調査を実施した倉田由和氏の証言から、数十年前は現在よりも崩落が進んでいなかったと思われるが、窟の築造時や頻繁に利用していた時期に、開口部まで歩いて登っていけるような道が存在していたかどうかは不明である。既に述べたとおり、窟内はほとんどが崩落した土砂によって埋没していた。

①法量（第 9 ～ 10 図）

窟の平面形は、ほぼ長方形に近い台形を呈している。左側壁において顕著だが、開口方向に向かってやや幅が狭まる形をとる。奥壁には、棚状の壇を有している。また、左壁の開口部付近には、方形に張り出す空間（以後、「張り出し部」と呼ぶ）を有している。窟の幅は奥壁部（壇上）で 4.45m、開口部付近の最小幅で 3.67m を測る。なお、奥壁はわずかに弧状を呈する。開口部付近では崩落しているため暫定的ではあるが、高さは 1.85 ～ 1.95m となり、床面は奥壁から開口部向かって緩やかに下るように傾斜している。奥行きについても、開口部付近では崩落している可能性もあるが、現状では中央付近で 3.55m、張り出し部のある左壁で 4.70m となる。天井は崩落土砂の中に天井の一部と考えられる岩盤が含まれていたことから、本来開口部付近まで存在したと考えられるが、現状で奥壁から最大 1.75m 残存するのみである。

奥壁の棚状の壇は、奥壁のラインに平行して約 55cm の幅で造り出されている。一部で剥離しているが、左壁付近では遺存状況がよく、ほぼ直角に壇を造っていることがわかる。壇の高さは 95cm ほどとなっている。張り出し部は、東西方向に 70cm、南北方向に 130cm ほどの区画で設定され、高さ 1.5m まで側壁を掘り込んでいる。掘り込みは直角を意識しているが明瞭ではない。そのほか、後述する床面の溝以外は、掘り込まれたり穿たれたりするピットなどの遺構は検出されなかった。

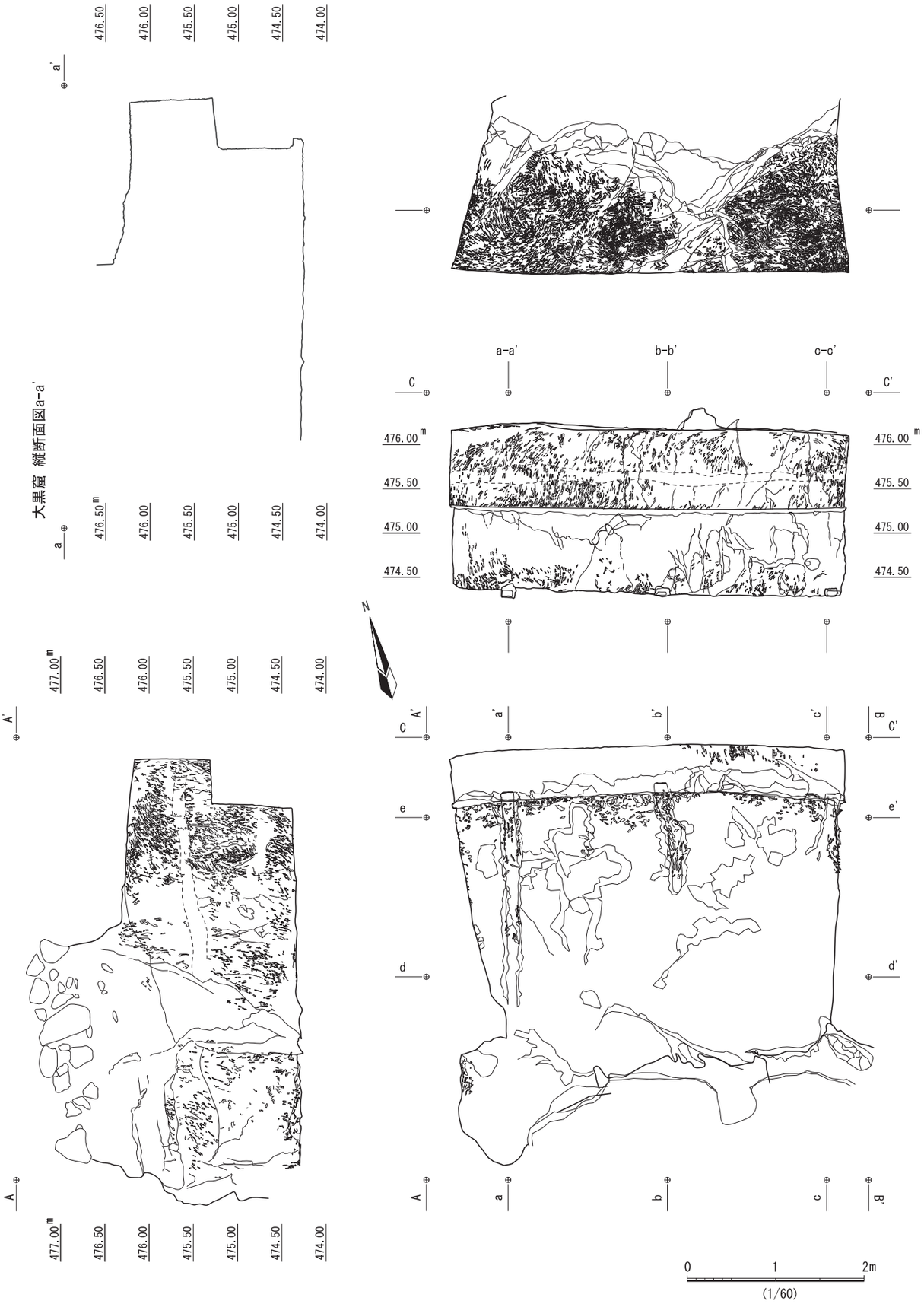
全面的に工具によって彫り込まれており、一部剥離などで不明瞭なものがあるが、奥壁や側壁では同心円状の彫り込み、天井部では渦巻状の彫り込みも確認することができる。このような石窟の形状および特徴は、鎌倉などを中心に分布する「やぐら」と呼ばれる遺構に類似している。

② 1 号炭化物範囲（第 11 図）

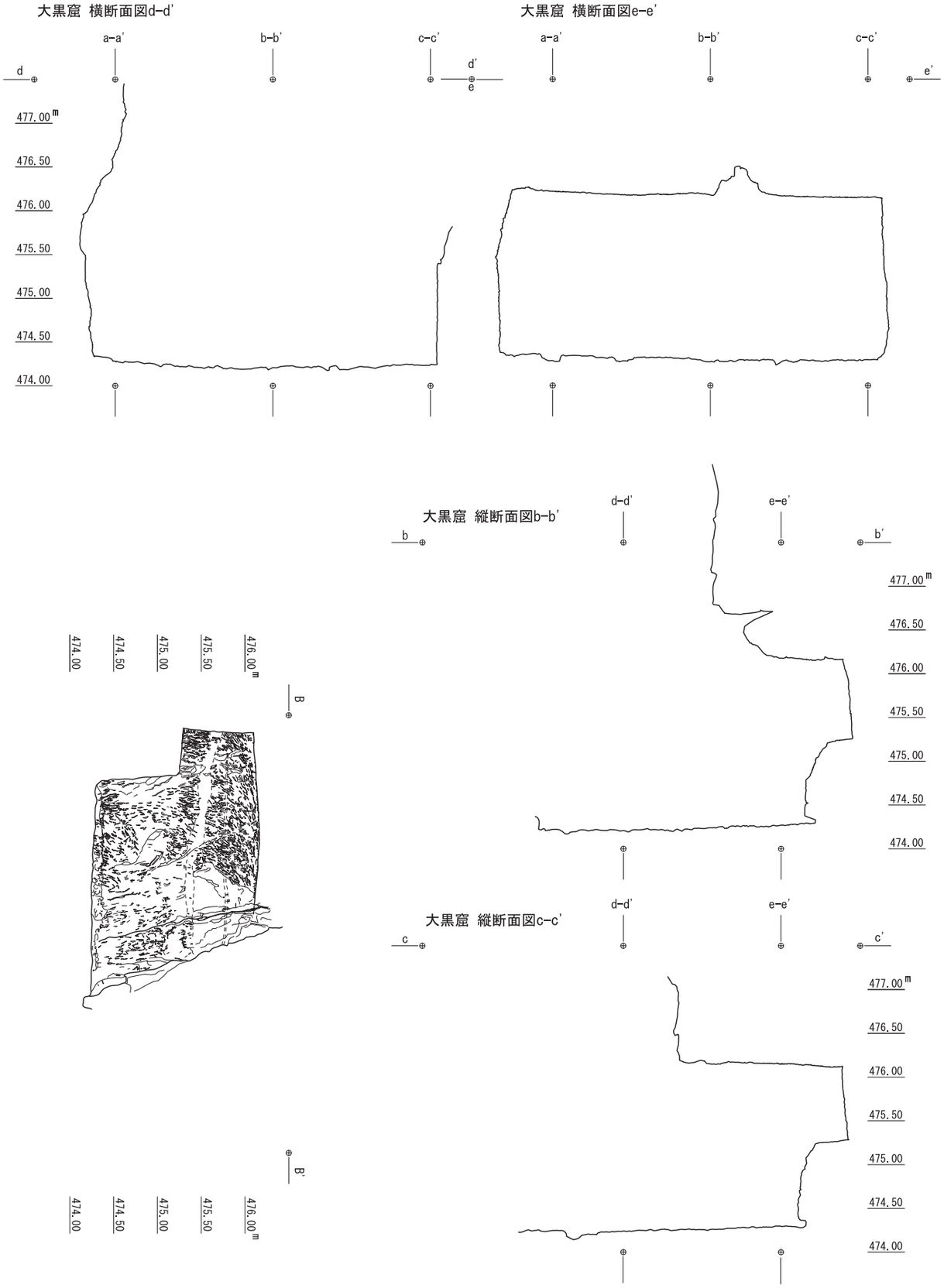
床面の精査中に、炭化物を含む黒色土が集中する範囲を確認したため、炭化物範囲として記録をとった。層として認識できるような厚さはなく、検出状況としてはやや不鮮明である。楕円形を呈し、長径 92cm、短径 67cm となる。採取した炭化物のサンプルについては、第４章にて年代測定および材の同定を行っている。

③床面の溝

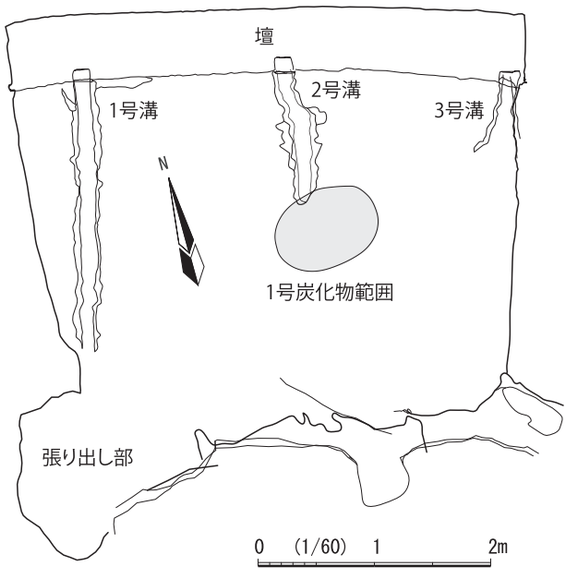
床面を掘りあげると、床面を掘り込む 3 条の溝状遺構が検出された。西から 1 号溝、2 号溝、3 号溝とする。この溝に対応して、奥壁壇の最下部に立面長方形の小穴が穿たれている。1 号溝は主軸に沿って直線的に延びる。遺存状況がよく、溝の幅約 12cm、長さ約 2.3m、床面を 10cm ほど掘り下げていることがわかる。2 号溝は床面を 5cm ほど掘り込み、直線的にはならず右寄りに一度クランクし、奥壁から 1.25m までは溝状の掘り込みを確認することができる。3 号溝はほとんど掘り込みが分からないが、ほぼ直線的に延びると推測される。溝の間隔は、奥壁小穴の中央を基点に 1 号溝と 2 号溝で 1.75m、2 号溝と 3 号溝の間で 1.92m を測る。また、左壁と 1 号溝立ち上がりの間は 55cm あり、右壁と 3 号溝はほぼ接している。植物の根によって床面が乱されており、2 号溝や 3 号溝の遺存状況は不良である。しかし、床面が左側壁から右側壁に向かってわずかに傾斜していることを考えると、“溝の下端の水準を揃える”目的があったとすれば、溝が設けられた当初から、2 号溝や 3 号溝の掘り込みが浅かった可能性はある。奥壁の小穴については、いずれも 10cm ほど奥まで掘り込まれている。

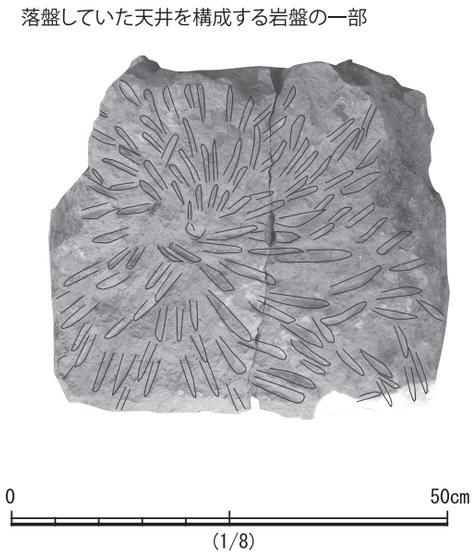

大黒窟 縦断面図a-a'
a
a'
476.50m
476.00
475.50
475.00
474.50
474.00
A
A'
477.00m
N
a-a'
b-b'
c-c'
C
C'
476.00m
475.50
475.00
474.50
B
B'
e
e'
d
d'
0
1
2m
(1/60)

第９図　大黒窟展開図（１）



第 10 図　大黒窟展開図（2）





第 11 図　大黒窟遺構詳細図

3 条の溝の役割だが、排水用の設備（排水溝）としては説得力に欠ける。しかし、溝床面の水準を揃えようとした形跡があること、奥壁の穴の形が長方形を呈すること、溝と溝の間隔がおよそ 1 間となることなどから、根太の様な建築部材をはめ込み床面に配置した痕跡として捉えられる。

（2）大士窟

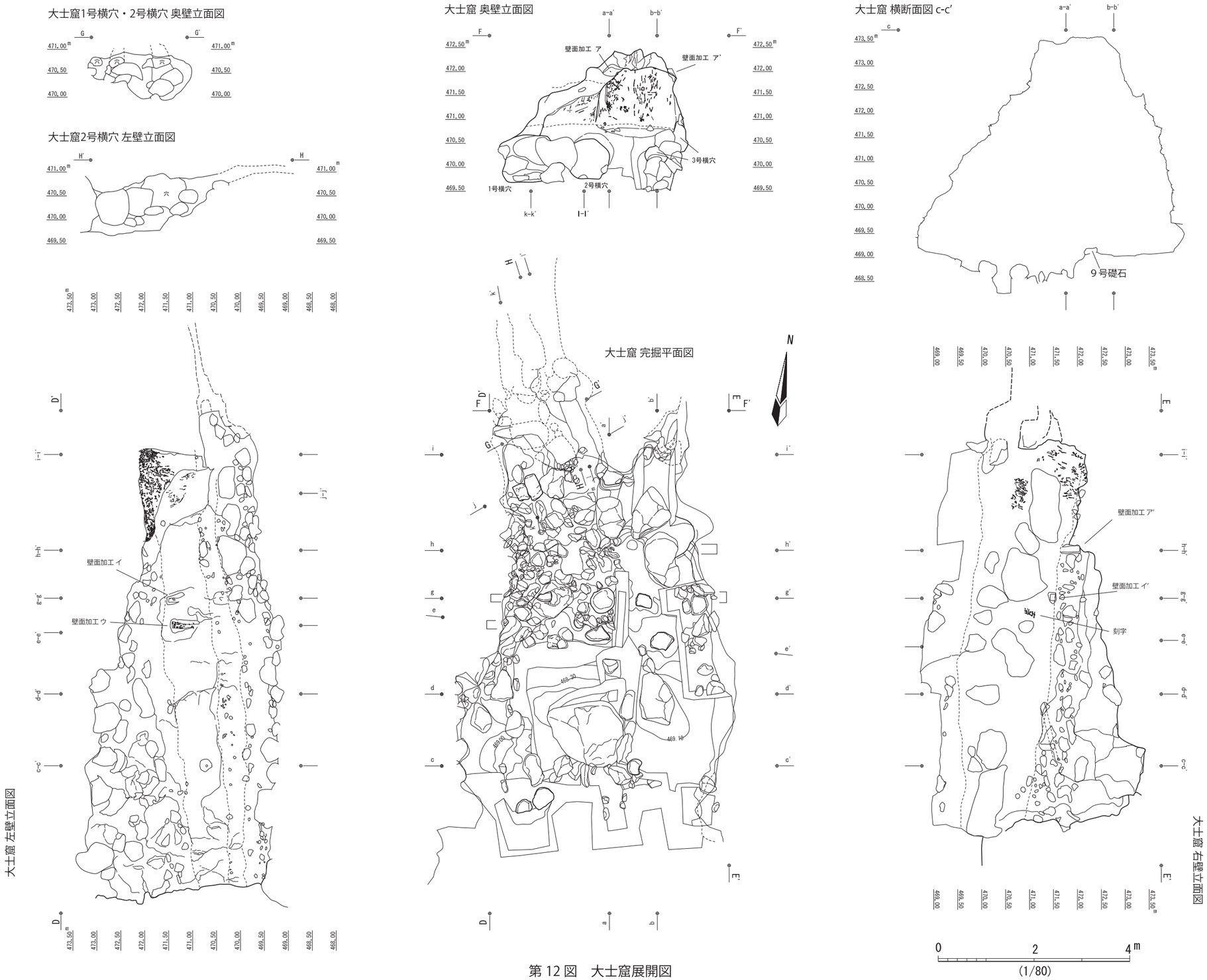
●概要

大士窟は大黒窟の東側に位置する。主軸はN―7°―Eであり、ほぼ南向きに開口している。奥には馬頭観音 2 体と石造物（灯籠の笠）が配置されており、地域住民より「穴観音」として信仰されている。ただし、窟内はおそらく天井から落下したであろう巨石や人頭大の礫が散見され、遺構の多くは埋没していた。大士窟の平面的な調査は、前節のトレンチ調査と並行して進めていき、窟の利用に諸段階があることを解明した。その一方で、どの時期に作られたのか不明な遺構も存在している。ここでは、遺構の法量について述べたあと、諸段階とそれぞれの遺構について、最後に時期不明の遺構についてもまとめる。

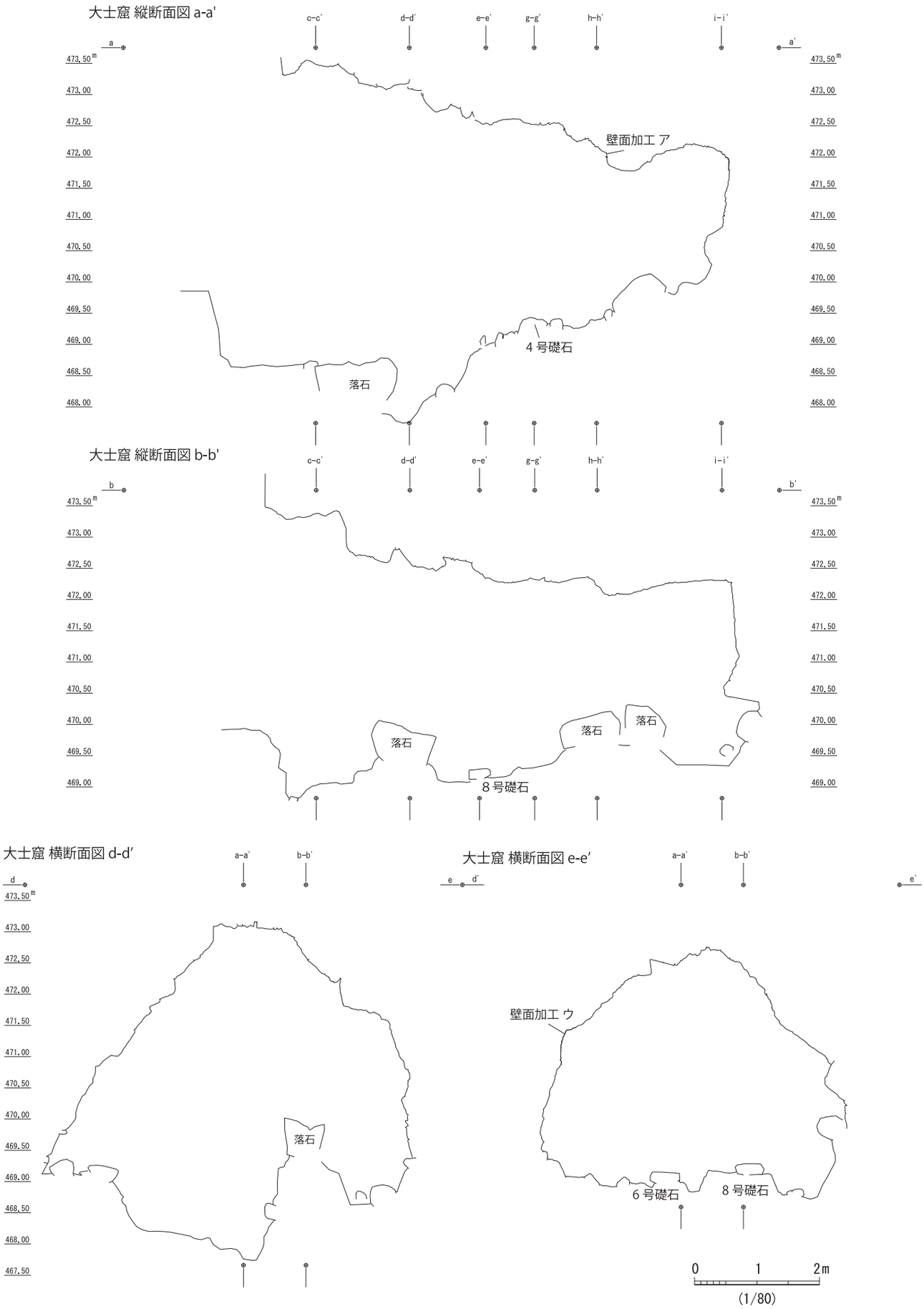
①法量（第 12 ～ 14 図）

窟の平面形は、奥から手前に向かって広がりをみせたのち、入り口部で若干くびれる。奥壁には、合計 3 つの横穴が認められる。この横穴は、一部人の手が加えられている可能性があるものの、おそらく自然の所産によるもので、どこまで続いているかは確認することができない。また、洞窟奥部の右側には、明らかに人力によって奥壁と側壁、天井を掘削し、加工された空間が存在している（以後、「掘りこみ遺構」と呼ぶ）。

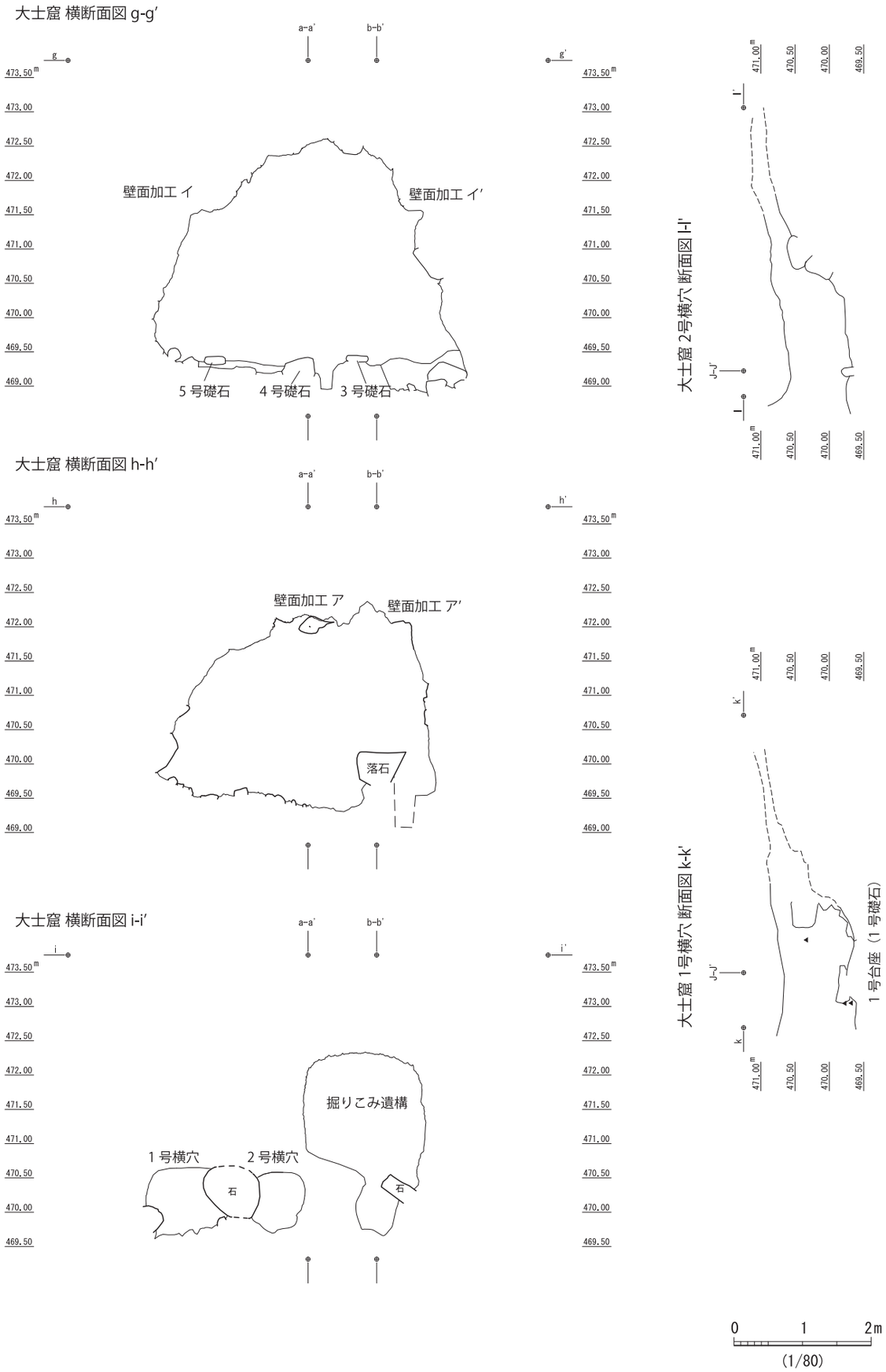
窟の幅は奥壁部で 3.48m、開口部で 4.56m、最大幅で 5.8m（d － d‘ライン）を測る。完掘時における高さは開口部において 4.64m、4 号礎石付近で 3.08m となる。天井は開口部から奥壁に向かって下がっていき、床面は奥壁の方が高く、開口部へ向かって傾斜しており、エレベーション図でラッパ状を呈する。奥行きは、雨落ちラインから換算して中央付近で約 7.2m、掘りこみ遺構のある右側では約 7.7m となる。窟は、掘りこみ遺構以外は自然に形成されたものと考えられる。側壁には洞窟を形成する岩盤が層を成して観察することができ、左右の側壁で岩相が異なっている。第 12 図には、側壁に露出している岩石も示している。


大士窟1号横穴・2号横穴 奥壁立面図
大士窟2号横穴 左壁立面図
大士窟 奥壁立面図
大士窟 横断面図 c-c′
大士窟 完掘平面図
大士窟 左壁立面図
大士窟 右壁立面図
壁面加工 ア
壁面加工 ア′
壁面加工 イ
壁面加工 イ′
壁面加工 ウ
1号横穴
2号横穴
3号横穴
9号礎石
刻字
N
0
2
4m
(1/80)

第 12 図　大士窟展開図



第 13 図　大士窟縦横断面図（1）



第 14 図　大士窟縦横断面図（2）

②遺構の変遷

前節のトレンチ調査の結果から、隼遺跡は３つの時期に大きく分けることができる。

第１段階：大士窟の利用開始時期、整地面である第２面が形成される前の段階である。第２面の調査終了後、１号トレンチを西側に拡大したところ、第２面よりも古相を示す遺物が出土した。奥壁側の遺構もこの時期より利用されていた可能性がある。

第２段階：大士窟の整備期、第２面とした段階である。第２面は洞窟手前側を中心に整地を行っていると考えられる。第２面では礎石やピットが検出されている。この面は炭化物の混じる層や、焼土層が確認される。

第３段階：大士窟内の再整備期、第２面で整備された窟内の施設が廃絶した後も、大士窟は利用が続くが、第１面として捉えた段階で再度整地をし、石仏を置き直すなどの再整備が行われている。第２面に相当する土層より上層から出土した遺物および第１面の遺構が該当する。

③第１段階（第 15 図）

第２面調査終了後、窟内床面の手前左側が岩盤に達していないことから、１号トレンチを西側に拡幅する形で掘り下げていった。その結果、１号トレンチ下層に落下している巨石の脇（１号トレンチ 10 層相当）から 18 世紀の陶器片（第 19 図―1）が出土し、第２面が形成（整地）される前の段階から人が入っていたことは確実となった。これに対して、奥壁側は第２面相当より下層はすぐ岩盤となり、調査過程で寛永通寶の出土が認められた。中には文銭（第 20 図―23）も含まれ、第１段階ではすでに洞窟奥部も利用されていたと推測できる。ただし奥側における遺物の出土分布状況については、第 16 図の第２段階遺構図に掲載している。

洞窟奥部には、左側に２つの横穴遺構（1･2 号横穴）、右側には掘りこみ遺構と１つの横穴遺構（3 号横穴）が確認される（第 12 図・14 図参照）。掘りこみ遺構は人力による掘削がみとめられるが、時期は不明であり後述する。１号横穴は、入り口の幅約 1m で高さ約 80cm、奥は約 2m まで人が進入することが可能である。１号横穴の入り口床面から、長方形の礫を２つ並べた礎石状の遺構が検出された。出土位置から柱などを建てるためとは考えにくく、仏像などを安置する台座であると想定される（１号台座）。２号横穴は、入り口の幅約 60cm で高さ約 100cm、奥は約 2.5m まで進入可能である。２号横穴からは台座のような遺構は検出されなかった。１号横穴と２号横穴は奥で連結している。３号横穴は、右側壁に沿って開口している。開口部は岩盤が含有する礫により二分されている。縦長に開口しており、人間が進入することは不可能である。女陰信仰などに関わるシンボルであった可能性も考えられる。３号横穴からは小動物の骨が数点出土したが、巣としての利用と思われ、記録はとらなかった。

④第２段階（第 16 図）

第２段階では、窟内を整備するにあたり、床面の整地を行っていると考えられる。この整地面（第２面）において検出された遺構を中心に第２段階とする。整地面の上には、炭化物や焼土の混じる層が水平に堆積し、窟利用時の堆積と推定される。

１号台座（１号礎石）を除いて、７基の礎石と、１基のピット、１箇所の炭化物が集中する範囲が検出された（礎石は検出された順に番号をつけ、２号礎石は欠番とした）。礎石のうち、主軸に直交する３・４・５号礎石の礎石列は、両側壁にある壁面加工イ―イ’の軸に対応している。３・４号礎石は、表面に木柱痕と思われる直径 20cm 程度の円形の痕跡をもつ。この壁面加工イ―イ’は、木柱を差し込む“ほぞ”の役割をもっていたと考えられ、それぞれの礎石に木柱を立て、上部に梁を組み上げる構造が考えられる。同じく、６号礎石・８号礎石も左側壁にある壁面加工ウに対応する礎石列の可能性を考えることができるが、右側壁には壁面加工ウに対応するほぞ穴状の加工痕跡が認められないため、積極的には評価しにくい。９号礎石および 10 号礎石については、水平な面を上面に向けている点を評価し、礎石の可能性があると判断した。これら礎石のうち、４号礎石は岩盤の自然石をそのまま使用しているが、他の礎石は移動が可能な転石である。そのため、窟内に構築物を整備する際は、４号礎石が機軸となっていたと考えてよいだろう。逆にその他の礎

石は、構築物の撤去後に位置が移動している可能性もある。

1号ピットは砂岩質の地盤に対して円形に掘りくぼめている（第18図）。直径は18cmで深さは検出面から6cmほどだが、実際はもう10cmほど高い面からの掘りこみが想定される。用途については、他にピットが検出されなかったため想定が難しい。礎石と組み合わせて建築物の柱穴として使用された可能性もある。

以上のように第2段階では礎石あるいはピットを用いて、何らかの構築物を整備していたことは確実である。構築物については第5章で考察する。また、2号炭化物範囲とした炭化物の集中については、第4章で年代測定および炭化材の同定を行った。2号炭化物範囲は、焼土や炭化物が混じる層の中でも、特に広がりをもって集中していたため図示をしている。

⑤第3段階（第17図）

第3段階は、第2段階で構築された何かしらの構築物が廃絶した後に形成、配置されたと考えられる遺構で、整地面が検出され（第1面）、礎石1基、1箇所の炭化物が集中する範囲を確認した。検出という意味では調査着手前から確認できていた、窟内奥部の2体の石仏および石造物も第3段階に含んでおく。

第1面は大きな礫などが少なく、崩落による堆積状況とは異なると判断し、整地面とした。奥側から手前側にかけて傾斜している。この傾斜の角度は、第2段階（第2面）に比べると傾きが大きい。これは、第2段階から第3段階にかけて、奥壁側ほど崩落堆積が厚く見られることに由来する。

7号礎石は入り口付近右側で検出された。30cm四方ほどの平坦面を上面に向けており、「上」と刻字されている。おそらく、礎石を入手した際に刻字し、窟内に配置する作業時に向きを指定する目的があったと考えられる。この礎石の上に何を乗せたかは不明である。

1号炭化物範囲は、1号トレンチで5層と捉えたものであり、東西2m以上、南北1mの範囲で炭化物の集中が確認された。第4章にて年代測定および炭化材の同定を行った。

窟内奥部には、馬頭観音2体と灯籠の笠1基が安置されている。石仏1は右側に「天明六丙年」の刻銘をもち左側に「六月吉日」と刻まれる。石仏2は同じく馬頭観音だが、像はやや小さく、一部赤色に塗られている部分がある。石仏および石造物は、この第3段階において再度据え直しが行われたものと想定される。

⑥時期不明の遺構（第18図）

以上のようにそれぞれの段階ごとに想定される遺構をまとめてきたが、壁面に加工された遺構についてはその時期決定が難しく、この項において単独で扱うことにする。

・掘りこみ遺構

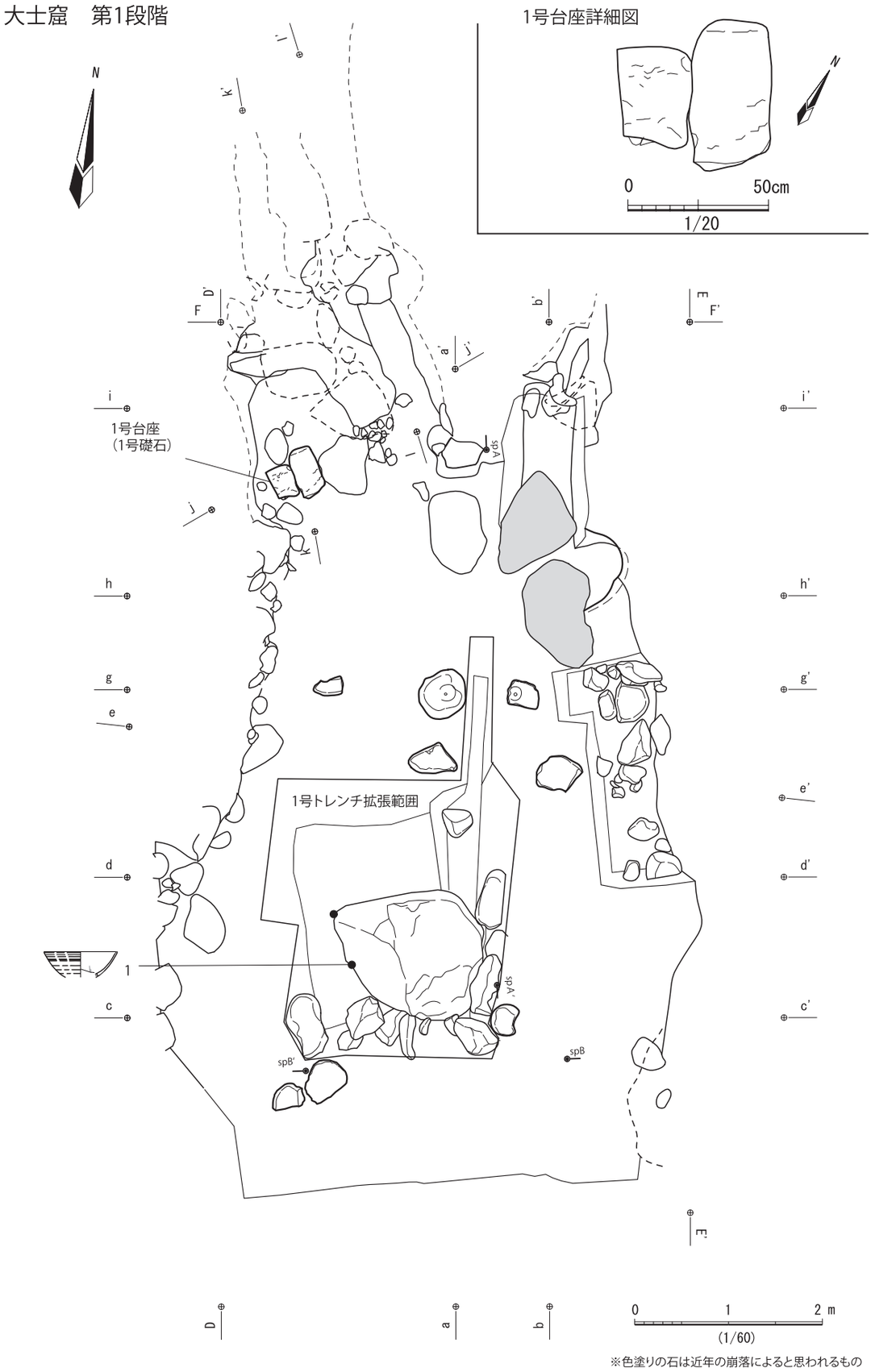
掘りこみ遺構は、奥壁右側に位置している。大黒窟のように方形を意識して、天井および側壁、奥壁をツルハシ状の工具によって掘り込んでいる。天井部で測定すると幅は1.3～1.6m、奥行きは2.0mの長方形、高さは奥壁で約1.4mの範囲で掘り込まれている。掘り込まれた時期は明確ではなく、往時の床面標高は不明だが、推定される高さは完掘時（第1段階）で約2.4m、埋没後（調査着手前）で約1.7m程度である。

壁面加工ア―ア’は、掘りこみ遺構の前面に主軸に直行する向きで施された加工痕で、「ア」は天井を、「ア’」は右側壁を削り出すことによって、木材をはめ込む「ほぞ」状となる。ただし、「ア」には鉄釘が刺さっており、釘を打ち込んだ時期は不明確だが何かを掛ける役割を持っていた可能性もある。また、奥壁のちょうど中央に、円形の小穴が確認される（壁面加工 エ）。天井から60cmほど垂下した位置で、直径7cmほどとなる。

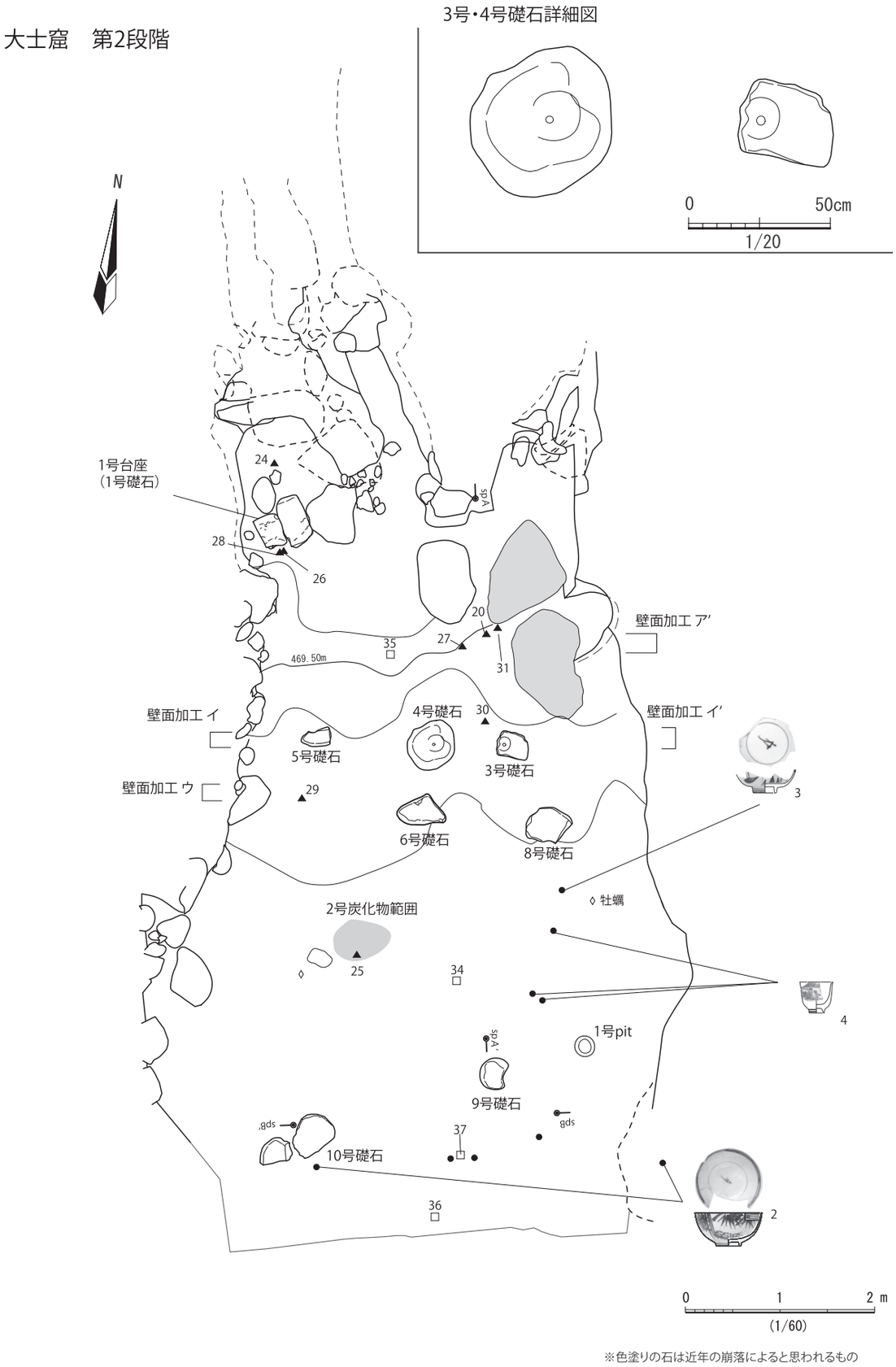
掘りこみ遺構は、何らかの意図があって造られたと考えられるが、該当部の床面を精査した際にはその利用痕跡を示すものは確認されなかった。壁面に残された情報から推測すれば、窟内における神聖な空間とし、外域と遮断する扉のような入り口部を設け、奥壁の壁面加工 エには掛仏のようなものを祀り秘仏としたと推測される。

・刻字

窟内中央付近右側壁において、陰刻による刻字が施されている。字は第2面の床面から1.6mほどの高さである。文字は風化の影響もあり分かりにくいが、現状では「 古 ヲ 」という形である。「吉日」などを推定することができる。



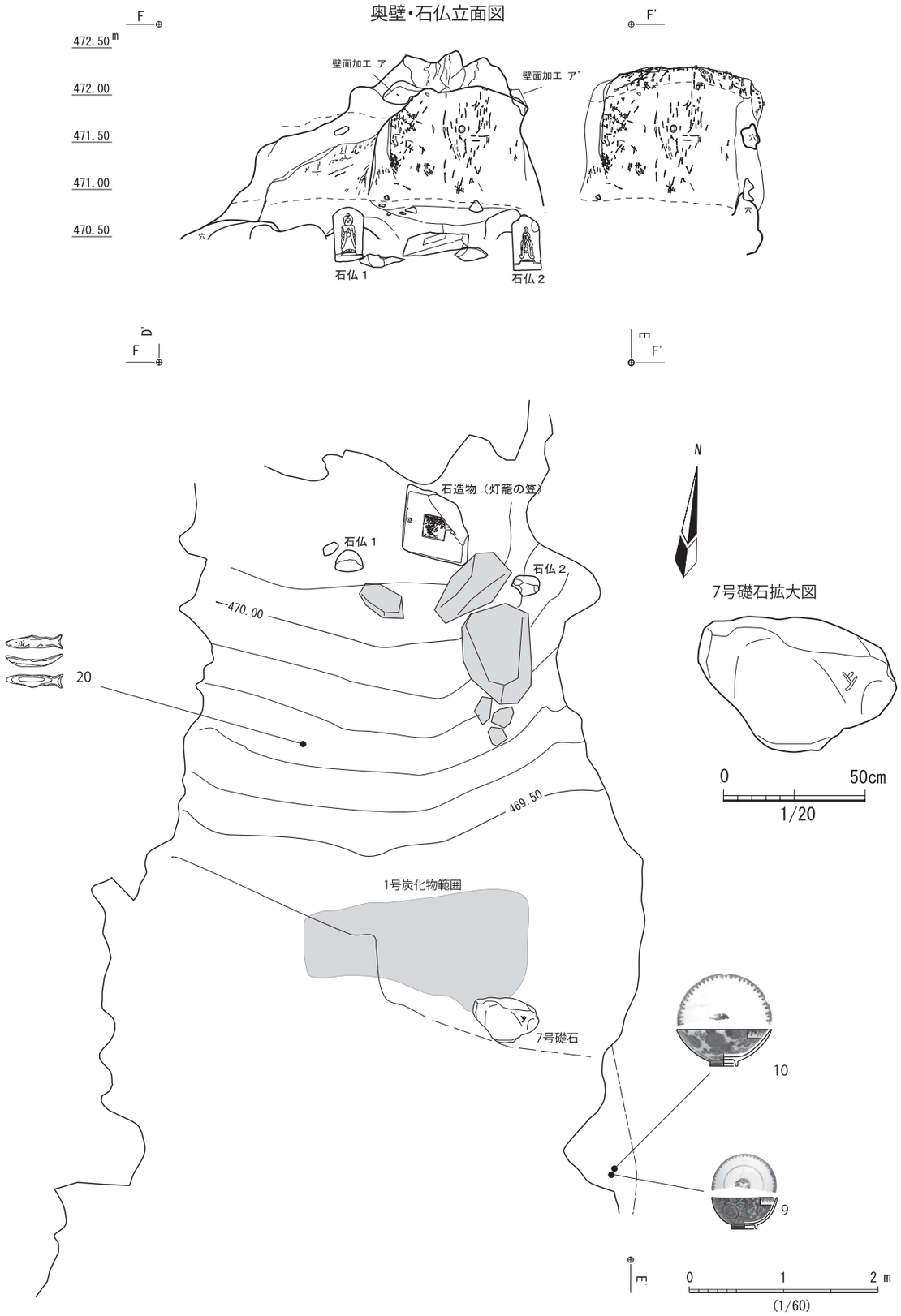
第 15 図　大士窟 第 1 段階遺構分布図



※色塗りの石は近年の崩落によると思われるもの

第 16 図　大士窟 第 2 段階遺構分布図

大士窟　第3段階

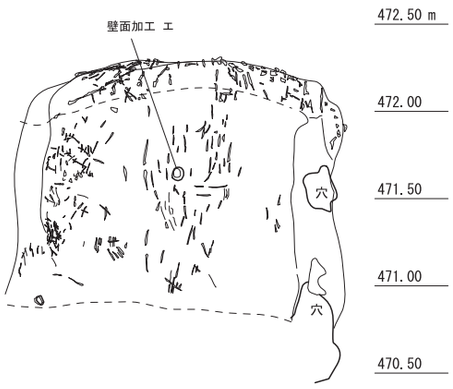


第 17 図　大士窟 第 3 段階遺構分布図

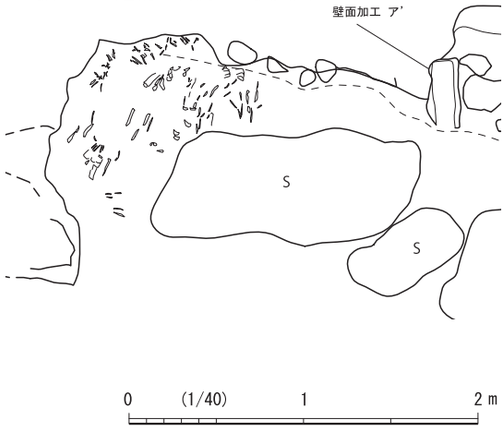
掘りこみ遺構　天井部（天が開口部方向）

掘りこみ遺構　左側壁　拡大図

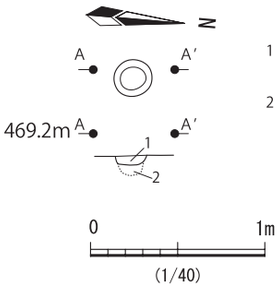
掘りこみ遺構　奥壁立面図



掘りこみ遺構　右側壁　拡大図

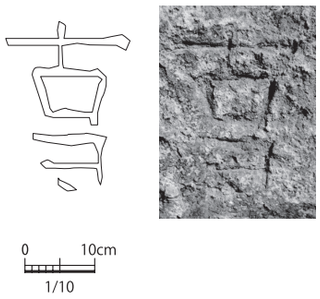


1 号ピット

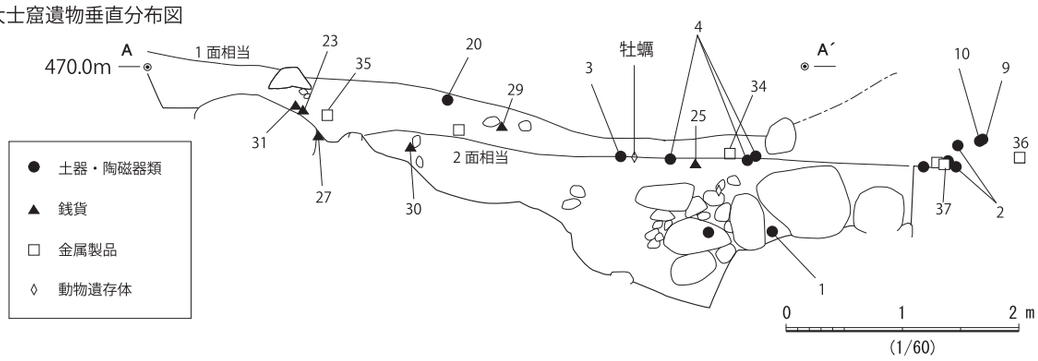


1　にぶい黄橙色（Hue10YR7/2）土層　しまりなし
　根を多く含む
2　灰白色 (HueN7/) 土層　しまりあり
　1 号ピット周辺の地山（砂岩系の岩盤）の掘りすぎ

右壁の刻字



大士窟遺物垂直分布図



第 18 図　大士窟遺構図面および遺物垂直分布図

第４節　遺物

大黒窟は遺物が出土しなかった。崩落土砂の中に天井を構成する岩盤と考えられる礫があったため、図化している（第 11 図）。

大士窟は、コンテナ箱にして１箱分の遺物が出土した。形状が分かるものを原則として図化した。金属製品については遺存状況のよい製品を図化し、銭貨については寛永通寶全点と昭和初期の一銭硬貨２点を掲載した。

○土器・陶磁器類（第 19 図）

・第１段階

第１段階では（1）が出土している。(1）は肥前産の浅丸形の陶器碗で、内面に文様を施す。やや深めの器高となり、時期は 18 世紀の前～中葉と考えられる。他に磁器の大瓶と考えられる小破片が（1）付近で出土しているが、図化しなかった。

・第２段階

第２面から出土した遺物である。(2)、(3）は染付の磁器碗で、(4)、(5）は小杯（酒杯）である。(4）は銅版転写されている。おおむね 19 世紀後半代の遺物が主体である。

・第３段階

第１面から第２面にかけての調査中に出土した遺物である。磁器碗は８点を図化した。(6)、(7）は染付けの碗で 19 世紀代と推定される。(8､9）は紙型版摺の丸形碗、(10）は銅版転写で見込には麒麟が描かれる。(11）はゴム版の平形碗、(12、13）もゴム版を利用しており、(13）は高台内に「東美陶器」の印銘をもつ。碗類は 19 世紀から 20 世紀の中ごろまでとバラつきがある。(14)は紙摺版の蓋物。(15)は白磁の薄手酒杯で、(16）は磁器の紅猪口。土器は（17）の灯明皿１点が唯一の出土であり、破片だが図化した。(18）は土瓶の注口の破片。土瓶の破片は同じく１面より別固体と想定できるものが出土している。また、特徴的な遺物として箸置（19、20）が出土している。(19）は唐辛子、(20）は魚をモチーフにしている。

○ガラス類（第 19 図）

ガラス類はビンの破片と考えられるものが第３段階で多数出土しているが、形が復元できる２点を掲載した。(21､22）はともに緑色の酒瓶であり､下半部から底部にかけて残存している。底部には（21）が「Ａ６」、(22）が「Ａ３」と陽刻されている。ビンの器壁には気泡があり陽刻されていることから、輸入ビンの可能性が高く､1900 年前後に流通したと推定される。遺跡の性格から、おそらくは清酒などを入れたと思われる。そのほかに 20 世紀後半以降に市販されたと考えられるワンカップ酒瓶（「七賢」）なども出土している。

○銭貨（第 20 図）

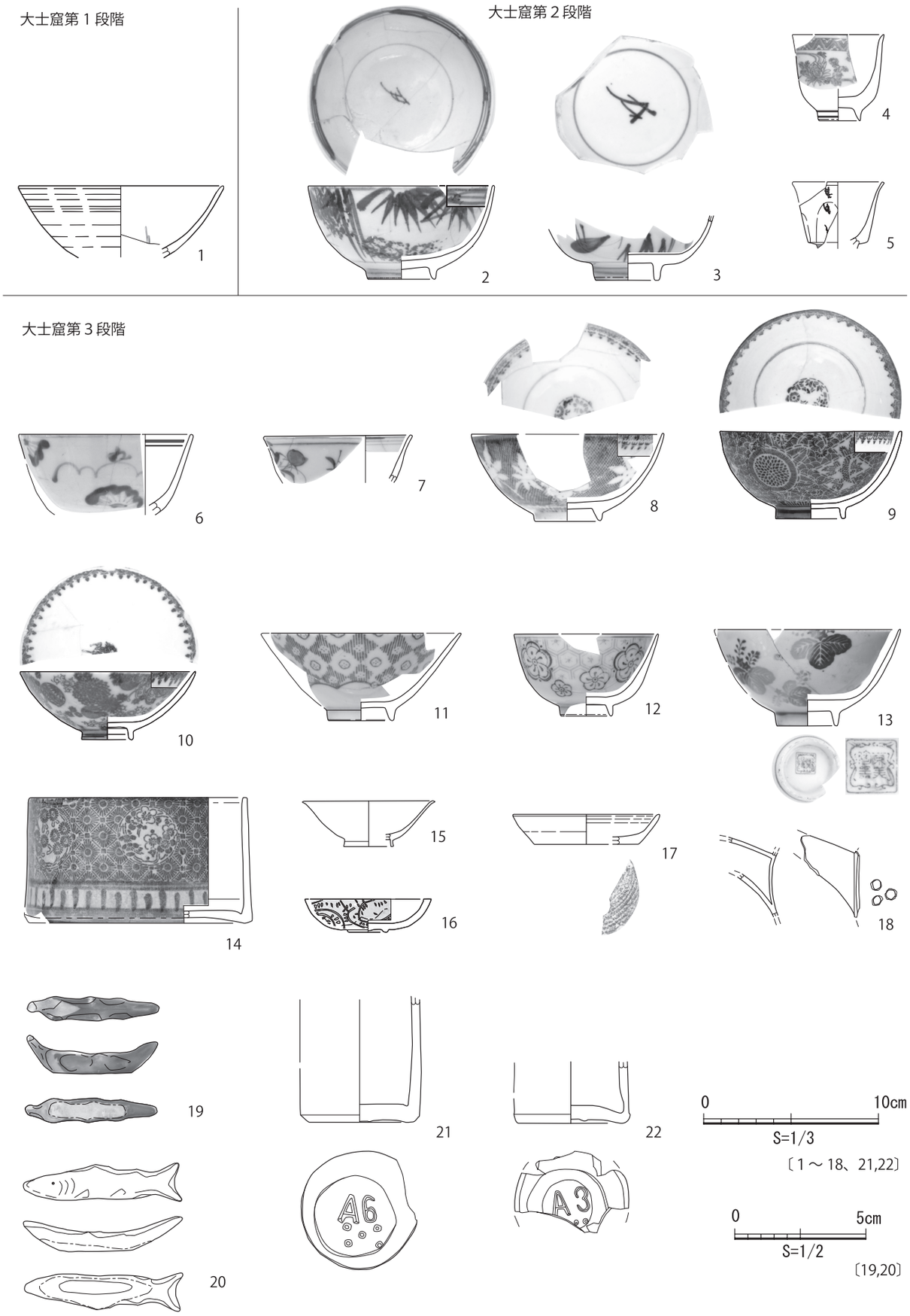
（23 ～ 33）は大士窟より見つかった銭貨である。(23）は寛永通寶のうちいわゆる「文銭」で 1668 年～ 1683 年の 16 年間のみの鋳造である。(24 ～ 27）はいずれも銅貨の寛永通寶（新寛永）であり、18 世紀代の鋳造、(28 ～ 31）は鉄貨の寛永通寶（鉄一文銭）で、(30・31）は遺存状況が比較的良好な資料である。洞窟内のため風雨に曝されなかったのが要因だろう。鉄一文銭は 18 世紀中～後葉あるいは 19 世紀中葉の鋳造とされる。陶磁器類に比較して、江戸時代全体を通して銭貨の出土量が多いのはひとつの特徴である。近代以降の銭貨として､(32）は昭和８年製の一銭銅貨､(33）は昭和 13 年～ 15 年製の一銭アルミニウム貨である。そのほかに平成元年製の 10 円銅貨が出土している。

○鉄製品（第 20 図）

刀子（34)、釘（35・36)、かすがい（37）を掲載した。釘は和釘である。このほかに、一括遺物として小釘が多数出土している。小釘は焼土や炭化物を含む層より出土しており、おそらくは部材に使われたまま焼却されたと考えられる。錆の塊と化しており図化はしなかった。写真のみ報告する（写真図版 17)。

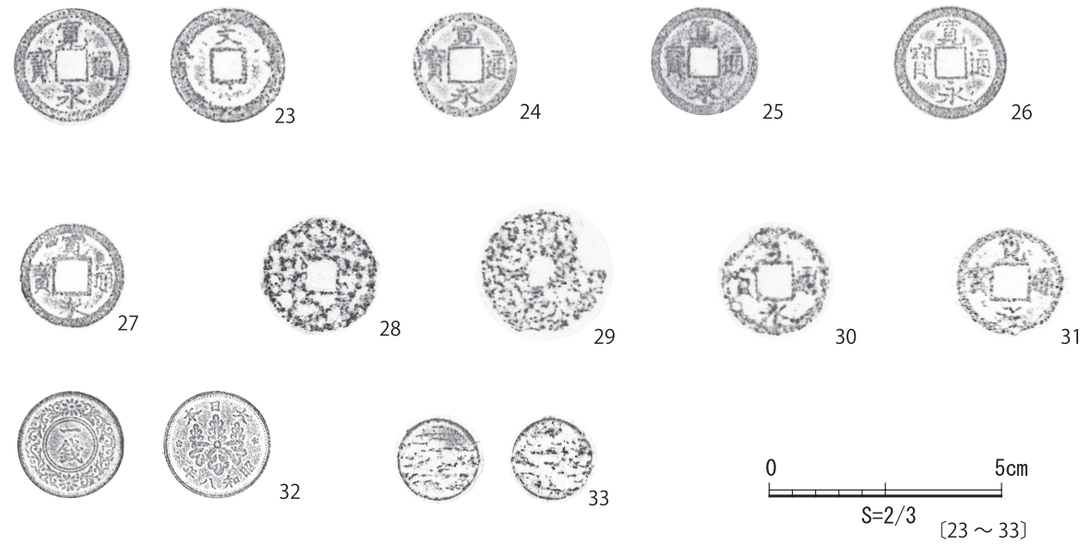
○動物遺存体

小型哺乳類の骨が数点出土したが、巣としての自然利用痕跡と思われる。第２面からは牡蠣の殻が出土した（写真図版 17)。食用としての利用が想定される。

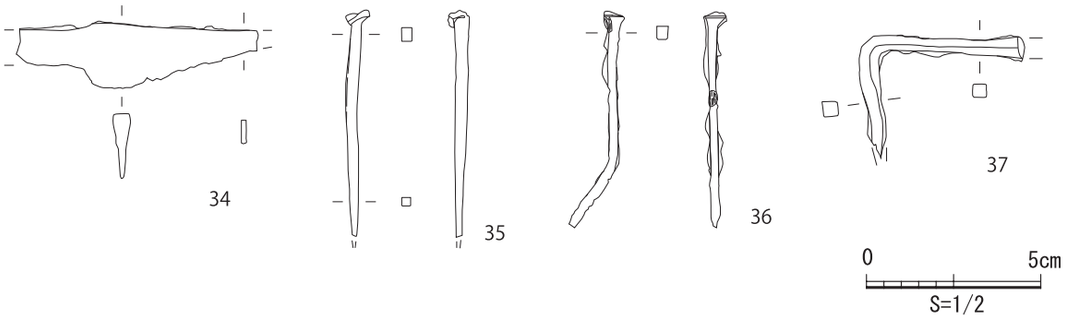

大士窟第１段階
大士窟第２段階
大士窟第３段階
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
A6
A3
0
10cm
S=1/3
〔1～18、21,22〕
0
5cm
S=1/2
〔19,20〕

第 19 図　遺物図版（1）

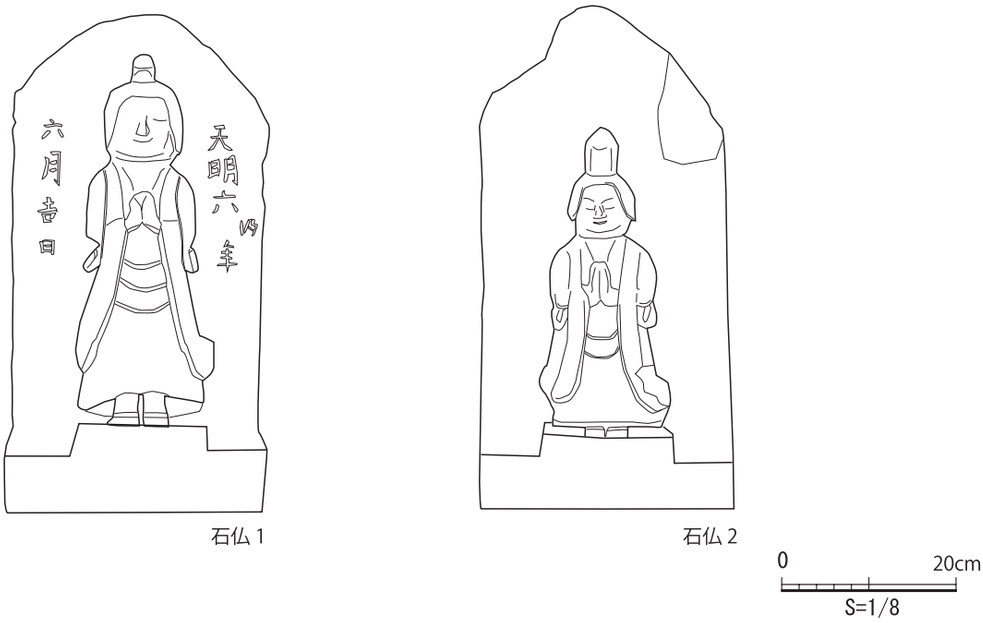
銭貨



金属製品



窟内石仏



第 20 図　遺物図版（2）

土器・陶磁器・ガラス（第 19 図）

番号	出土位置及び光波番号	材質	器種	形状特徴	法量（cm）				重量（g）	遺存度（%）	整形／調整	胎土色	装飾			印銘	推定産地	推定時期	備考
					口径	器高	底径	そのほか					絵付	絵付具／釉薬	文様				
1	2 面下 P28	陶器	中碗	浅丸形	(11.8)	残）3.9	―		23	30	ロクロ	薄灰	手描	透明釉	内面）山水文か		肥前	1700 ～ 1780	貫入あり
2	2 面 4 区 .P23.24	磁器	碗	丸形	11.0	5.5	4.0		127	80	ロクロ	白	手描	コバルト釉	外面）草花文　内面）連弧文　見込）圏線　窯印		瀬戸美濃	1870 ～	
3	1 面 4 区 .P5	磁器	碗	丸形	―	残）3.7	4.0		73	30	ロクロ	白	手描	コバルト釉	外面）草花文　見込）圏線　窯印			1870 ～	
4	2 面 4 区 .P31 ～ 33	磁器	小杯（酒杯）	端反	(5.2)	(4.9)	(2.6)		15	20	ロクロ	白	銅版転写	コバルト釉	外面）流水に菊花文			1890 ～ 1920	
5	2 面 4 区	磁器	小杯（酒杯）	端反　面取	(5.3)	残）3.7	―		5	20	ロクロ	白	手描	コバルト釉	漢詩文			1870 ～ 1910	
6	1 面 4 区 .1T	磁器	碗	丸形	(10.0)	残）4.6	―		32	20	ロクロ	白	染付け　手描	呉須	外面）半菊文　内面）圏線		肥前系	1800 ～ 1880	貫入あり
7	1 面 4 区 .2 面 4 区	磁器	碗	端反	(8.4)	残）2.9	―		8	10	ロクロ	白	染付け　手描	呉須	外面）草花文　内面）圏線		瀬戸美濃	1800 ～ 1880	
8	1 面 .1 面 4 区 .2 面 2 区 .1T.3T. 一括	磁器	中碗	丸形	11.0	5.0	4.0		54	30	ロクロ	白	型紙摺	コバルト釉	外面）楓葉文・連弁文　内面）瓔珞文　見込）松竹梅文・圏線		美濃	1880 ～	
9	1 面 P25. 一括	磁器	中碗	丸形	10.4	5.1	4.0		76	60	ロクロ	白	型紙摺	コバルト釉	外面）青海波に草花文、ソテツ　内面）瓔珞文　見込）松竹梅文・圏線		瀬戸美濃	1880 ～ 1900	
10	1 面 P26	磁器	碗	平形	10.0	4.0	3.0		46	50	ロクロ	白	銅版転写	コバルト釉	外面）菊花文　鞠文　内面）瓔珞文　見込）麒麟		瀬戸美濃	1890 ～ 1920	
11	1 面 4 区 .2 面 2 区 . 一括	磁器	碗	平形	11.4	5.1	3.8		46	30	ロクロ	白	ゴム版		外面）菱形に花　縦縞			1930 ～	
12	1 面 4 区 .2 面 2 区	磁器	碗	丸形	8.2	4.7	(3.0)		61	60	ロクロ	白	ゴム版	コバルト釉	外面）亀甲文　梅花文			1930 ～	
13	1 面 4 区 . 一括	磁器	中碗	丸形	10.6	5.5	3.4		64	40	ロクロ	白	ゴム版　上絵付		桐文	東美陶器		1930 ～	
14	1 面 4 区	磁器	蓋物	平底	12.4	7.2	13.0		243	65	ロクロ	白	型紙摺　手描	コバルト釉	外面）竹梅菊文　連弁文			1880 ～ 1900	
15	1 面 4 区 .2 面 3 区	磁器	薄手酒杯	端反	(7.6)	2.6	(2.4)		6	20	ロクロ	白	白磁	透明釉				19C ～	
16	1 面 4 区 . 一括	磁器	紅猪口	蛸唐草系	(7.2)	1.9	2.4		13	20	型押	白	白磁	腰下無釉				19C ～	高台削り出し
17	1 面 3 区	土器	かわらけ		(8.4)	1.7	(6.0)		13	20	ロクロ	黒	―					19C?	炭素吸着
18	1 面 4 区	陶器	土瓶	不明	―	残）4.7	―		16	注口のみ	注口貼付け	灰白	鉄絵	白泥　透明釉			信楽か	19 ～ 20C 初	貫入あり
19	1T	磁器	箸置	唐辛子形	長さ）6.0	高さ）1.5		最大幅）1.1	5	100	型押か	白	彩色　手描		ヘタ）緑　実）赤			近代以降	
20	1 面 P1	磁器	箸置	魚形	長さ）5.2	高さ）1.3		最大幅）1.5	7	100	型押か	白	手描	目を黒色絵付				近代以降	
21	1 面 4 区 .2 面 4 区 .2T. 一括	ガラス	ビン	平底	―	残）7.8	6.6		158	破片	型合せ規格製品 気泡あり	濃緑　透明	―	―	底面）「A3」 円形陽刻 5 個			近代	輸入ビンの再利用品か
22	1 面 4 区 .1T	ガラス	ビン	平底	―	残）3.4	6.6		45	破片	型合せ規格製品 気泡あり	濃緑　透明	―	―	底面）「A6」 円形陽刻残 3 個			近代	輸入ビンの再利用品か

銭貨（第 20 図）

番号	出土位置及び光波番号	銭種	法量（mm）			質量（g）	備考
			外縁径	内郭径	外縁厚		
23	2 面　P20	寛永通寶（文銭）	25.1	6.0	1.1	3.20	
24	P8（2 号トレンチ）	寛永通寶	22.9	6.7	1.2	2.27	
25	2 面　P10	寛永通寶	23.5	5.9	1.1	3.29	
26	2 面　P12	寛永通寶	24.4	5.8	1.2	3.10	
27	P14（1 号トレンチ）	寛永通寶	22.6	6.5	0.9	2.40	
28	2 面　p7	寛永通寶 (鉄銭)	24.9	5.5	2	2.52	処理後の法量・質量
29	2 面　p9	寛永通寶 (鉄銭)	26.4	6.1	2.3	2.68	処理後の法量・質量
30	2 面　p13	寛永通寶 (鉄銭)	23.2	6.2	1.7	3.11	処理後の法量・質量
31	2 面　p21	寛永通寶 (鉄銭)	23.1	6.2	1.5	2.61	処理後の法量・質量
32	1 面	一銭銅貨	23.1		1.2	3.70	
33	1 面	一銭アルミ貨	17.7		1.5	0.96	一部裂傷

金属製品（第 20 図）

番号	出土位置及び光波番号	器種	法量（mm）			質量（g）	備考
			長軸	短軸	厚さ･最大幅		
34	p4	刀子	69	10	19	7.12	処理後の法量・質量
35	2 面　p11	和釘	65	6	3	3.7	処理後の法量・質量
36	p19	和釘	65	6	2	1.99	処理後の法量・質量
37	p18	鎹	44	33	4	5.66	処理後の法量・質量

第４章　自然科学分析

株式会社加速器分析研究所

第１節　放射性炭素年代測定

①測定対象試料

隼遺跡は、山梨県山梨市牧丘町隼（北緯 35° 43′ 32.7″、東経 138° 42′ 20.0″）に所在し、笛吹川右岸、隼山の中腹にある洞窟遺跡である。測定対象試料は、洞窟内で炭化物や焼土などが集中して検出された範囲等から採取された炭化材４点である（第３表）。なお、これらの試料については、樹種同定が行われている（第２節参照）。

試料１～３は自然洞窟の大士窟、試料４は人工洞窟の大黒窟で採取された。大士窟では、表土下の第１面で検出された１号炭化物範囲より試料1、その下の第２面で検出された２号炭化物範囲より試料2、同じく第２面の炭化物や焼土が認められる箇所より試料３が採取された。大黒窟では、ほぼ床の直上で１号炭化物範囲が検出され、試料４が採取された。時期は、大士窟の第１面が明治期以降、第２面が近世末から明治期頃、大黒窟が 14 ～ 15 世紀頃もしくは近世頃と推定されている。

②測定の意義

洞窟内で修行などが行われた時期を明らかにする。

③化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第３表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

④測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第３表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第３表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 3 表に、補正していない値を参考値として第 4 表に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 4 表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

⑥測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

大士窟出土試料の ^{14}C 年代は、試料 1 が 250 ± 20yrBP、試料 2 が 60 ± 20yrBP、試料 3 が 280 ± 20yrBP である。暦年較正年代を検討すると、2 面で採取された試料 2、3 の年代値は 2 σ 暦年代範囲でも重ならず、年代差が認められる。1 面で採取された試料 1 の年代値は、2 面の試料 2、3 と重なる範囲から新しい範囲までを含む。2 面の試料に年代差があるが、1 面と 2 面の上下関係には矛盾しない結果である。

これらの結果を解釈する上で、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木が死んだ年代は、最後に形成された最外年輪を測定することで確認できるが、試料がより内側の年輪に相当するものであれば、最外年輪からの年輪数の分、樹木が死んだ年代より古い年代値が示される。大士窟の試料では、試料 3 に樹皮が見られ、他の 2 点には認められなかった。このため、古木効果を踏まえると、試料 3 は確実に 16 世紀前半から 17 世紀半ば頃となり、推定より古い結果と見なされる。試料 1、2 は、ここで示された年代値と同等か、それより新しいと考えられることから、推定と矛盾しない。ただし、試料 1 の年代が 17 ～ 18 世紀頃の確率が高いことを考慮すると、その下位に属する試料 2 も含め、2 点とも推定より古いものである可能性がある。

大黒窟出土試料 4 の ^{14}C 年代は 90 ± 20yrBP である。暦年較正年代は、2 σ で見ても 17 世紀末から 20 世紀前葉頃であることから、14 ～ 15 世紀頃という推定時期は含まれず、近世という推定に合致する。この試料にも樹皮はないため、この木が死んだ年代は示された年代値より新しい可能性がある。

第 3 表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-160956	試料 1	大士窟 1 号炭化物範囲　1 面	炭化材	AAA	-28.78 ± 0.62	250 ± 20	97.00 ± 0.27
IAAA-160957	試料 2	大士窟 2 号炭化物範囲　2 面	炭化材	AAA	-27.89 ± 0.60	60 ± 20	99.26 ± 0.28
IAAA-160958	試料 3（光波 NO.22）	大士窟　2 面	炭化材	AAA	-26.84 ± 0.52	280 ± 20	96.58 ± 0.28
IAAA-160959	試料 4	大黒窟 1 号炭化物範囲	炭化材	AAA	-27.61 ± 0.54	90 ± 20	98.94 ± 0.26

[#8162]

第４表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

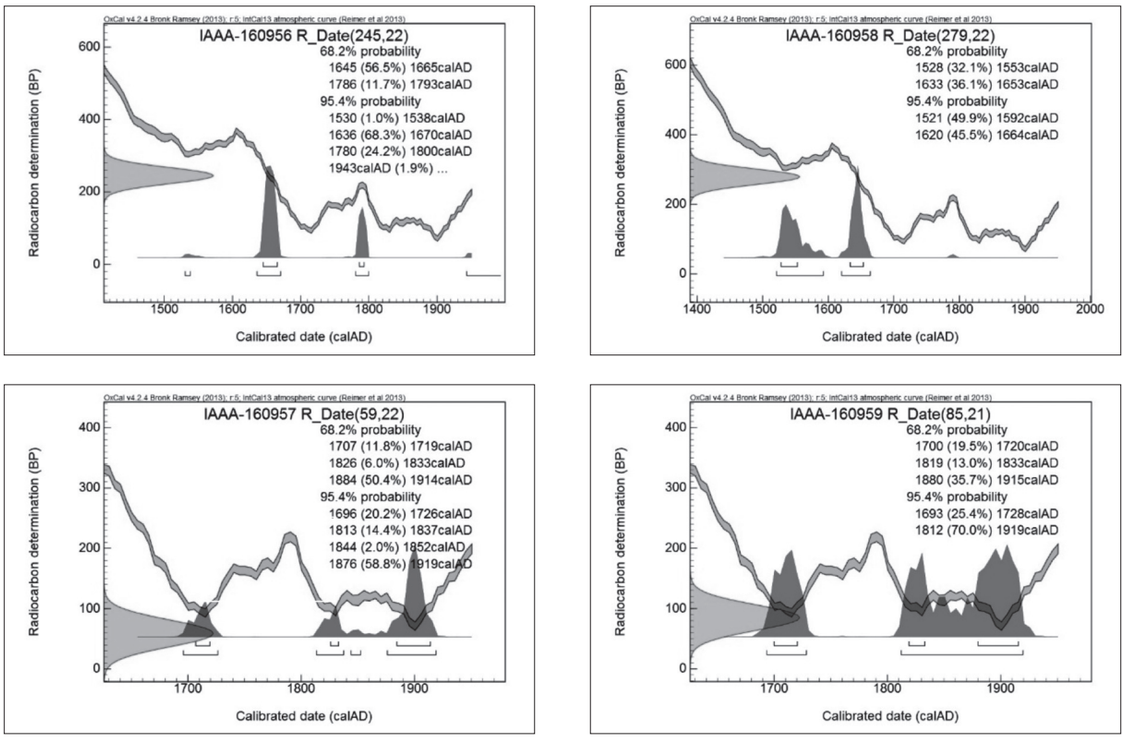
測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-160956	310 ± 20	96.24 ± 0.24	245 ± 22	1645calAD - 1665calAD (56.5%)* 1786calAD - 1793calAD (11.7%)*	1530calAD - 1538calAD (1.0%)* 1636calAD - 1670calAD (68.3%)* 1780calAD - 1800calAD (24.2%)* 1943calAD - ... (1.9%)*
IAAA-160957	110 ± 20	98.67 ± 0.25	59 ± 22	1707calAD - 1719calAD (11.8%)** 1826calAD - 1833calAD (6.0%)** 1884calAD - 1914calAD (50.4%)**	1696calAD - 1726calAD (20.2%)** 1813calAD - 1837calAD (14.4%)** 1844calAD - 1852calAD (2.0%)** 1876calAD - 1919calAD (58.8%)**
IAAA-160958	310 ± 20	96.22 ± 0.25	279 ± 22	1528calAD - 1553calAD (32.1%) 1633calAD - 1653calAD (36.1%)	1521calAD - 1592calAD (49.9%) 1620calAD - 1664calAD (45.5%)
IAAA-160959	130 ± 20	98.41 ± 0.24	85 ± 21	1700calAD - 1720calAD (19.5%)** 1819calAD - 1833calAD (13.0%)** 1880calAD - 1915calAD (35.7%)**	1693calAD - 1728calAD (25.4%)** 1812calAD - 1919calAD (70.0%)**

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

** Warning! Date probably out of range

（これらの警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。*、** の順にその可能性が高くなる。）



[図版] 暦年較正年代グラフ（参考）

なお、試料 1、2、4 の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する（第４表下の警告参照）。

試料の炭素含有率は 60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第２節　樹種同定

はじめに

山梨県山梨市に位置する隼遺跡は、笛吹川右岸の隼山中腹に形成された洞窟遺跡である。本報告では、近世以降に修行・祈祷の場として利用された自然洞窟である大士窟から採取された炭化材と、時期詳細が不明の人工洞窟である大黒窟から採取された炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

①試料

試料は、大士窟および大黒窟から出土した炭化材４点（試料 1−4）である（第５表）。なお、これらの試料については、放射性炭素年代測定が行われている（第４章第１節参照）。

②分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）･柾目（放射断面）･板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する（写真図版 1）。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地･伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

②結果

樹種同定結果を第５表に示す。炭化材は、針葉樹１分類群（マツ属複維管束亜属）と広葉樹２分類群（オニグルミ・ケヤキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2−3 個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1−3 細胞幅、1−40 細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は 1−2 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1−6 細胞幅、1−50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

第５表　樹種同定結果

番号	遺構名	層位	形状	種類	備考
試料１	大士窟１号炭化物範囲	１面	芯持丸木	ケヤキ	一部未炭化
試料２	大士窟２号炭化物範囲	２面	破片	オニグルミ	
試料３ (光波 NO.22)	大士窟	２面	破片 (節付近)	マツ属複維管束亜属	
試料４	大黒窟１号炭化物範囲		破片	マツ属複維管束亜属	

④考察

炭化材には合計３種類が認められた。各種類の材質についてみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、本州ではアカマツまたはクロマツがある。木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。また、松脂を多く含み、燃焼性も高い。

遺構別にみると、自然洞窟を利用した近世以降の修行・祈祷の場と考えられている大士窟の１面１号炭化物範囲の炭化材は広葉樹のケヤキに同定され、比較的硬い木材を利用したことが推定される。なお、本試料は、一部が未炭化で残っており、木炭ではなく乾かした木材を燃料としたことが推定される。２面２号炭化物範囲の炭化材は広葉樹のオニグルミに同定された。樹種は異なるものの、硬い木材を利用している点は１面１号炭化物範囲と同様の用材選択といえる。同じく２面で面的に炭化物や焼土が見られた範囲から採取された炭化材試料３は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定され、燃焼性の高い木材を利用している。

人工洞窟の大黒窟１号炭化物範囲の炭化材は、マツ属複維管束亜属が認められ、燃焼性の高い木材を利用したことが推定される。

【参考文献】

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
小林達雄編 2008 総覧縄文土器 , 総覧縄文土器刊行委員会 , アム・プロモーション
島地謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
林昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

※）本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

第５章　総括

第１節　自然科学分析についての所見

ここではまず、第４章の自然科学分析の結果について、調査成果を踏まえた上での所見を示したい。今回、自然科学分析では、大黒窟１点、大士窟３点の採取炭化物をそれぞれ年代測定、樹種同定の委託を行っている。

大黒窟で検出された１号炭化物範囲からサンプリングした炭化材（試料４）の放射性炭素年代測定による暦年較正年代は、19 世紀末頃の可能性が最も高く、遡る可能性があっても 18 世紀初頭頃である。１号炭化物範囲は、大黒窟を埋没させていた土砂を除去した後に検出されたもので、土砂中には天井を構成する岩盤も含まれていた。このことから大黒窟の天井崩落および埋没（廃絶）した時期は、遡って 18 世紀、遅くとも昭和初期（地域住民の証言から。子供の時にはすでに埋没していたという）までに求められよう。『甲斐国志』の記述時には窟が周知されていたとすれば、19 世紀以降と考えるのが妥当である。試料４の樹種はマツであり、護摩焚き痕の可能性もある。

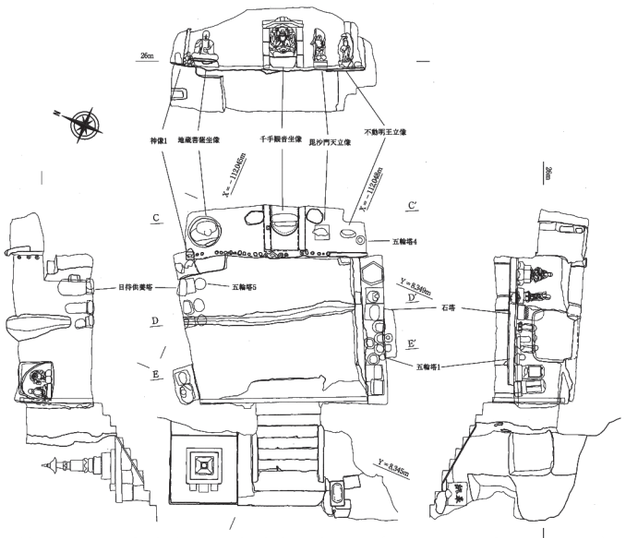
大士窟の１号炭化物範囲は、第３段階（1 面）で検出された遺構で、遺物の出土状況から近代以降と推定していた。採取した試料１の結果は 250 ± 20yrBP と古い値となったが、同時に較正可能な範囲を超える新しい年代となりうる警告が出ており、注意が必要である。試料２は、１号炭化物範囲の下層、第２段階（2 面）の２号炭化物範囲から採取したもので、較正年代は 19 世紀後半を示している。第２面の出土遺物（陶磁器類）は同じく 19 世紀後半の遺物が主体であり、年代測定結果と矛盾しない。試料３は、「第２面採取」として測定を依頼したが、３～５号礎石列よりも奥側で採取した炭化材サンプルである。測定結果は、較正年代で 16 世紀前半から 17 世紀半ばで確実という値を示している。この結果は、すでに本報告書において反映しているが、窟の奥側の空間が第１段階（第２面の手前側が整地される以前）より使用されていたことを示す根拠となっている。樹種は試料１がケヤキ、試料２オニグルミ、試料３マツである。護摩焚き痕の可能性も考えられるが、第２面では窟内に構築物が推定されることから、これらの建築部材を燃焼した痕跡である可能性も否定できない。なお、倉田氏の聞き取り調査では、幼少期、遺跡周辺にはクルミの木が多く生えていたという。

第２節　大黒窟の考察

（１）やぐらとの類似性と年代観について

前節で述べたとおり、窟の使用されていた下限はある程度まで推定できるが、築造時期はいつごろであろうか。大黒窟の構造が、「やぐら」に類似することは第３章で指摘したとおりである。「やぐら」は、鎌倉では 13 世紀後半から 15 世紀初頭にかけて造られている。“大黒窟が鎌倉地方のやぐらと同様に造られた”と仮定し、大黒窟の築造年代を当該時期にまで遡ることも想定してよいだろう。

さて、やぐらは納骨等が行われる墳墓窟としての性格が強調されるが、本来的には寺院に伴う石窟≒窟堂として、南宋仏教文化を取り入れる中で生まれたものとされている（田代 1998）。一般的にやぐらは鎌倉を中心として同じく神奈川県の三浦半島、対岸の房総半島南部（井上 2004）が分布の中心となっており、この「やぐら」状の遺構と目されるものが各地において報告されている。すなわち宮城県の松島地方（加藤 1997）、能登半島（間宮 2004：地頭町中世墳墓窟など）、福岡県豊前市（時枝 1985：



第 21 図　千手院１号やぐら実測図（S=1/160, 千葉県 2012）

求菩提山妙法寺15号窟)、大分県（山本1995：大分市口戸窟、渡部ほか1995：豊後大野市普済寺跡「やぐら」）である。また福島見いわき市にも存在しているようである（和深1987未見)。静岡県西伊豆町の白岩山窟も写真で見る限りやぐら状を呈している。山梨県においても、すでに櫛原功一氏が大黒窟（調査着手前）ならびに万力霊岩寺の穴観音窟が「やぐら」に類するのではないかという見解を示しているが（櫛原2006・2012)、今回の調査において床面構造が把握できたことは大きい。

さて、大黒窟からは一切の遺物が出土せず、土坑などの遺構も確認していない。やぐらが有する墳墓窟としての性格を表す供養塔や納骨壷、納骨用の土坑など納骨および葬送にまつわる遺物が欠如しており、墳墓窟として利用されていたと積極的には評価できない。

改めて大黒窟とやぐらを比較してみよう。やぐらの玄室規模や形態についてはさまざまなタイプが存在しているが、鎌倉のやぐらの法量は平均で幅2.81 m、奥行き2.65 mとされる（松葉2013)。また、鈴木庸一郎氏は山に造られるやぐらと谷部に造られるやぐらを比較し、谷（低地）のやぐらは4～5 m四方の規模が多く、山のやぐらには2 m四方以下のものが多いという（鈴木2009)。大黒窟の規模は鎌倉のやぐらの全体的な平均値に比較して規模がやや大きいといえる。大黒窟で確認される壇は、鎌倉のやぐらにも確認できるが、壇をもつやぐらの多くは奥壁と側壁の三方に作り出すものが多く、高さも大黒窟に比べると低い。

大黒窟に類似する例の一つとして、千葉県の千手院1号やぐらの実測図を掲載した（第21図)。千手院1号やぐらは壇上に石仏を置くもので、大黒窟も同様に須弥壇として利用したと考えられる。

また、やぐらの多くは寺院の背後に立地しているとされ、群を成していることが多い。大黒窟の場合は、急斜面に単独で位置し、麓には現在に残る寺院は存在していない。ただし、清雲俊元氏によれば、遺跡の眼下の平地には林光院という廃寺が存在していた可能性があるという。眼下の集落も「西門」という小字名が残っており、「万霊塔」碑をはじめとした石造物群も存在し、寺院があった可能性は極めて高い。

これらのことから、大黒窟が「やぐら」状の遺構であることは間違いないが、それはいわゆる墳墓窟として利用されたのではなく、石窟そのものが本来もつ、寺院に付随する窟堂としての役割を担っていた可能性が高いと思われる。また鎌倉瑞泉寺の葆光窟や建長寺半僧坊の開山座禅窟などのように、座禅窟としての利用も無視すべきではないだろう。いずれにしても、その構築は中世段階まで遡ると考えている。

（2）窟内の構築物について

窟の平面形と溝の配置についても再度考えてみたい。第3章第3節で述べたとおり、大黒窟の溝は排水溝ではなく根太材を配置するための遺構であると推定される。鎌倉にもやぐら内に溝を有するものがある。多くは、四周に掘りこみ排水溝の役割を担ったと考えられている一方で、わずかに大黒窟に類似する例も確認できる。西方寺跡北やぐら（かながわ考古学財団2008）は、主軸方向にほぼ等間隔の4条の溝を設け、入り口部には扉を設けた痕跡が残る。山王堂東谷やぐら群9号やぐら（かながわ考古学財団2005）においても、主軸方向に8条、直行する2条の溝があり、壁面天井際にもピットが掘り込まれていることから、屋根か梁をもつ上屋構造を有するやぐらと考えられている。

大黒窟の場合は、上屋構造については壁面上部にほぞ穴などが認められないことから、その推測が困難である。3本の根太に対し直交して板などを敷き、床を張っていた可能性は高いが、天井や梁を設けていたかは不明である。奥壁床際にほぞ穴があることから、根太がさらに前方部に伸び、懸造の建築物があった可能性も指摘できる。その場合は、窟の開口部に堂の前方部だけ取り付けた形になるだろう。

さて、この上屋構築物が作られた時期についても言及したい。大黒窟は長方形の平面プランではなく、左側壁が開口部に向かって狭まる台形状となる。そして、床面に検出された溝は、奥壁において左側壁と1号溝の間が広く、3号溝と右側壁は壁に沿っている。1号溝は主軸に合わせて直線的に掘られているため、開口部付近において側壁に沿う形となる。つまり、この設計では、奥壁左付近においてデッドゾーンが生まれているのである。このことから、窟の平面形と構築物の設計には誤差があることが分かり、窟が掘り込まれてしばらくした後に、窟内に構築物を配するため再加工を行った可能性が考えられるのである。窟の利用方法に変化があったことは十分に考えられる。

（3）万力霊岩寺の窟との比較

大黒窟から５キロほど南下した、山梨市万力にある霊岩寺には、現在も堂として使用される「やぐら」状の石窟が存在している（写真図版 10）。同じく山口軽石凝灰石に穿たれた人工の石窟だが、斜面地ではなく山裾に位置している。大士窟と同じく「穴観音」として知られている。石窟は２つの並んだ窟があり入り口付近で通路を設け連結している。それぞれ南西方向に開口する。境内には石窟の手前に木製の堂を組む。窟の東側にも、やや岩盤を掘り込んだ遺構が認められ、石仏群が置かれている。

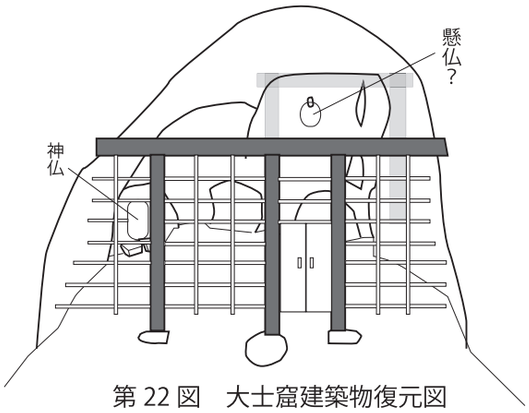
霊岩寺の窟のうち、東窟は窟内に木板で床を張り、奥壁には龕及び壇を設けている。壁面にはほぞ穴がいくつか認められ、奥壁付近では梁を通している。西窟は奥壁及び左壁に龕を設け、36 体の石仏を祀っている。床面の施設はない。いずれも、窟の法量は大黒窟に近く、同じく「やぐら」状を呈するものである。

大黒窟が寺院の窟堂としての役割を担っていたとすれば、霊岩寺の窟のような利用形態が想定できる。すなわち、床面には根太の上に板材を張り、奥壁の壇上には仏像などを祀っていた姿が想像できるのである。

第３節　大士窟の考察

（1）窟内の構造について

大士窟の床面からは７基の礎石状の礫と１基のピットが検出され、窟内に何かしらの上屋構造を持ち合わせていたと推測できる。しかし、礎石は集落遺跡でみられるような、いわゆる礎石建物のように整然と柱間を保つものではなく、窟内に収まる堂舎状の建物が建てられていたかどうかは不確実である。礎石は石造物等を配置する役割を持っていた可能性も想定しなければならない。



第 22 図　大士窟建築物復元図

一方で、礎石のうち３・４・５号礎石は列をなし、両側壁の壁面加工イ―イ’とも整合性が保たれることから、廃絶後に礎石が動かされていないという前提で、ここに梁と柱で構築した間仕切り状の施設を想定する（第 22 図）。このイメージ図には、格子を設け、観音開きの扉も示してみた。あくまでこれは仕切り部分のみの想定だが、第２段階で整地している状況からは、仕切り部分の手前に床板を張るような構造だった可能性もある。逆に言えば、復元図に示したシンプルな構造であれば、第１段階まで遡ることも十分考えられる。

この間仕切りによって、洞窟内の奥が神聖な空間としていっそう区分され、禁制の聖地となる。奥の空間では、１号横穴には１号台座上に神仏を配していたと考えられ、２号横穴にも置かれていた可能性がある。奥右側の掘りこみ遺構は、構築年代は不明だが、これら間仕切り施設と時期が並立するのであれば、壁面加工エに懸仏などを配し、壁面加工ア―ア’を利用した扉を設けることによって、秘仏を収める厨子状の空間ができあがる。

また、礎石列より奥側に古銭の出土が多く、陶磁器類が少ないことからも、空間利用を厳密に分けようとしていた意識が読み取れる。古銭はおそらく賽銭として奉納されたものだろう。横穴に配置されたと推定される神仏については、第３段階で据えられているのを確認した２体の馬頭観音石仏、あるいは麓に見られる石仏群（弘法大師像など）の可能性が高いと思われる。第１面下層には崩落堆積がみられることから、一度埋まった馬頭観音を掘り出して第３段階（昭和初期頃を想定）に据え直したというストーリーが描かれる。

では、上屋構造などにとらわれず、大士窟はいつごろから利用され始めたかを考えてみよう。前節で述べたように大黒窟が中世「やぐら」として、鎌倉などと同時期に造られたとするならば、既に開口している自然洞窟の周囲で選地することが妥当だと思われる。大士窟で出土した遺物では、寛永通寶文銭が最も時期を遡るが、採集した炭化材は 16 世紀後半を示すものがあり、中世末～近世前半において人の出入りを想定することができる。大黒窟の利用とともに大士窟も信仰の対象となり、使われるようになったと推測する。

さて、大士窟は窟内が整備され、出土遺物からも決定的な修行の痕跡を掴むことは難しいが、もともとは

山岳修験において参籠行を行う、いわゆる「修行窟」であることが指摘できる。修行窟とは「宗教的価値実現のための宗教的実践を行う場所としての、人が入ることのできる穴」（時枝 2005）とあり、洞窟や岩陰などのいわゆる石窟内に、修行を行った痕跡（崇拝対象の神仏・修法のための壇や炉など）が認められるとその可能性は高まる。大士窟の場合は、間仕切り状の施設を設け奥側に仏像を祀ったと推定されることから、ここで参籠した行者と本尊が交歓し、験力を高めようとしたのではないだろうか。

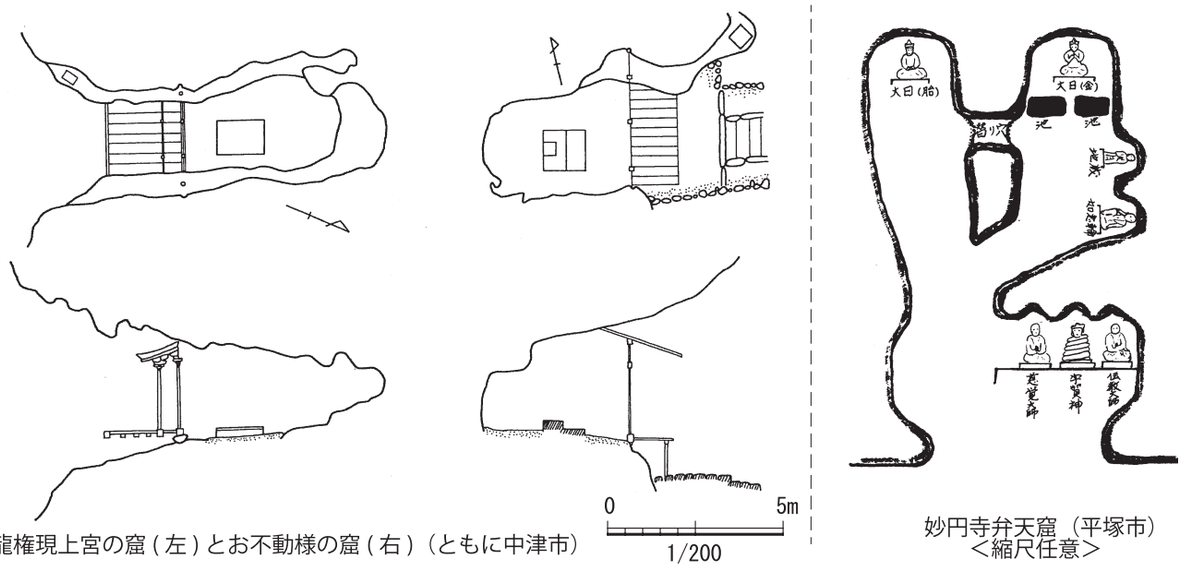
（2）全国の洞窟信仰遺跡との比較

広域的な視点から、大士窟について考察してみよう。修行窟を集成・検討した時枝氏によれば、大士窟はA―Ⅱ―1―①形式（自然窟のうち掘削によって部分的に加工した洞窟）に分類される。類例としては大分県中津市（旧山国町）のお不動様の窟や同市の龍権現上宮窟があげられている（第 23 図）。いずれも大士窟と平面形が類似しており、窟内に前面三間の堂を建てその前庭に床板を張る。建築物はいずれも後世のものだが、大士窟同様に側壁にほぞ穴が穿たれており、窟の内外を仕切る先行建築の存在が指摘されている（時枝前掲）。時期は 15 世紀頃と推定されており、山岳修験のメッカである九州英彦山の窟と遠く離れた大士窟の形態が類似していることは興味深い。窟内の建物について、花村利彦氏は、①建物が窟内に収まるもの、②窟前面に建物の一部を取り付けた形となるもの、③窟の入口部分で間仕切る形となるものに分類しており（花村 1981）、大士窟やお不動様の窟、龍権現上宮窟は③に当てはまる。他に群馬県嬬恋村鳴尾熊野神社奥の院の窟も、壁面に同様のほぞ穴があるという（時枝前掲）。

富山県立山の玉殿窟や虚空蔵窟も、その雰囲気は大士窟に類似している（富山県 1997、時枝前掲）。窟内に建築物は認められないが、配石などをして洞窟内を整備している。虚空蔵窟は平安時代の遺物が出土し、古くから使用されていたようだが、一方で近世の石仏も多く祀られている。信仰の移り変わった事例として参考となる。

また、修行窟のうちには、祭壇や本尊、炉、湧水・貯水施設が認められることがある。大士窟の掘りこみ遺構は祭壇となり得るか不明だが、特別な空間を造りだしていることは確実である。炉は石囲炉や集石炉を設置して火を焚く痕跡が認められる場合があるが、大士窟では焼土や炭化物の集中は認められるものの、それらが石で囲まれるようなことはなく、地面で直接火を焚いたようである。

ところで、密教（修験道）の世界では、胎蔵界と金剛界がありこの思想は曼荼羅にも代表される。修験道場である大峯山では、南の熊野側を胎蔵界、北の吉野側を金剛界とする。世界観は洞窟における信仰とも結びついており、藤沢市江の島弁天岩屋は途中で分岐があり東窟（右側）を胎蔵界窟、西窟（左側）が金剛界



龍権現上宮の窟（左）とお不動様の窟（右）（ともに中津市）

妙円寺弁天窟（平塚市）
＜縮尺任意＞

第 23 図　窟の諸例（時枝 1985、山本 1997 より）

窟とされ、石仏が安置される。同じく平塚市土屋にある妙円寺の弁天洞窟は、近世前半に掘られた洞窟で、同じように洞窟内部で左右に分岐し、左側に胎蔵界大日如来座像、右側に金剛界大日如来座像を配している。さらにこの左窟と右窟は潜り穴によって結ばれているという（第 23 図）（山本 1997）。これら両窟の姿は大士窟の奥壁にある横穴遺構に当てはまるものである。横穴は人の潜り込める大きさは有しているが、基本的には神仏を安置していた空間であると想定され、背景にこのような意識があったことは間違いないだろう。

第 4 節　隼遺跡の歴史的意義

（1）修行窟としての位置づけ

発掘調査の成果から検討を通じて、隼遺跡は信仰遺跡として重要な意義をもつことが理解できた。これら 2 つの窟が時期的に並立した場合、大士窟を修行の場（ある段階から礼拝も兼ねる）、大黒窟を礼拝の場として両者が一つの山岳修験における霊場となっていたと思われる。

さて、当地域は中近世に盛行する金峰山信仰と深く結びついており、3 つの入峰ルートのほか金桜神社などの関連社寺、窟も多く分布する。櫛原功一氏は山梨県内の修行窟と思われる諸窟を整理し、その性格に迫った（櫛原 2006）。修行窟は甲府盆地北縁部にその分布が多く、当地周辺にもいくつかの窟が確認される（第 24 図）。このうち、兜山の窟や鳥谷観音の窟などは、山岳の山頂付近に位置しており、隼遺跡は比較的ムラに近い位置と言えるだろう。牧丘町成沢地区にある広蔵院の窟も同じ秩父街道間道にある自然窟であり、ムラに近い寺院を伴った窟である。旧牧丘町には、室伏という興味深い地名がある。その語源については、山伏に対して“里（ムラ）にいる修験者”という意味のほか、ムロが窟を指すとして、修験者が参籠する窟が所在する地としての意味をもつとも見られている（清雲 2012）。当地の修験集団が実際に「室伏」と呼ばれていたのか、活動内容はどうだったのであろうか、今後の課題である。

第 24 図　牧丘地区の修験関連地図（櫛原 2006 をもとに作成）

また、隼遺跡の眼前をとおる秩父街道は、別称鎌倉道、行者道ともよばれることもあり、金峰山と富士山を結ぶ修験者にとって重要な道であったことは間違いなく、ここに修行窟としての立地の必然性があったと思われる。特に、金峰山の登り口付近であることは、入峰に当たって祈願・祈祷を行う絶好の場所であっただろう。金峰山は、両窟の主軸上（背後）に位置しており、金峰山と修験者が神仏によって結ばれることを希望したことだろう。

翻って、『甲斐国志』の記述を確認してみよう。大きさについては、一間を 1.8m と概算すると、大黒窟は「方二間（3.6m × 3.6m）」でほぼ正しいが、大士窟は「横七間（12.6m）深拾間（18m）」となる。19 世紀初頭から現在に至るまでに大士窟周辺で大きく山が崩れ、現在の姿になったことが想像されるが、言い換えれば大士窟の前方にあった空間は既に土砂として流出してしまっている可能性もある。一方、大士という名称については、麓の石仏群のなかに認められる弘法大師像にその由来を求められるだろう。

（２）窟の利用と変遷

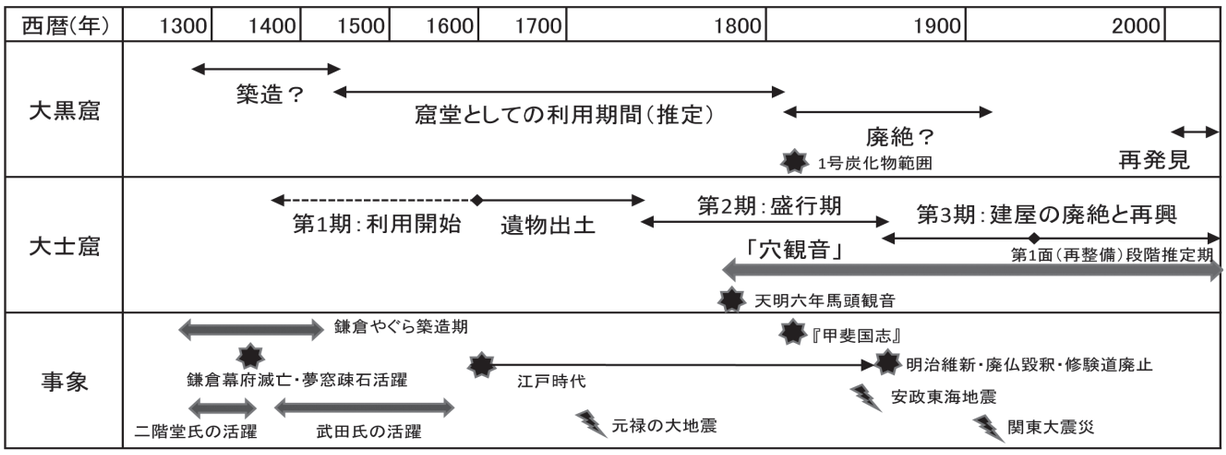
上述したように隼遺跡の両窟は、その利用の開始当初は山岳修験と密接な関わりをもっていたことが想定され、中世まで遡りうる可能性がある。当初から関わっていたかどうかは不明だが、麓には真言系修験寺院の林光院があったと推定され、寺院に伴う可能性が高い近世の石造物・石仏群も遺跡の麓に残っている（第２章第３節）。また、14 世紀前半には、鎌倉をはじめとして全国的な活躍を見せた夢窓疎石が、牧丘の地で恵林寺などの大寺院を開いている。疎石をはじめとした仏師や大寺院、鎌倉御家人たちの活躍によって、この地に「やぐら」状の石窟がもたらされた可能性もある。

いずれにしても、窟の利用開始にあたっては不明なことが多い。しかし、大黒窟･大士窟のいずれも、「堂」としての役割をもち、寺院が管理する施設となったと推測される。根拠は少ないが、大黒窟では須弥壇として石仏等を置いていた可能性が高いことや、大士窟の利用開始期に雑器の出土が極めて少ないことが挙げられる。やがて、大士窟は手を加え整備されていき、馬頭観音などの民間信仰と融合し、「穴観音」としての性格をもつようになる。大黒窟も大士窟が整備される時期におそらく役割が変わっていると思われる。

穴（窟）観音は、山梨県内においては万力霊岩寺、韮崎雲岸寺（七里ヶ岩先端に位置し、懸造の堂社をもつ）、御坂姥塚古墳（南照院境内にある６世紀後半の巨大な横穴式石室墳）などに認められる名称である。「穴観音」と呼ぶ信仰が全国的にどのように分布しているのかは不明だが、洞窟が信仰の対象となり石仏などの神仏が祀られることは多々ある。大士窟が「穴観音」として名を深めていった江戸時代末期から明治・大正年間は、窟内より陶磁器類や、ガラス瓶類、銭貨が出土している。窟内では、観音菩薩像等にお参りする際、御神酒を交わしたり、供物を奉じたりすることもあったのだろう。

一度盛行した大士窟＝“穴観音”も、建屋が消失することによって、もう一度その役割が変化したと思われる。建屋は第２段階から第３段階の間に失われたと考えられるが、その要因が天井の崩落であったか、意図的な破壊的なものであったかまでは特定できない。天井の岩盤崩落による自然的なものであれば、山梨にも被害があった大震災（安政東海地震：1854 年、関東大震災：1923 年など）の影響が想定でき、大黒窟の廃絶も同様に想定できる。一方で、明治維新において明治政府は宗教政策を布き、各地で廃仏毀釈が行われる。修験道についても明治５（1872）年に廃止の旨が布告されている。隼遺跡でも、廃仏毀釈の影響があった可能性は無ではないが、明治・大正年間の陶磁器も一定数出土していることから、明治維新後も継続的に

第６表　隼遺跡をめぐる年表



人が入って参拝等を行うことができる環境下にあったと思われる。

洞窟が修験者の修行のための場所から徐々に形を変え、民間信仰と強く結びつき、やがて寺院からも離れ地域住民の拠り所となっていったストーリーを読み取ることができたのは、隼遺跡における大きな調査成果だったといえる。大士窟内に馬頭観音が残ったことは、隼遺跡が主要な街道に面していることが大きいと思われる。なおも現在、穴の中から麓を通る国道 140 号を見守っているのである。

【参考文献】

井上哲朗　2004 「房総の「やぐら」―先刻・浮彫五輪塔の再分析―」浅野春樹・齋藤慎一編『中世東国の世界 2 南関東』高志書院

岡陽一郎　2009 「「やぐら」をめぐる現状と、その問題」狭川真一編『日本の中世墓』pp.247-250　高志書院

河西学　2014「間之田東遺跡の竈を構築する加工石材の岩質について」『間之田東遺跡』山梨市文化財調査報告書第 19 集

加藤政久　1997 「松島地方の洞窟は「やぐら」です」『日本の石仏』84　日本石仏協会

兜山遺跡群調査グループ 2005「笛吹市春日居町兜山遺跡群の調査」『山梨県考古学協会誌』15 号　山梨県考古学協会

九州山岳霊場遺跡研究会・九州歴史資料館　2017 『英彦山―信仰の展開と転換―』第 7 回九州山岳霊場遺跡研究会資料集

清雲俊元　2012 「富士山修験」『山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 285 集

櫛原功一　2006 「甲斐の窟の諸相」『山梨県考古学協会誌』16 号　山梨県考古学協会

櫛原功一　2012 「山梨県の山岳信仰遺跡」『山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 285 集

財団法人かながわ考古学財団　2005 『山王堂東谷やぐら群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 182

財団法人かながわ考古学財団　2008 『西方寺跡北やぐら』かながわ考古学財団調査報告 229

鈴木庸一郎　2009 「「谷」のやぐら、「山」のやぐら」『神奈川考古』第 45 号　pp.53-96　神奈川考古同人会

田代郁夫　1993 「鎌倉の「やぐら」―中世葬送・墓制史上における位置づけ―」石井進・萩原三雄編『中世社会と墳墓―考古学と中世史研究―』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集　名著出版

田代郁夫　1998 「中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換」『考古論叢神奈河』第 7 集　神奈川県考古学会

千葉県教育委員会　2012 『千葉県館山市千手院やぐら群』

時枝務　1985 「修行窟小考」『物質文化』45　物質文化研究会

時枝務　2005 『修験道の考古学的研究』　雄山閣

時枝務　2011 『山岳考古学―山岳遺跡研究の動向と課題―』考古調査ハンドブック 6　ニューサイエンス社

橋本裕行　2009『山岳信仰の考古学的研究―吉野山南部遺跡群の測量・踏査報告等―』

花村利彦　1981 「英彦山の修験道遺跡と文化財」五来重編『修験道の美術・芸能・文学（Ⅱ）』山岳宗教史研究叢書 15 pp.418-445　名著出版

牧丘町　1980 『牧丘町誌』

松平定能編　1814 『甲斐国志』（のち甲斐叢書刊行会 1974『甲斐叢書』十巻甲斐国志上　に所収）

松葉崇　2013 「三浦半島のやぐら」『三浦半島の考古学』　pp.9-14　公益財団法人かながわ考古学財団

間宮正光　2004 「能登半島における中世石窟の様相」『日本考古学』第 18 号　日本考古学協会

三村弘二・加藤祐三・片田正人　1984 『御岳昇仙峡地域の地質』地質調査所

山梨県教育委員会　1984 『秩父街道』山梨県歴史の道調査報告書第 2 集

山梨県埋蔵文化財センター　2009 『山梨県内中世寺院分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 260 集

山梨市教育委員会　2006 『杣口金桜神社奥社地遺跡』山梨市文化財調査報告書第 10 集

山本力　1997 「相模の弁天洞窟と石仏」『日本の石仏』84　日本石仏協会

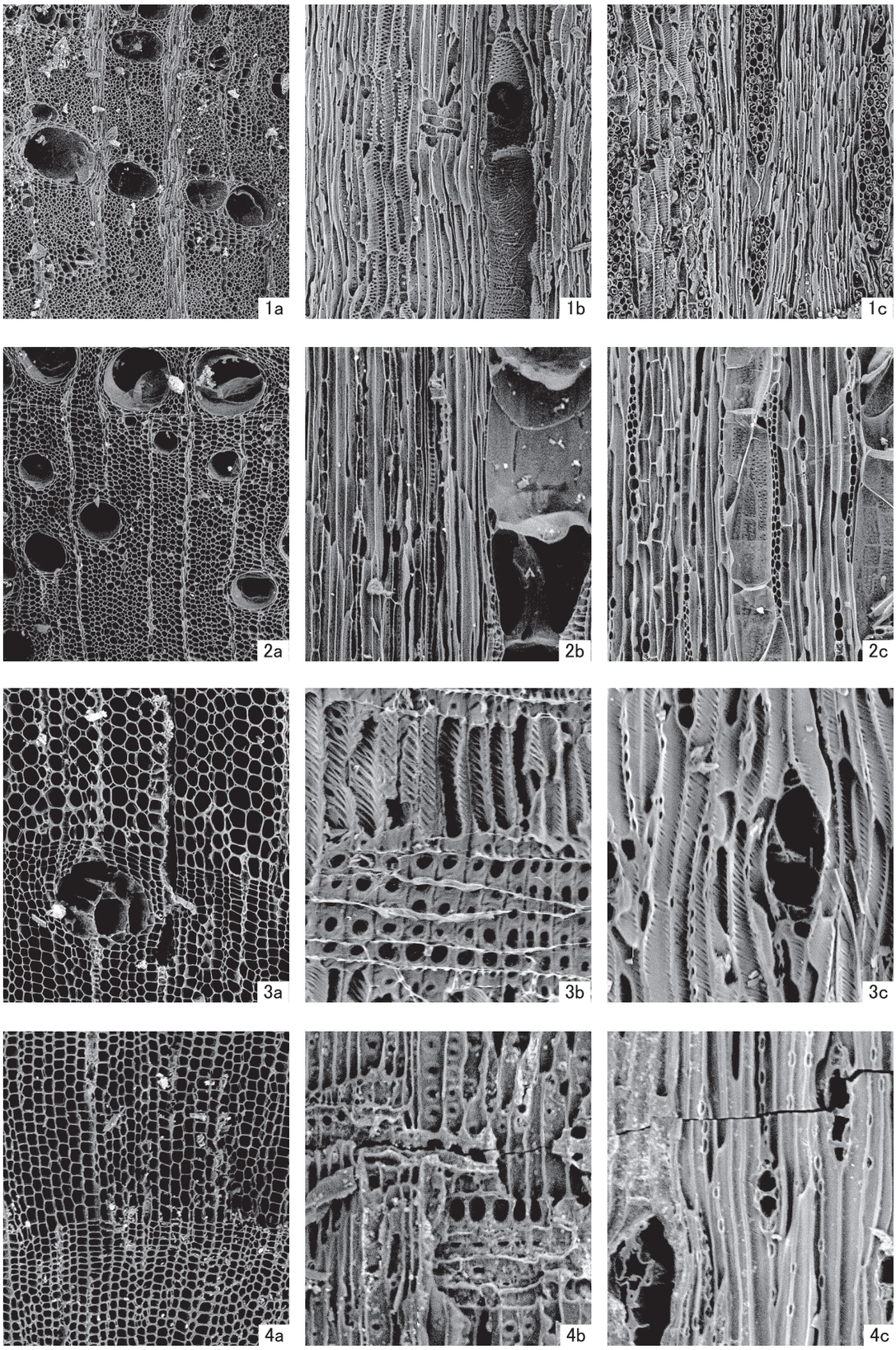
山本義孝 1995 「中世八幡信仰の窟―豊後国口戸窟の構造とその信仰―」『宗教民俗研究』第 5 号　pp52-73　日本宗教民俗学会

山本義孝 1997 「彦山四十九窟の信仰―玉屋窟を中心として―」『山岳修験』第 19 号　pp1-14　岩田書院

山本義孝　2006 「修験道」小野正敏・萩原三雄編『鎌倉時代の考古学』　pp.441-450　高志書院

渡部幹雄・高野弘之・原田昭一　1995 「旧豊後国における「やぐら」の新例―大分県大野郡緒方町大字辻、普済寺跡「やぐら」について―」『古文化談叢』第 35 集　九州古文化研究会

和深俊夫　1987 「福島県いわき市善長寺のやぐらについて」『史峰』12　※未見



1. ケヤキ（試料1）
2. オニグルミ（試料2）
3. マツ属複維管束亜属（試料3）
　a：木口, b：柾目, c：板目

4.マツ属複維管束亜属（試料4）
　a:木口,b:柾目,c:板目

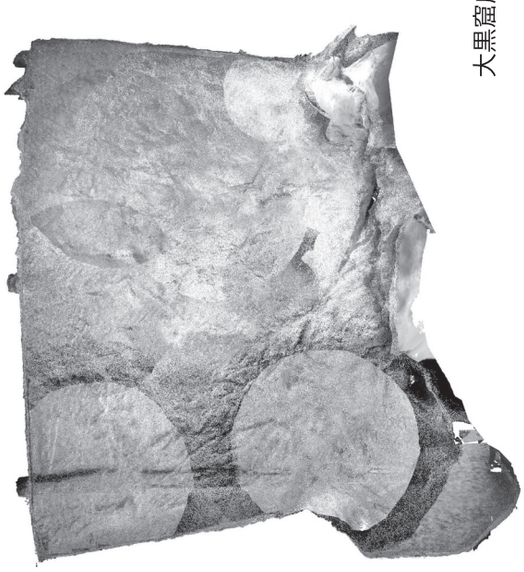
100 μm:1−2a
100 μm:3a,1−2b,c
100 μm:3b,c

樹種同定　写真

写真図版２

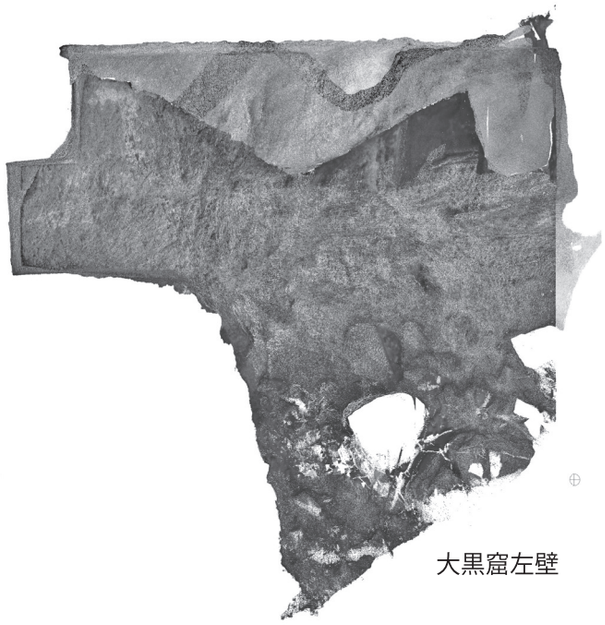
3D オルソ写真（大黒窟）

大黒窟右壁

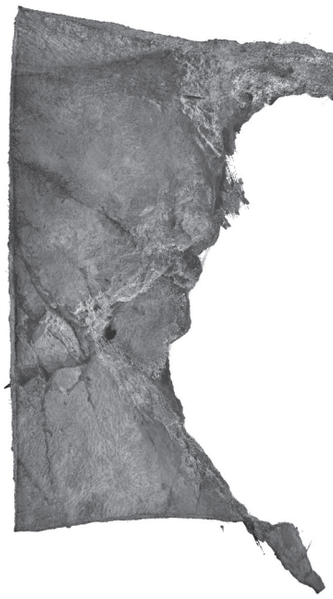


大黒窟床面

大黒窟奥壁

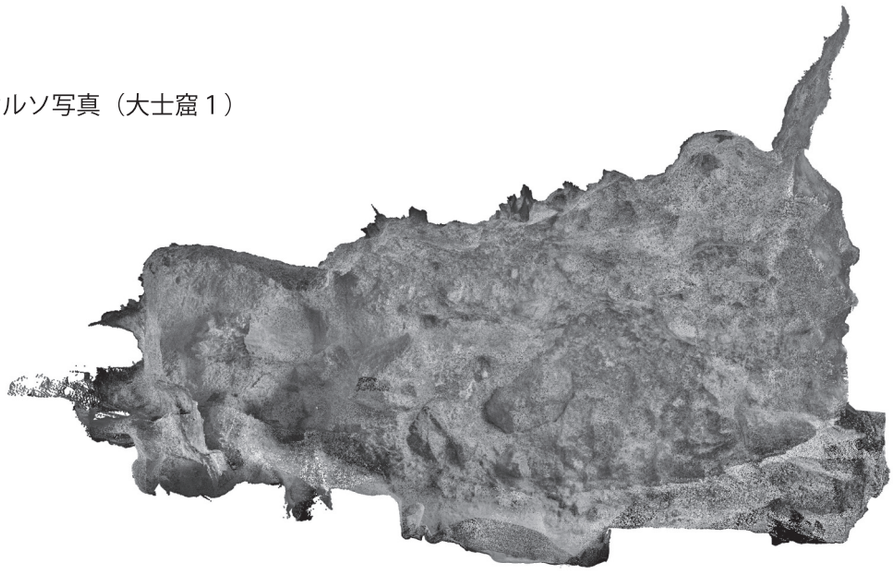


大黒窟左壁

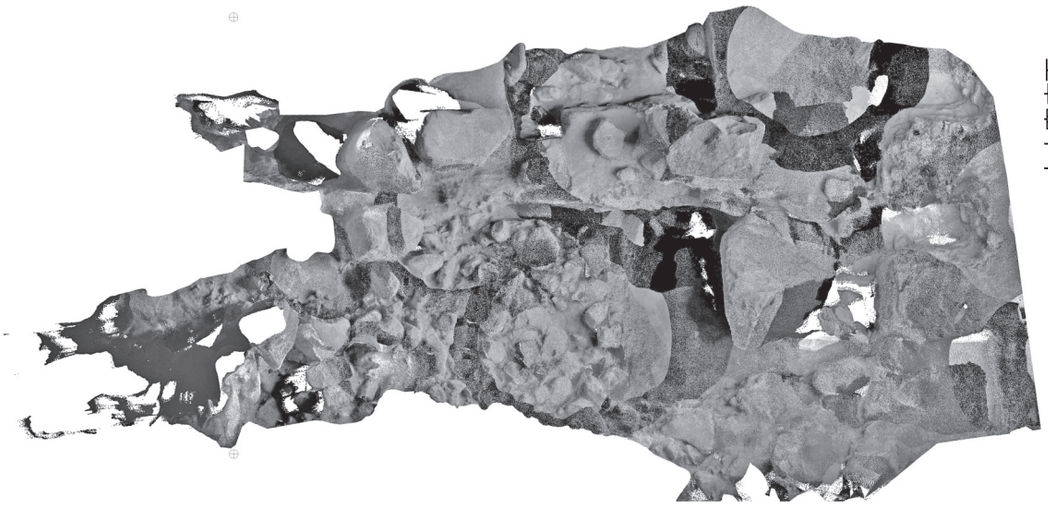


大黒窟天井

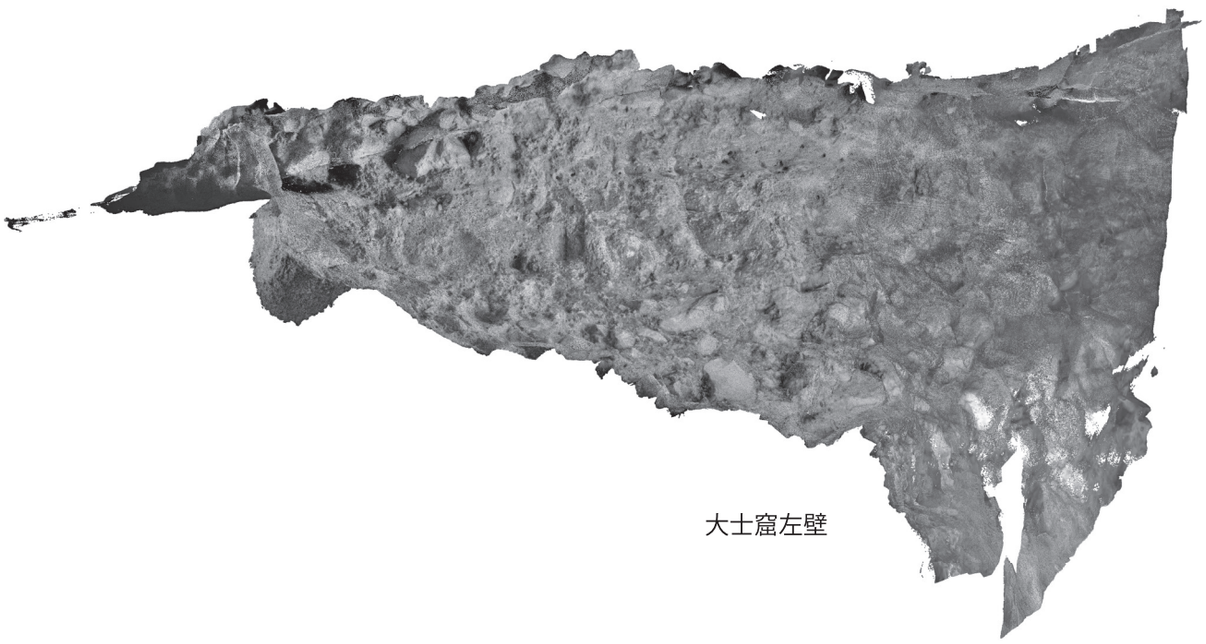
3D オルソ写真（大士窟 1）



大士窟右壁



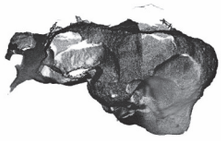
大士窟床面



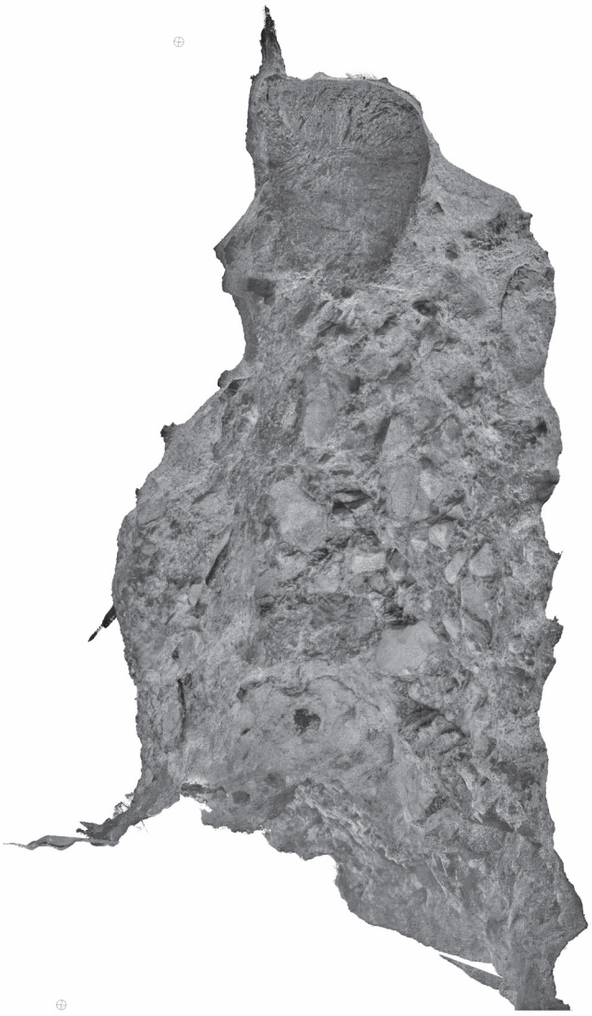
大士窟左壁

3D オルソ写真（大士窟 2）

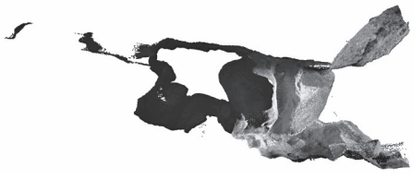
大士窟奥壁



大士窟 1 号・2 号横穴奥壁



大士窟天井



大士窟 1 号横穴右壁

大士窟 2 号横穴左壁

大士窟から東南方向の眺望

隼遺跡調査着手前　東から

大黒窟完窟状況　左壁

大士窟１面　検出状況

大士窟 4 号トレンチ土層堆積状況

大士窟 1 号トレンチ土層堆積状況

大士窟掘りこみ遺構

大士窟　奥側　完掘状況

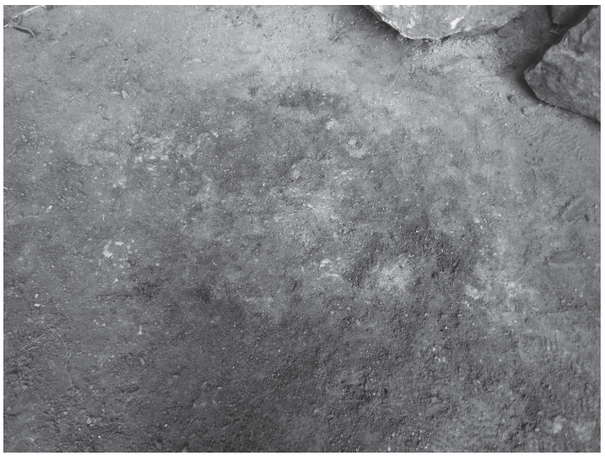
大黒窟トレンチ調査状況

大黒窟天井落盤状況

大黒窟右壁調査着手前

大黒窟右壁完掘状況

大黒窟左壁調査着手前

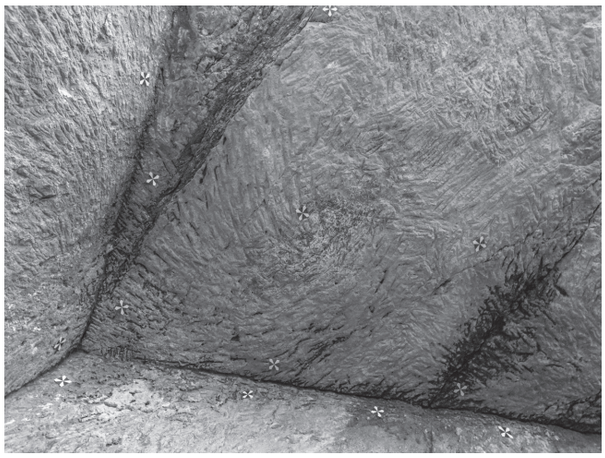


大黒窟１号炭化物範囲　検出状況

写真図版 10

大黒窟床面　完掘状況

大黒窟　1 号溝

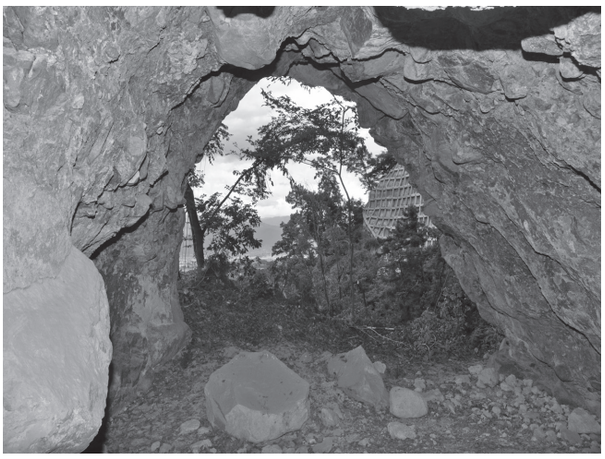


大黒窟天井部

大黒窟　落盤していた天井

万力霊岩寺の窟 (東窟)

万力霊岩寺の窟 (西窟)

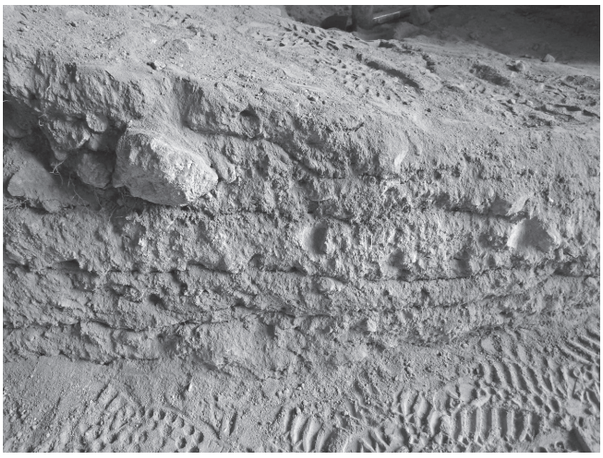


大士窟内から開口部 (調査前)

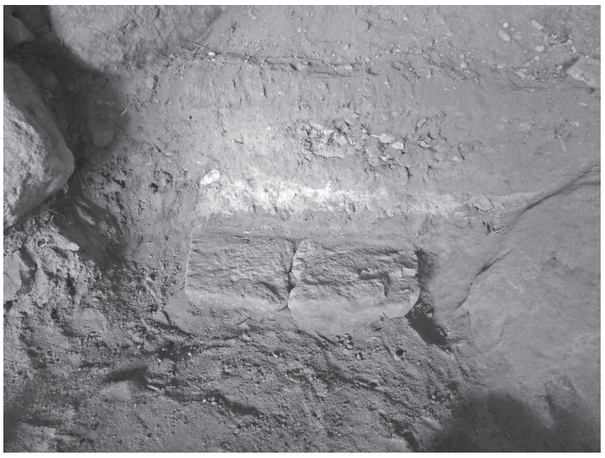
大士窟　右壁刻字

大士窟内　馬頭観音（天明六年銘）

大士窟　1 面検出状況　全体



大士窟 1 号トレンチ土層堆積状況



大士窟 2 号トレンチ土層堆積状況

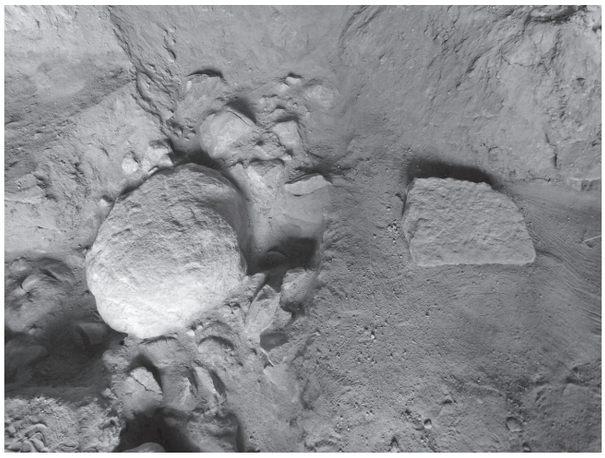
写真図版 12

大士窟 5 号トレンチ土層堆積状況

大士窟 6 号トレンチ土層堆積状況

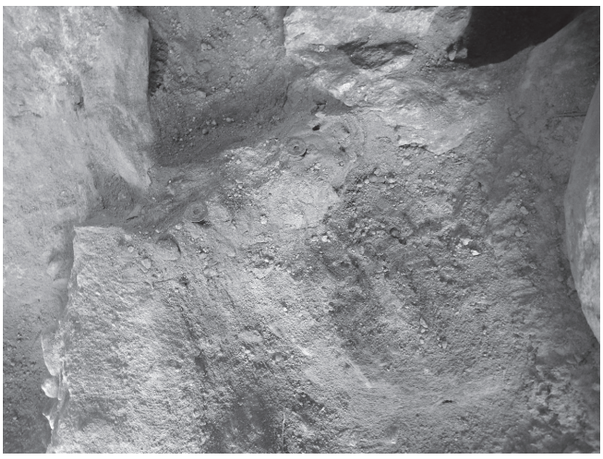
大士窟 2 面　遺物出土状況

大士窟 2 面検出状況

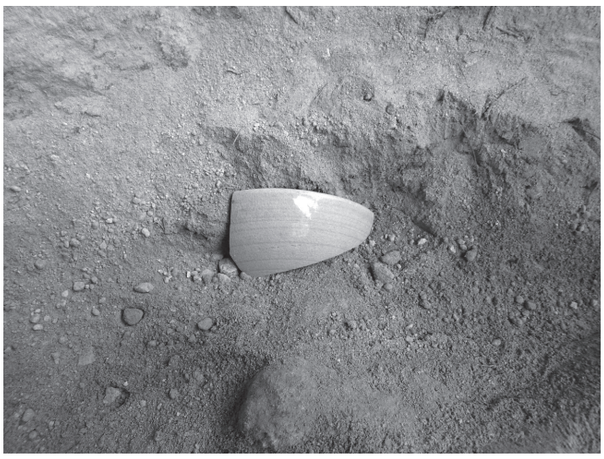


大士窟　3 号・4 号礎石検出状況　南から

大士窟　1 号トレンチ深掘状況



大士窟　2 面　古銭出土状況

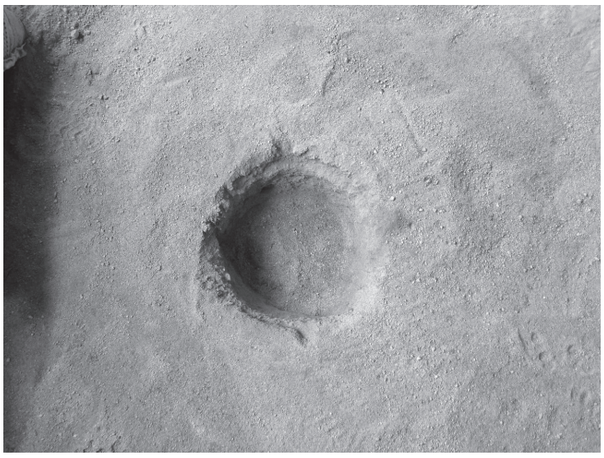


大士窟　第 1 段階　肥前陶器出土状況

大士窟　1 号台座検出・遺物出土状況

大士窟　1 号・2 号横穴　完掘状況

大士窟　1 号ピット検出状況



大士窟　1 号ピット完掘状況

写真図版 14

大士窟　1 号横穴・1 号台座

大士窟　礎石列と壁面加工

大士窟完掘状況　右壁

大士窟　2 号横穴

大士窟　掘り込み遺構天井部

大士窟　完窟状況　南西から

大士窟　安全設備設置状況

時枝努氏指導

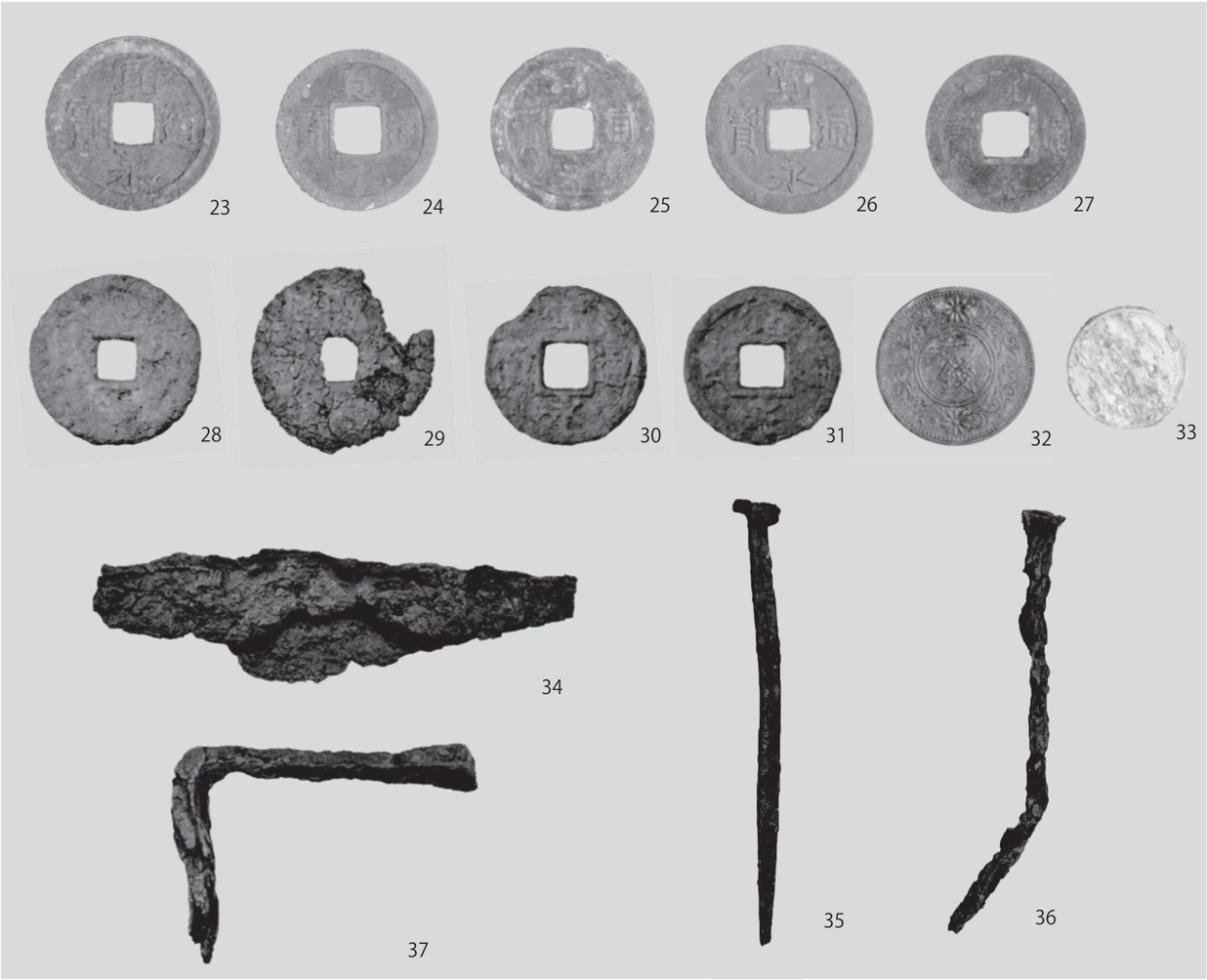
3D レーザー測量

窪平泥流堆積物露頭

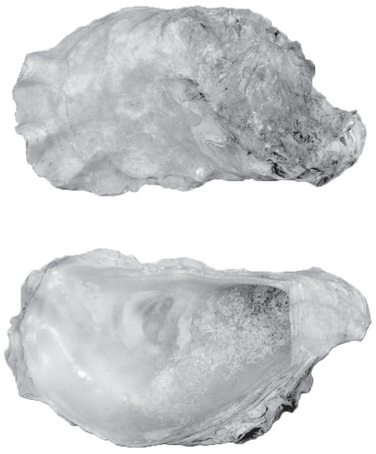
大士窟内　馬頭観音（石仏 2）

写真図版 16

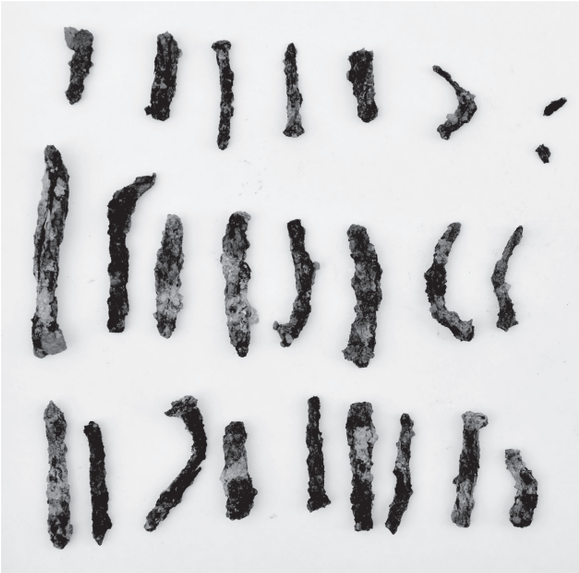
土器・陶磁器・ガラス製品（縮尺任意）



銭貨・金属製品（原寸大）　0　5cm

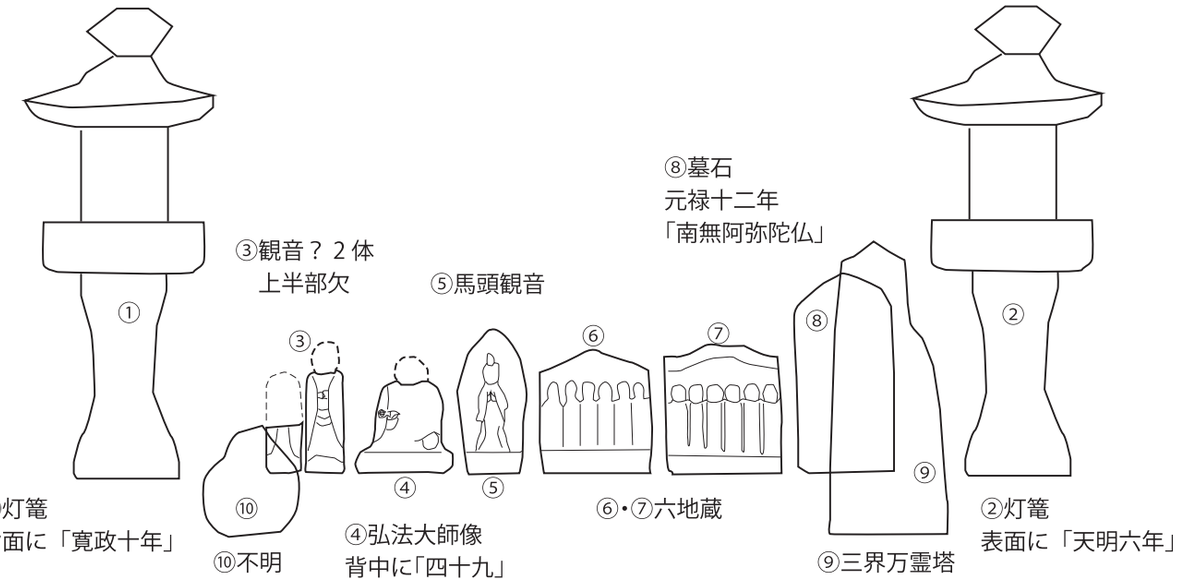


第 2 面出土　牡蠣 (S=2/3)



第 2 面出土　小釘 (S=2/3)　0　5cm　S=2/3

麓の石造物・石仏群



弘法大師石仏・観音石仏

六地蔵・墓石

報　告　書　抄　録

ふりがな	はやぶさいせき
書名	隼遺跡
副書名	国土 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 316 集
編著者名	熊谷晋祐・加速器分析研究所
発行者	山梨県教育委員会　山梨県県土整備部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923　055-266-3016
発行日	2018 年 3 月 16 日
印刷所	青柳印刷株式会社

ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積	調査原因
はやぶさいせき 隼遺跡	山梨氏牧丘町隼字坂ノ上 2398 番 8 外	19205	09087	35°43'31"	138°42'20"	20160601～20160902	61㎡	道路
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	その他（窟）	中世・近世・近現代	２基の窟遺構 遺構内に礎石等あり		陶磁器・銭貨・ガラス瓶		『甲斐国志』にある「大黒窟」と「大士窟」の調査。いずれも当地の修験との関わりが深い。大黒窟は「やぐら」状を呈す。	

要約

隼遺跡は、山梨市牧丘町隼地区にあり、隼山の東斜面に開口する２基の窟遺構である。２基は江戸期の地誌『甲斐国志』に「大黒窟」「大士窟」とあり、いずれも記録保存のための調査対象となった。大黒窟は人工の窟で、奥壁に須弥壇を造りだし、床板を張る構造となる。形態的には鎌倉地方に多い「やぐら」と呼ばれる石窟に類似している。大士窟は自然の洞窟だが、一部が手を加えられている。調査から３期にわたる窟の利用形態が想定され、江戸時代末ころの第２段階では内部に建物を有する構造であったことが想定出来る。二つの窟は、それぞれ寺院に付随する窟堂としての役割を有しながら、金峰山を初めとする当地の山岳信仰（修験道）や民間信仰とも結びつき、秩父街道における信仰施設として重要な役割を担っていたと想定される。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 316 集

隼　遺　跡

国道 140 号落石防止・崩落防止対策工事に伴う発掘調査報告書

印刷日　2018 年 3 月 13 日
発行日　2018 年 3 月 16 日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曽根町 923
TEL 055-266-3016
maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp
発　行　山梨県教育委員会
山梨県県土整備部
印　刷　青柳印刷株式会社